
IS<インフィニット・ストラトス> 流星の騎士

ソラ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラatos < 流星の騎士

【Zコード】

Z0640S

【作者名】

ソラ

【あらすじ】

女性にしか扱えないIS インフィニット・ストラatos の操縦者を育成するためのIS学園。そこに入学した『世界で唯一ISを使える男』である織斑一夏がIS学園で生活している時、そこの一夏の幼馴染が転校してきた。

1話 プロローグ（前書き）

まいしへお願ひします

1話 プロローグ

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」 宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。総機体数は世界で467機。「白騎士事件」と言う事件を契機に「パワードスーツ」として軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移つていった。十年経つた現在では世界各国の軍に第2世代機が標準配備され、第3・第4世代機の研究開発が進んでいる。その戦闘能力はそれまでの主力であつた戦闘機や戦車をも凌ぎ、世界そのものを変貌させた。しかし、そのISの唯一の欠点、それは女性にしか扱えない事。これにより緩やかに男尊女卑から男女平等に変わつていた世界は急激に女尊男卑が当たり前となつた。

「シンク口率、97% や、やつと……出来た……」

ここはとある会社の研究室。俺、臯月 さつき 疾風はやかは眠い頭を何とか動かして目の前の物を完成させた。

「疾風、順調か?」

と言つて研究室に入つてきたのは黒いスーツを着て、俺と同じ黒髪を肩甲骨まで伸ばし、真紅の鋭い目に眼鏡を掛けている美青年でこそBRAVE社の社長をしている俺の兄、臯月 さつき 黒斗くろととウサギの耳のカチューシャをつけ此方も負けない程のスタイルをもつ女性、篠ノ乃 束さんが入つてきた。

「ああ、兄さんそれに束さん。ちょうど良かつた。今出来たよ、俺のIIS『^{ミーティア}流星』がね」

「おー……さすがハヤ太君。まさか本当にあの性能の機体を作つちやうとは。ハヤ太君はほんつとつづく人間離れしてゐね~」

「束さん…それけなしていいるのか褒めているのか分かりませんよ」

ちなみにハヤ太君とは前に某借金まみれの執事のアニメを見てから、そう呼ぶようになった。

正直、勘弁してほしいがこの人に何を言つても意味無いんだよな……

「大丈夫、大丈夫褒めてるつてば。うんうん、やつぱりクロくんもだけど、ハヤ太くんも私より天才だね」

「はあ~もう良いです。それで兄さん、千冬さんへの連絡を頼むよ」「分かった。それでは数日中に転入出来るようにしてやる。」

「ああ、頼むよ。それじゃ俺は今日一日は寝るよ。さすがに三日徹夜はキツイな」

そういうや、もう三日数日流星作るのが楽しいからつい寝るのも忘れていたな……

兄さんは完全に呆れているな。

「三日つて…お前その状態でEISを作りながら、会社の仕事もしていたのか？」

「ああ、そうだけど……」

「頼むから、体を壊すなよ。お前は俺の大切な家族で^{フレイ}E社の副社長なんだからな」

「へい。それじゃ、俺は寝る。お休み」

俺はそのまま研究室を出て、隣にある自分の部屋のベッドにそのまま入り、そのまま寝た。

1話 プロローグ（後書き）

感想、アドバイス等お願いします

2話 再会

「へえ～ここがIS学園か。写真で何度か見たが実際に見るとでかいな」

流星ミーティアを完成させた三日後、俺はIS学園の白い制服を着てIS学園の前にいた。

「久しいな、疾風」

久しぶりに聞いた声にそちらを向くと黒いスーツを着た女性、織斑千冬さんが立っていた。

「久しぶりですね、千冬さん。すいません、学園の仕事大変でしょうに、俺のために抜けてきてもらつて」

「いや、今はひと段落ついたからな。ついて来い、歩きながら話そう」

「分かりました」

そう言って、俺は千冬さんと一緒に歩き出した。

「千冬さん、そういうえば俺のクラスってどうですか？出来れば色々と知つていいの千冬さんのクラスが良いですけど……」

「ああ、クラスについては一夏と同じ私のクラスの1・1だ。それとこの学園では織斑先生と呼べ

「分かりました」

しかし、一夏と会つのも久しぶりだな。そう言えばあいつの鈍感さは治つているかね。いや、それより悪化している可能性があるな。範が可哀想だな……

「それとお前のH.I.J事だが模擬戦とかではリミッターを外すなよ。黒斗からの情報には目を通したが、お前の身体能力とあの性能で本気を出されたら、何が起こるか分からんからな」

「分かつてますよ。あと流星^{ミーティア}と俺の情報はあまり口外しないでください。色々厄介事が起こるかもしれないので」

「分かつていい。それとこれはお前の部屋の鍵だ。予め空けていたから一人部屋だが万が一また男が転校して来たらお前の部屋に入るよつこにするからな」

「了解

その後は千冬さんに簡単に学校の説明を受けて校内に入った。

ふう、このH-S学園に入つてやつと一ヶ月経つたな。

最初は女子しかいないクラスのブレッシャーとか授業とかで四苦八
苦したけど、笄とも再会したし、最近じゃ鈴も転入ってきて再会で
きてまあ良い事もあつたな。これで疾風も来れば良いんだが、さす
がにこの学園に来れないよな。あいつ…急にいなくなつて今は何や
つてんだろうな……

「それでは朝のHRを始めん」

そつ言つて入つてきた千冬姉の言葉で朝のHRが始まった。

「今日は転校生を紹介する。皐月、入つて來い」

その瞬間、クラス中がざわめいた。

つて、ちょっと前に鈴が2組に転入してきたのにもつ転入つておか
しいだろ？。それに皐月つて珍しい名字だし……疾風と同じ名字
だな。

「失礼します」

「なッ…………！？」

俺は教室に入ってきた人を見た瞬間、思わず立ち上がりてしまった。
なんせ、そこにいたの…………

「は、疾風…………」

そこにいたのはさつき考えていた幼馴染だった。

おーおー一夏の奴、良い感じに驚いているな。まあ、そりやあ、そうか。それに窓側で驚いてるのつてもしかして幕か？束さんからは聞いていたがまさか同じクラスになるとはな。

「織斑わっわと席に座れ、邪魔だ。それと皐月、挨拶をしろ」

「皐月 疾風だ。まあ…特に言ひ事が無いので一年間よろしく頼む」

「わやああああああ―――っ！」

即座に耳を塞いだがこのクラスうるさいな。ソニックウェーブが起

「ひつたかと思つたぞー！」

「男子……まさかの一人目の男子……」

「しかもつけのクラス……」

「何あの人！？すげく格好いい！？」

「人間に生まれて良かつた……！」

確かにこの学校に俺がいるので珍しいのは分かるが……そこまで騒がしくしなくても良いじゃないのか？

「騒ぐな。今は休み時間ではないぞ」

パンッと手を叩いて、千冬さんの一声でつるさかつたクラスが一瞬で静かになつた。さすが千冬さん一聲で静かにするとは。

「皋月、お前の席は後ろの席だ。むさと座れ

「はい」

俺は千冬さんに言われた通りに空いていた席に座つて、連絡事項に話を聞いてHRは終わつた。

「しかし、久しぶりだな。疾風。」

その後、すぐに一夏や篠と話したかったが休み時間になつたらすぐ
に女子の包围網が俺を包んで一夏や篠と全然話せなかつた。そして、
なんとか包围網から脱出して食堂に来ると一夏、篠が居る席を見つ
けて、なんとか合流できた。

「そうだな。会つのは6年ぶり、か……」

「だが、どうしてお前がこの学園に入れたんだ?まさか、お前もエ
スを操縦できるのか?」

「ああ、色々あつてな。千尋さんの推薦で入れさせてもらつたんだ」

「やうか

「あ、やうだ。篠、お前に渡すものがあるんだ」

俺は思い出して、ポケットに入っていた手紙を篠に渡した。

「これは?」

「東さんからだ」

「な、なんだと…？」

篠は驚いて、すぐに手紙の内容を見た。まあ、驚くのは無理ないか。
I.Uを発表してすぐに姿を消した姉からの手紙だからな。

「な、なんて書いてあるんだ？」

「……」

一夏は篠にそう聞いたが篠は何も言わず、手紙を見ていた。

「疾風、あの手紙の内容お前を知ってるのか？」

「ああ、だが教えられないぞ」

俺はそう言いながら、味噌汁を飲む。うん、旨いな。

そのあとは篠は無言で手紙をポケットに入れて、飯を食べていた。

2話 再会（後書き）

感想、アドバイス等お願いします

設定及び、オリキャラ紹介

『主人公』

【名前】
さつき
臯月

【姓氏】
はやて
疾風

【髪色】

漆黒

【瞳の色】

真紅

【容姿】

端正な顔立ちで髪型は首の後ろで束ねている。

【好きな食べ物】

和食（特に蕎麦、天ぷら）、日本茶

【特技、趣味】

機械いじり、システム構成、ハッキング、星観

【利き手】

左利き

【プロフィール】

学力、武術など多方面に際立つた能力を持つ天才。一夏、第とは小さい頃からの幼馴染だが過去にあつたことで第が転校する前に一夏、第の前から消えた。

真面目で陽気な性格であり、基本相手の態度に関わらず基本的には

友好的に接する。一夏みたく鈍感では無く、なにかと人の感情に敏感で篠の恋の応援をしている。

兄である黒斗が経営しているB R A V E社の副社長をしており、それなりに各国の政財界などに影響を与えることができ、交渉などでほとんどの国の言葉を流暢に話せる。

専用I Sは『流星』^{ミーティア}

【名前】
皐月 黒斗

【髪色】
漆黒

【瞳の色】
真紅

【容姿】

顔は美形で鋭い目つきの上に眼鏡を掛けている。髪は肩甲骨ぐらり一直到伸ばしている。

【プロフィール】

疾風の実兄で自身と疾風が立ち上げたB R A V E社を数年で量産機I Sのシェア世界第1位まで上り詰めたほどの分析やマネージメントの天才。その功績で疾風同様に各国の政財界などに影響を与えることが出来る。

『I S 設定』 ミーティア 流星

疾風が自分で作ったI Sで現在開発が進んでいる第4世代を凌駕する性能を持っている。

外見は「ダブルーオークアンタ」に似ている
カラーリングはメインカラーは白ベースでサブカラーが金。
疾風が作ったオリジナルのコア「GNコア」が2基搭載しており、
2基のGNコアを同調させる事で粒子生産量を2乗化をせることが
出来る。待機状態は白と金の腕時計。

武装

・GNソード

本機の主兵装。ソードモードとライフルモードの2種類に変形可能。
GNソードビット6基を刀身に合体させることで、ソードモードは
バスター・ソード、ライフルモードはバスター・ライフルへとそれぞれ
強化される。不使用時は右腰にマウントされる。

・GNソードビット

GNシールドにマウントされているビット兵器。形状と大きさの異
なるA、B、Cの3種のビットを各2基ずつ、計6基装備する。ま
た、それぞれグリップも内蔵しており、手に持つて使う事もできる。

・GNシールド

GNコアの1基を内蔵する右肩の横に浮いている非固定浮遊部位型の専用シールド。GNソードビットのキャリアにもなっている。

- ・GNビームガン

GNシールドの上部に1門内蔵しているビーム砲。元々迎撃用だが、一つのGNコアの恩恵で十分攻撃用に使える。

オリジナルコア

GNコア

疾風が束からISコアの理論を習つて、設計したオリジナルコア。常にエネルギーとなるGN粒子を生産し続けるため、過剰な使用をしない限りエネルギー切れが起こることはない。通常のISとは違い、コアと機体のシンクロ率が高くないとオーバーロードをして損壊する危険がある。

GNコアのデータはBRAVE社のバンクのトップシークレットに入つていて、見られるのは疾風と黒斗しかいない。

現在、GNコアは流星^{ミーティア}に搭載されている2基とBRAVE社で開発途中の1基しか存在しない。

オリジナル企業

BRAVE社

黒斗、疾風が立ち上げた会社で黒斗のマネージメントと疾風の技術で数年で量産機ISのシェア世界第1位になつた大企業。現在は第3世代ISの開発、第4世代ISの研究を主にしている。また束が行方不明になつていた時に隠れていた場所もある。

BRAVE社製の第2世代型IS。性能が安定しており、汎用性が高い機体。騎士甲冑のような形態をしている。機体カラーは白と青。

■ ブロキオン
色白

ブレイヴ

3話 クラス対抗戦当日

俺が転入して数日経つて、クラス代表である一夏を強くしようと放課後には簎とイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと一緒にISの操縦練習をしていた。

そして練習風景を見て一つ分かった事がある。セシリアの反応を見ていると一夏に惚れているな。何度か簎と一緒にからかつたりするとおもしろいくらいに反応していたからな。これは確実に一夏をめぐつて、未来に修羅場を見るかも知れないな。

そして、今日はクラス対抗戦当日、第一回戦一夏对中国代表候補生の鈴の試合だった。鈴というのは凰鈴音^{ファンリンイン}。一夏のサークル幼馴染で紹介してもらつて何度か話をする機会があり、話をするようになつた。ちなみにファーストは俺、セカンドは簎らしい。

そして、今は簎、セシリアと一緒に山田先生、千冬さんがいる場所でリアルタイムモニターを見ていた。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスの声で一夏と鈴が空中で5メートルほどの距離を取り向かい合つた。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

一夏と鈴の会話は開放回線オープンチャーンネルで聞こえてきた。

「言つておくけど、IJSの絶対防衛も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられるのよ」

たしかに代表候補生レベルにもなれば殺さない程度にいたぶることは可能だな。

ちなみに今、鈴は一夏によつて踏まれた地雷が爆発して、とても機嫌が悪いようだつた。まあ、その前も若干機嫌は悪そつたがな。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響いたブザーが切れると瞬間、一夏と鈴は動いた。

ガギインッ！

一夏が瞬時に展開した白式の唯一の武装である刀剣の形をした雪片ゆきび式型ひがたが弾かれた。あれは衝撃砲か。

一夏はすぐにセシリ亞に教わった三次元躍動旋回を使い、鈴を正面に捕らえた。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど

鈴が手にしている双天牙用という両端に刃の付いた、というより刃に持ち手が付いているそれを、鈴はバトンのよつて回し縦、横、斜めと角度を変えながら一夏に斬り込む。

「 甘いっ……」

一夏はすぐに隙を突いて距離を取ろうとしたといひで鈴の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間に一夏は吹き飛ばされていた。

「なんだ、あれは…………？」

篝はモニターを見ていた、つぶやいた。それに答えたのはセシリ亞だった。

「『衝撃砲』ですわね。空間に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ちだす

「

ブルー・ティアーズと同じ第三世代兵器ですわと続いたが筆はすでに聞かずに一夏が苦戦しているモニターを見ていた。

そして、セシリアは説明を終えると鈴の開放回線オープンチャーンルで聞こえてきた。

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍砲》りゅうぱうは砲身も砲弾も田に見えないのが特徴なのに」

その通り。砲弾が目に見えないならまだしも砲身も見えないのは辛いからな。しかもこの衝撃砲、砲身射角の制限もほぼ無いようで真上、真下に加え真後ろまで撃つてている。射角はあくまで直線だが、鈴の能力が高く、無制限機動と全方位への軸反転、基礎のすべてを高いレベルで習得しているな。

それらを無理なく融合しているんだ。一夏にとってかなりの強敵だな。

だが、ここが終わる一夏じゃないだろうな。

「鈴」

「なによ?」

「本気で行くからな」

その一夏の言葉に真剣さが伝わってきた。次で何か仕掛けるな。

「な、なによ……そんなこと当たり前じゃない……とにかくつ、格の違ひのを見せてあげるわよ！」

鈴は一夏の氣概に押されながら、また双天牙月を一回転させて構えなおした。一夏は鈴の衝撃砲をかわしながら、加速体勢になつて『イグニッショングースト瞬間加速』を使うつもりだな。確かに使いどころを間違えなきや、代表候補生と互角に戦りあうことは可能だな。

「うおおおおっ！」

一夏は『イグニッショングースト瞬間加速』で一気に鈴に接近して刃が届きそうになつた。これで決まったな。

ズドオオオオンッ！－！－！

その瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走つた。鈴が放つた衝撃砲ではない。威力も範囲も桁違いで違う。

そして、黒煙の中から黒い全身装甲のフル・スキン一夏がいた。

そして、今の衝撃はそのアンノウンがアリーナの遮断シールドを通して入ってきた衝撃のようだった。

当然、その場にいた一夏と鈴は驚いて口論になつてゐるがアンノウ

ンはゲーム兵器で砲撃をしてきた。

一夏はすぐに気づいて間一髪で鈴を抱えてその場から飛びのいた。

モニターを見ていたセシリ亞、篠、山田先生は畠然としていたが千冬さんだけがすぐに俺を見て頷いた。

「（なるほど、そういひとですか。千冬さん。）山田先生。ちょっと席空けてください」

「えつへは、はい！」

俺の言葉で山田先生は驚いて飛びように席を空けた。俺は気にせず、席に座つて、慣れているキーボードを叩いた。

（遮断シールドのレベルが4に上げられて、扉が全てロックされているな。あの辺のせいか……だが、この程度なら）

ピッ

「ハッキング完了、システム復帰。織斑先生、俺にIIS使用許可をください」

「分かつた。だが、リミッターを外すなよ」

「了解」

「先生！わたくしにもHIS使用許可を一いつでも出撃できますわー。」

「駄目だ」

「なんですか！？」

「セシリ亞お前のブルー・ティアーズの装備は1対複数向きだろう。それにお前は連携訓練はしたことあるのか？その時の役割は？ビットはどうな風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを講定している？連続稼動時間」

「わ、わかりました。わかりましたわ。もう結構ですわ！」

俺の永遠に続ける指導を聞いて、セシリ亞はすぐ両手を揺らして『降参』ポーズをした。

「それで良いんだよ。それと織斑先生。3年生の突入隊は入れないでくださいね。入ってきて怪我したとかどうるさく言われるのはないませんから」

「分かった」

「それじゃ、行ってきます」

俺はいた部屋からピット・ゲートに行つた。ゲートは開いていていつもいけるようになっていた。

「流星^{ミーティア}、田標を駆逐する。」

右手首に付けていた白と金の腕時計が変換して白と金の粒子が体を覆^{ティア}つた。その白と金の粒子がはじけて消えると、俺の体にIS^{ミー}流星^{ミーティア}を装備した。

「行くぞ、流星^{ミーティア}」

俺がそうつぶやくと各スラスターから放出されるGN粒子が一気に増え、一瞬で最高速になり、ピットから飛び立った。

3話 クラス対抗戦当日（後書き）

感想・ご意見お願いします

疾風がアリーナに出ると一夏と鈴がアンノウンと戦っていたがかなり苦戦していた

「あんた、誰よ！－急に入ってきた」

「一夏、鈴。お前達は退け。後は俺が引き継ぐ」

「お前……疾風なのか？」

「ああ、そうだ。とにかく退け。お前達のエネルギーは空寸前だろ
う。ここにいられても邪魔になるだけだ」

「ぐつ……分かった」

一夏は少しためらつたが、すぐに鈴を連れてピットに戻った。

そして、疾風が目の前のバイザーを通して、アンノウンを見るとす
ぐにこの文字が出た。

生命反応、無し

「……無人機か。それならおもいつきりやらせてもらひうぞー」

疾風は瞬間加速で距離を詰めて、腰にマウントされているGNソードを居合のように抜き放ちアンノウンの左腕を跳ね飛ばした。アンノウンはすぐに後退して、右腕のビームキャノンを構えた。

「逃がすかよ」

疾風もすかさず距離を詰め、構えていた右腕も跳ね飛ばして、胴体に一閃を入れるとアンノウンは倒れ、沈黙した。

「ミッションコンプリート」

『まだです皇月君！学園に所属不明機多数接近しています！』

『…皇月、校外でのIIS使用を許可する。接近するアンノウンを撃退し!』

「了解」

疾風がアリーナから飛翔して少し飛んでいくとそこには赤を中心としたカラーリングで手にはランスを持っている無人機が10機いた。そして疾風が一番注目したのは背部から放出している赤い粒子だった。

「さつきと同じ無人機か…だが、あの粒子…まさかGNコアかよ」

セツツリーブやいているとアンノウンたちは持っていたビームライフルを構え、一斉に撃つてきた。疾風はすぐに上に飛んで回避した。

「さて、それじゃ……」

疾風は回避しながら右肩のGNシールドから6基のソードビットを放出してアンノウンたちに飛ばした。アンノウン全機はすぐに回避行動に入つたがソードビットはすぐに追いかけ一瞬で6機を破壊して、GNシールドに戻ってきた。

「あと4機」

疾風がつぶやきながらGNソードを構えて、4機との距離を詰める。4機は射撃を行つがそれを全て躱して、接近した。

距離を詰められた1機はランスで打ち合おうとランスを構え、突撃するが疾風はGNソードでランスともども上半身と下半身を簡単に切り裂いた。

「あと3機」

後ろで爆散しているが疾風は構わず、近くにいた敵機に切り込む。だが、さすがにさつきのを見て学習したのかランスを捨て、ビーム

サーベルを持つて打ち合いになつた。そして、疾風の背後に回つていた敵機はランスを構えて突撃してきた。

「まあ、一対一にはならないよなー。」

疾風はすぐに背後に気が付いて、空いている右手にGNピストルを0・1秒で展開して、打ち合いをしている敵機に蹴りを入れて距離を取り、そこからGNソードをライフルモードに形を変え、前にはGNソード、後ろにはGNピストルを構え、同時にビームを撃ち、2機を破壊した。

最後の機体はランスを構え、ビームを撃ちながら突撃してきた。

「そして……お前でラストだ！」

GNソードをソードモードに戻し、ビームを躊躇して瞬間加速で一気に接近して突撃してきた敵機に横に一閃を入れ、爆散した。

「……織斑先生、今度はミリシタコンペコートです」

『分かった、早くピットに戻れ』

「了解」

疾風は千冬に言われた通りに戻った。

「流星、モードリース」 ミーティア

ピットに戻つて俺の言葉で纏つていた装甲が消え、待機状態の腕時計になつた。そうしていると千冬さんが近くに来た。

「戻つたか。それで少し話があるのだがあのアンノウン誰が作つか予想出来るか？」

「とりあえず心当たりはありますね」

「やうか

「織斑先生も心当たりはあると思いますが？」

「一応はな……わかつた。では、部屋に戻つて良い」

「分かりました」

俺は一礼して、自分の部屋に戻つた。

(しかし、まさかGNコア搭載機が出てくるとはな……）なんどの休みでもBRAVE社に行ってみるか

一方、とあるビルの一室。そこにはある少年がおもじりついで映像を見ていた。その映像は疾風とアンノウンとの戦闘だった。

「…本当は織斑一夏の情報が欲しかったけど、これはそれ以上の成果だな。しかし、僕以外にGNコアを作る奴がいたとはね…しかも、僕が作ったGNコアよりスペックが高いのを2基も搭載しているHSなんて、凄く興味深いな…」

その少年は映像を見ながら、パソコンのキーボードを凄いスピードで叩く。そして画面に出てきたのは疾風の顔写真とデータだった。

「へえ、BRAVE社の副社長、皐月疾風、か…なるほどBRAVE社ならGNコアを作るぐら」の資金なんてすぐに入ってくれ…けど、ここまで作るなんて相当な天才なんだうな

そう言って、少年は席を立ち、置いてある黒と赤のカラーリングをしたHSの近くに歩いた。

「さて、僕もそろそろ動くかな。この『鮮血の牙』でね

少年は口に触れて、少し微笑んだ。

4話 襲撃ヒート（後書き）

俊さん、誤字報告ありがとうございました。これからは気をつけます。

GZNソード・フルセイバーは追々出す予定です。
これからも感想・ご意見お願いします。

5話 休日と朝

六月頭 日曜日

俺はB R A V E社の本社に来ていた。兄さんはしつかり休養を取
れと言われたがこれ以上俺の分の仕事まで兄さんに頼んだら倒れる
と思ったし……

それともう一つ気になることもあつたからな……

「さて、俺の分の仕事はこれだな」

「そうだ。しかし休めと書いたのにお前は…………」

「いや、兄さんがぶつ倒れたらB R A V E社は誰が經營するんだよ」

「ん? いや、もしもの時はお前が継ぐだろ?」

「……マジー?」

「ああ、おおマジだ。それに私はこの程度で倒れるような貧弱者で
はないぞ」

「やつでした」

俺は笑いながら、書類の処理を始めた。量は兄さんが予めやつてくれ
たおかげで少なかつた。マジで兄さんには感謝だな。

俺の仕事が終わるとさうじ兄さんの仕事も終わつたらしく久しぶりに一緒に毎食を食べていた。

「……それで今日は例のアンノウンについて来たのか？」

「…耳が早い事で」

「ちよつと前に千冬から連絡があつてな。それでそのアンノウンに搭載されていたのは本当にGNコアだったのか？」

「ああ、けどあの赤い粒子からGNコアT^{タウ}だつた。けど、それを搭載したのが10機もいたとなるとさすがに気になつてね」

「一応、GNコアについてのバンクにハッキングがあつたか調べたかがそんなのはなかつたぞ」

「まあ、T^{タウ}程度だつたら頭が回る奴なら開発は可能だからな」

「そうだな。だが、T^{タウ}を作る奴なら次はオリジナルを作ろうとするだろうがオリジナルはお前ほどの天才しか造れないしな。と、なると……」

「今後、流星^{ミーティング}を狙つてくるか、今ここにある開発途中のGNコアを狙う、だね……まあ、ラボの警備は万全だし、俺にいたつては逆に

「返り討ちにしてやるけど」

「ううか。だが、気をつけろよ。相手は……」

「分かつていい。相手は……」

「亡國機業」

互いの言葉が合わさると真剣な表情だった兄さんは少し微笑んでコーヒーを飲んだ。俺もカップに残っていたコーヒーを飲み干した。

フレイヴ
B R A V E社から学園に帰ってきて、部屋で流星^{ミーティア}の調整をしているとふとノートパソコンの隣に置いてある卓上型のカレンダーが目に入った。

「そりいえば、今月か…学年別個人トーナメント」

学年別個人トーナメント

これは文字通り、学年別でのI S 対決トーナメント戦。これは一週間かけて行う。一週間もかかる理由は簡単、全員強制参加だからだ。学年で百二十人も居て、これでトーナメントをやるために、規模も相当なものになっているらしい。一年は浅い訓練段階での先天的才能評価、二年はそこから訓練した成長能力評価、そして三年は具体的

な実戦能力評価だ。特に二年は様々なところからスカウトやお偉い方が見に来るらしい。まったく、ご苦労なこつた。

ちなみに先月のクラス対抗戦は例の無人機アンノウンによる襲撃でやむやのまま中止され、そのことに関しては箇口令が出された。特に戦闘に直接かかわった一夏と鈴は誓約書まで書かされていた。俺はGNコアタウTが関係してどちらかと言つと箇口令を出す側だから特にそういうのは無かつたがな。

「さて、一通り調整は終わったことだし……飯でも食いに行くか

俺はノートパソコンを閉じて、部屋を出て食堂に向けて足を進めた

「聞くー。」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別のトーナメントで

「

俺が食堂に着くと奥の方の席でスクラムを組んでいる一団がいた。じじって、毎度のこじだが女子で埋め尽くされた食堂はやかましい。俺はぱざる蕎麦をもじりつて、席を探していると一夏と鈴の居る机を見つけた。

「よつ、一夏、鈴。ここ座つて良いか？」

「ああ疾風、いいぜ」

「どうも

俺が席に着くとさつきのスクラムを組んでいる一団を見ると一夏も気づいていたのかそちらを見た。

「……なあ、わざからあんの」の会話の中に俺と疾風の名前が出てる気がするんだが

「『氣のせこよ、どうせアソブでもやつてんじゃないの？それか占いとか』

「……こつもよつ熱氣がしいな……」

それにこつもよつ熱氣も増してこるし、何かとじよめきが起じつて
いる。

「えええつーへへ、それマジでーっ！」

「マジで

「ひーーーー、やひじよつーーーー！」

しかし、本当に何かあつたのか？こつもよつ5割り増しへりこで騒
がしいな。

「…………まあ、良こか」

俺はやるの上に乗つてこむ残りの蕎麦につゆをつけて食べた。ここの
の蕎麦なにげに良い麦使つてこむみたいで香りも良いんだよな。

「うひつせよ。一夏、鈴、俺は先に戻るな

「ああ

「分かったわ」

俺はそう言って、食器を戻して部屋に戻り、シャワーを浴びて、そのままベッドに入った。

5話 休日と夢（後書き）

前回と同じく俊さんまた修正・誤字ありがとうございます。
文才力がない自分にはとてもありがとうございます。
これからも感想・ご意見おねがいします。

6話 いつもと違う朝

月曜日 朝

教室ではクラス中の女子が賑やかに談笑をしている。手にEISスケルトンのカタログを持つて、意見交換している。

「そういうえば織斑君のEISスケルトンのやつなの?見たこと無い形だけど?」

「あー特注品だって。男のスースーが無いから、どこかのラボが作つたらしいよ。えーと、もとはイングリット社のストレームアームモデルって聞いているな」

女子たちの視界に入った一夏は質問を受けていた。けど、あの一夏がここまで覚えているとはな。

「それじゃ、皐月君は?」

「ん?俺はB R A V E社製だぞ。まあ、俺は常にパーソナルライズで展開しているからみんなは早々見ないとと思うがな」

「え?あのB R A V E社製なの!?良いなあ~」

「あれ?でもパーソナルライズで展開したらエネルギーが消耗する

んじやない？」

そう、専用INS持ちの特権である「パーソナルライズ」はINS展開時に同時にINSステッツも展開されて楽だが、ダイレクトなフォームチャンジはエネルギーを消耗してしまう。が、それは普通のINSコア。俺のGNコアはそのエネルギーの消耗を無くしてくれるからこの上なく楽に展開ができる。

「まあ、そこはちょっと特別仕様になつているな」

「INSステッツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、INSはそこで必要な動きを行います。また、このステッツは耐久性にも優れ、一般的な小口拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すりすりとステッツの説明をしながら現れたのは山田先生だった。

「三ちゃん詳しいー！」

「一応先生ですから。……って、や、山田ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのステッツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してあるんです。えへん……って、や、山ぴー？」

学校の開始から2ヶ月、山田先生にはたしか8つくらい愛称がついていたと思つた。慕われている証拠だな。

「あのー教師をあだねで呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーちゃんは眞面目っ子だなあ

「ま、まーちゃんって……」

「あれ? マヤマヤのまつが良かつた? マヤマヤ

「そ、それもひょっと……」

「もー、じやあ前のマヤマヤに戻す?」

「あ、あればやめてくださいー!」

珍しく語尾を強めて山田先生が拒絕の意思を表した。

何かトライアスマがあるのか、マヤマヤの愛称。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつかってください。わかりましたか? わかりましたね?」

はーいとクラス中に返事が来るが、どうせ空返事だろひな。

「諸君、おはよー」

「お、おはよー!」
「おはよー!」

スゲホ、さっきまでIISースのカタログを手にざわざわしていたのに一瞬で静かになるとば。さすがは千冬さんだな。

「今日から本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがIISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるようだ。各人のIISスージが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れた者は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらひ。それも無いものは、まあ下着でも構わんだろう」

いや、構うだらうーと、俺以外にも絶対多くの女子が心中で突っ込んだはずだ。男である俺と一夏がいるのに下着はマズイだらう、色々と。

「では山田先生、HRを」

「は、はいっ。ええとですね、今日はなんと転校生を紹介しますー。しかも一名ですー！」

「 「 「え……えええええつー!?」 」

転校生の紹介にクラス中がざわめき始めた。まあ、十代女子の情報網に掛からずにはいきなり転校生が現れれば驚きもする。しかもふたり。

(てか、転校生一人もいるんだつたら分散させるだろ?。普通)

俺がそう考えていると教室のドアが開いた。

「失礼します」

「…………」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まつた。

なんせ、その転校生の一人が　男子だつたからだ。

7話 貴公子と軍人

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

転校生の男子はにこやかな顔でそう告げ一礼する。

周りのみんなはあっけにとられている。まあ既に一夏というイレギュラーが日本政府によつて大々的に出たからフランス政府が今まで隠してきたとしても、もう隠す必要がなくなつたからな。

それにデュノアつてフランスのデュノア社の子息だよな。それだから、ISに触れる機会も多いから一夏みたくつかりISに觸れたら起動しました、みたいな感じだろ。

「お、男……？」

クラスの誰かがそう呟いた。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「

人なつっこそうな顔。礼儀正しい振る舞いに中性的な顔立ち。髪の

色は濃い金髪で俺と同じ首の後ろで丁寧に束ねてある。

一見したイメージは『貴公子』が当ではまるな。

「あや……」

「はい？」

「あやあああああ…………」

あーはー、またもやソーシクウェーブが発生。俺の時もそつだつた
けど、やつぱつつるやこな。

「男子！三人目の男子！」

「しかもつけのクラス！」

「美形…守ってあげたくなる系の…」

「地球上に生まれてよかつた~~~~~」

しかし、元気だなあ、うちのクラス女子陣は。てか、最後の奴、そ
のネタは古いだろ？

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くせむつに千冬さんがあやしく。マジで鬱陶しくしているな。

「み、皆さんお静か!」まだ血口紹介が終わってませんから~!」

山田先生のまったく威厳のない注意はクラスの女子陣はガン無視しているな。

俺はとりあえずもう一人に目を向ける。

髪は輝くような白に近い銀髪。それを無造作に腰近くまで降ろしている。そして左目の眼帯。医療用のものじゃなく、ガチな黒眼帯。そして、見えている右目は赤色だがその色とは裏腹にその目の温度は限りなく低い。

こちらのイメージはそのまま『軍人』

身長はシャルルと比べて明らかに小さく、女子の中でも若干だが背が低い部類だらう。

「……」

口を開かずに腕を組んだまま千冬さんに視線を集中させている。

「……挨拶をしに」

「はー、教官」

いきなり佇まいをピシッと直して、素直に返事をする転校生 ラウラにクラス一同はまたもあっけに取られポカンとしている。

(千冬さんを教官…ああ、ドイツ軍出か。)

千冬さんは昔ある事情でドイツ軍で一年ぐらい教官をしていた。

「ヨリではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ヨリではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

すぐに敬礼をして返事。本当に了解したのかよ?

「ラウラ・ボーテヴィッチだ」

「…………」

クラスの連中は他に言葉を待っているのだが、ラウラは名前を書つて口を閉ざしてしまつた

「あ、あの以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来つる限りの笑顔で問うが帰ってきたのは無慈悲な返事だった。先生苛めるなよ。見ろ、今にも泣きそうな顔しているぞ。

「……貴様が……」

「ウラは一夏と田代が合つた瞬間近づいてた。そして

バシンッ！

「……」

一夏を殴つた。それも綺麗な平手打ちで。

いきなり叩かれた一夏は何が起こつている分からないような状態になつていた。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「いきなりなにしゃがるー」

「ウラはそういうと一夏は思考が回復したのかすぐに言い返した。

「ふん」

ラウラはその場所から立ち去り空いていた席に座ると腕を組んで目を閉じた。

「あー…………ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は一組と合同で模擬戦闘を行う。

解散の合図として千冬さんが手を叩くと固まっていたクラスのメンバーは我に返るように動き出した。

「おい皐月、お前がテュノアの面倒を見てやれ。織斑では頼り無いからな。」

(千冬さん、もつ少し自分の弟を信じたせうが良こと思ひんですけど
ど...と、そんな」と考へてゐる前に……)

「君達が皐月君と織斑君？はじめまして。僕は

」

「話は後だ。行くぞ、シャルル」

俺はすぐにシャルルの手を取り教室を出てアリーナの更衣室に三人で向かう途中で説明をする。

「俺達男子はアリーナ更衣室で着替える。これから毎回これだから早く慣れるようにしたほうがいいぞ」

「う、うん」

ん？なんかシャルルの様子が変だな。

「大丈夫か？」

「え、うん。大丈夫」

「そ、うか。それじゃ急いで。マジで面倒になるからな。一夏も遅れるなよ」

「ああ」

俺達は速いペースで階段を下って一階へ。ここで速度を落とすわけにはいかない。なんせ、そうしたら

「ああっ、転校生発見！」

「しかも他の男子一人も一緒に！」

そう、他のクラスのHRが終わった。なら、他の教室から転校生の男子を見ようと女子が集まつてくる。そして捕まつたら最後、質問攻めの拳句、授業に遅れることになり千冬さんからの特別カリキュラムがある。それは俺も一夏もいやだ。

「いたつ、じゅうちよー。」

「者ども出合え出合えー！」

たぐ、ここはいつから武家屋敷になつたんだよ。今にもホラ貝が鳴りそうだな、おい。

「織斑君と星月君の黒髪もいいけど、金髪つてのもいいわね」

「しかも瞳はヒメラルド！」

「あやああっー見て見てー星月君と手ー繋いでるー。」

「日本に生まれてよかつた！あつがとつも幽かん！今年の幽の田は河原の花以外のをあげるね！」

最後の奴、今年だけじゃなくて毎年ひやんとした物プレゼントしろよ。河原の花は酷すぎるだろ？

「な、なに？ 何でみんな騒いでるの？」

状況が読めないのか、シャルルは困惑顔で聞いてきた。

「男子が俺達だからに決まってるだろ。それこそこの学園の女子は男子を見ることが少ないのである。」

「…………？」

「おい、なんぞや？」「意味が分からぬ」 つて顔をしているんだ？

「いや、普通に珍しいだろ。IFSを操縦できる男子なんて今のところ俺達しかいないんだから」

「あー！ ああ、うん。そうだね」

一夏の補足でシャルルは返事したがなんで間が空けた？

「まあ、良い。何にしてもこれからようじく頼む。俺は皐月疾風。
ファーストネームで呼んでくれ

「俺もようじく。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ

「うん。よろしく疾風、一夏。僕のこともシャルルでいいよ

「了解、シャルル

「わかったよ、シャルル」

さて、どうか包囲網に囮まれる前に校舎から出られたな。

「ここからほ蝶うずに駆け抜けるぞ。ふたりとも…」

「うん」

「おま」

「よーし、到着ー！」

いつも通り圧縮空気の抜ける音を響かせてドアがスライドしていく。俺たちは無事に更衣室に到着できた。

「うわ！時間ヤバイな！すぐに着替えちまおつぜ

確かに時計を見ると既に授業開始まであと5分前。一夏は一呼吸でシャツまで脱ぎ捨てた。

「わあっ！？」

「？」

ん？なんか、リアクションが女みたいだな……まあ、いい。

「それじゃ、俺は先に行くぜ。」

俺は後ろから聞こえる一夏の声を無視してそのままグラウンドに出た。パーソナルライズ万歳！！

7話 貴公子と軍人（後書き）

連続3回やってみました。
感想・ご意見お願いします

「遅い」

バシッ！

俺は無事第一「グラウンド」に着いたが、一夏とシャルルは無事にはすまなく、千冬さんの「」指導を受けた。あれ、いつ見ても痛そうだな。

「ぐだり」とを考へている暇があつたうど列に並べー！」

そう言られて、2人は列の端に並んだ。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

そして、何の因果か一夏の隣には機嫌が悪いセシリ亞だった。

「スースを着るだけでじつじつこんなに時間が掛かるのかじり？」

ISースは女性のために作られたからワンピース水着やレオター

ドに近く、部分的に動きやすいようにと肌が露出しているが、防衛はISのシールドバリアーと絶対防衛があるのでスーツ自体にはほとんど防御力がなくともいい。

だが男が着るISスーツは違う。具体的に言えばスキューバ、ダイビングの水着みたいで露出しているのは頭、手、足だけ。そのせいで女子より着替えるのが遅くなるのは必然だ。

「道が混んでいたんだよ」

「嘘おつしゃい。いつも間に合ひへせに」

セシリ亞の言葉に棘があるな。妬いてるのか？

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方と縁が多いようですから？ そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんよね」

「なに？ アンタまたなんかやつたの？」

さらに何の因果か一夏の後ろにいた鈴が話に入ってきた。そして、話が続くが……おい、お前らその辺で止めないとヤバいぞ。なんせ、今の時間は……

「安心しろ。バカは私の目の前に一人も居る」

千冬さんの授業だからだ。

バシーン！

青い空に出席簿アタックの音がいつもより響いた。

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「「はい！」」

一、二組合同なのか返事も気合いが入っている。

「くうつ…………なにかとこうとすぐにはポンポンと人の頭を…………」

「一夏のせい、一夏のせい、一夏のせい…………」

ちなみにさつき叩かれた二人は頭を抑えながら涙目でブツブツ言っている。自業自得だ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの

十代女子も居る」とだしな。

凰一・オルコット・

「な、なぜわたくしまでー?」

セシリア完全などばつちりだが諦める。千冬さんの言ひことは絶対だからな。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る

そう言られて、2人は面倒臭そうに前に出る。

「お前が少しぬやる氣を出せ。アイツにことじりを見せられぬか?」

「やはらにはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せる機会よねー専用持ちのー」

おお、さすが千冬さん。一言で2人のやる気をマックスにしたな。まあ、当の本人は何の事かは分かつていなけれど。

「それで、相手はどちら? わたくしは鈴さんでも構いませんが

「ふふん。それは二つの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は

キイイイイイン

ん? 何だこの空氣を切り裂く音は?

俺は上を見ると山田先生が一夏に突っ込んできた。

ドカーン！

そして、そのまま一夏は山田先生の突進を受けて、数メートル吹っ飛ばされた後、そのまま「コロコロと転がつた。

あれはさすがの一夏も死んだか？いや、ギリギリで白式を展開したのが見えたから生きてるか。

そういながら、俺は一夏のそばで行くとそこには……

「一夏、お前、なにやつてんだ？」

そこには一夏が山田先生を押し倒しているような状態になつて、右手は思いつきり山田先生の胸を驚づかみしていた。

「こんなのは今EISを開いている鈴、セシリ亞が見たら……」

「ハツ！？」

その瞬間、一夏はなにかを感じたらしく即座に山田先生から離れる。刹那、一秒前に一夏の頭があつた場所にビームが貫いた。

「ホホホホホ……残念です。外してしましたわ……」

そして、そのビームを放ったほうを見るとそこには顔は笑っているがその後ろにはどす黒いオーラを纏っているセシリ亞がいた。

「…………」

そして、鈴は何も言わず 双天牙月 を呑わせて、そのまま一夏に向かつて何の躊躇いも無く、投げた。

「つねおおおつー！？」

一夏は間一髪で避けるが 双天牙月 の形状はブーメランに似ていてそれと同様に投げたら手元に返ってくる。しかも、一夏の今の体勢じゃ避けれない。あ、間違いなく死んだな、合掌。

「はつ！」

ドンッ！

俺が一夏に合掌をしていると短く、一発の銃聲音が響く。放たれた弾丸は 双天牙月 の両端を叩き、一夏に当たる軌道を大きく外れた。

すぐに銃聲音をしたほつを見るとそこには倒れた体勢のまま上体だけを起こして射撃体勢のままになつている山田先生がいた。

「…………」

俺や一夏や鈴、セシリ亞、あとこの場にいる全員はあのいつもバタバタしている山田先生とは違う雰囲気で同一人物とは思えなく、驚いていた。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……」

雰囲気を戻した山田先生はぐるんと体を回して起き上がり、肩部武装コンテナに銃を預ける。

「さひ小娘どもこつまで惚けている。さひさひ始めるや」

「え？あの、二対一ですか……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

『負ける』と言われたのが癪にさわったのか2人の瞳には闘志をたきらせた。

「では、はじめー！」

千冬さんの号令と共にまず2人が飛翔、それを確認した山田先生が後を追つ。

「手加減しませんわー！」

「さつきのは本気じやなかつたしね」

「い、行きます！」

山田先生はいつもと同じ言葉とは裏腹に山田先生の目は鋭く冷静なものに変わる。

そして、最初にセシリアと鈴が先制攻撃を仕掛けるが、山田先生はそれを簡単に回避した。

「さて、今之間に……やうだな。ちゅうどいい。『デュノア、山田先生が使っているIISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしつかりとした声で説明をはじめた。

「山田先生の使用されているIISは『デュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第一世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型のも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型IISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十一カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによつて操縦者を選らばないことと多様^{マル}チロール・チエンジ^{マル}性役割切り替えを両立しています。装備によつて格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で参加サードパーティが多いことでしられています」

「ああ、いつたんそ」おででいい……終わるぞ」

千冬さんは一旦、シャルルの説明を止める。上空での模擬戦は山田先生がセシリ亞と鈴をうまく誘導して、2人がぶつかったところでグレネードを投擲。爆発が起つて、煙の中から一つの影が地面に落下した。

「ハハ、ハハ……まさか！」のわたくしが、「

「あ、アンタねえ……何面白いよ! 何回避先読まれてんのよ! ……」

「り、鈴さん！」そー・無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないの
ですわ！」

「うーん、ちの台詞よ。なんですかコレットを出すのよ。しかもエネルギー切れるの早いし…」

「...」

「...」
「...」
「...」

おいおい、あの2人どんだけ仲悪いんだよ。ああ、どっちも恋敵だからか。これはしょうがないな。

「ひゅう、やすがは元代表候補生の名前は伊達じゃないことですか」

「そういうことだ。これで諸君にもEHS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持つて接するよ」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんはみんなの意識を切り替える

「専用機持ちは織斑、皐月、オルコット、デュノア、ボーデヴィッシュ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれり」

そう言われて、みんなは動き出した。

8話 代表候補生×2▽S教員（後書き）

毎回、誤字報告をしてくれる俊さんにほとても感謝しています。ありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

千冬さんの言葉で確かに1・2組女子全員は動き出した。

そう、動き出したが……

「織斑君、一緒にがんばろう!」

「わからないところ教えて~」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね?同じグループにいれて!」

「皐月君いろいろ教えて!」

「私も私も! I S操縦教えて!」

そう言って一気に俺、一夏、シャルル まあ、簡単に言えば男に押し寄せてきた。一夏、シャルルは完全にどうしていいのかわからずただ立ちつくすだけだった。

「I Jの馬鹿者どもめ……出席番号順に一人ずつ各グループに入れ!
順番はさつき言った通り。次にもたつくようなら今日はI Sを背負つてグランド百周させるからな!」

千冬さんの鶴の一聲によつて群がつていた女子たちはすぐに整列しなおした。てか、IJS背負つてグランド百周つてどんな地獄ですか。

「最初からそりの馬鹿者どもが……」

ふうつとため息を漏らす千冬さん。お疲れ様です。

そして実習の時間が始まると俺の班になつた奴らが集まつてきた。

「ええと、いいですかー皆さん。これから訓練機を一班一体取りにきてください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が一機、『色白』^{キオン}が一機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよ~」

山田先生はさつきの模擬戦で自信を取り戻したのか堂々としていた。

「さて、どのIJSが良い?」

「「「「「色白」」」」

「満場一致だな…分かつた。取りに行つてくるから待つてくれ」

班の人達に背を向けて小走りで山田先生のところに向かつた。

(しかし、満場一致で色白か。それだけ人気があるのか…なんか、照れくさくなるな)

そう、色白はBRAVE社製の第一世代ISで開発は俺がした。^{ブロキオン} 最初は興味本位で第二世代を作ったが今じゃこいつのおかげでBRAVE社は世界シェア1位になつてGUNPOWDERや第4世代機を作るため^{ブレ} に資金が入つてくれた。

「山田先生、色白ありますか?」

「あつ、皐月くん。はい、ありますよ」

「それじゃ、色白を借りていきますよ」

俺は流星の腕を部分展開して色白の乗つている専用カートを押して班に戻つた。

「さて、とりあえず起動、装着、歩行までするか。順番は出席番号順、だな。一番最初は……」

「はーいー出席番号三番、遠藤 瑠璃ーよろしくね」

そつ言つて、お辞儀＆握手待ちの手を出してきた。

「ああ、抜け駆け！」

「私も、私も！」

「初めて見たときから決めました！」

すぐに班の女子全員が横一列になつて同じよつに手を並べた。

他の班を見ると一夏やシャルルの班も一夏の同じよつになつていた。
まあ、俺と唯一違うのは一人はどういう状況になつてるのか分から
ないつてことだな。

「はあ、今は実習の時間だろ…なんで告白タイムになつているんだ
？」

「「「おねがいしますっー」」

俺が頭をかきながらぼやいていると……

スパーーン！

「「「いつたあああっー」」

「おお、シャルル班女子の見事なハモリ悲鳴だな。まあ、一列だから叩きやすかつただろうな。シャルル班女子はすぐに後ろを向くと一斉に顔が変わった。そこには鬼教官、織斑 千冬さんがいたからだ。

「やる気があつてなによりだな。それならば私が直接みてやう。最初は誰だ」

そいつ言つて、シャルル班女子は千冬さんに連れて行かれた。

そんなシャルル班女子を見た俺と一夏班女子はすぐに列を解散して、素早く実習を開始してくれた。うん、実に良い判断だ。

その後はキビキビと動いてくれて時間前に全員が起動、装着、歩行が出来た。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使つた訓練機の整備を行つので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

「あー……あんなに重いとは……」

一夏は疲れた顔を愚痴つてきた。訓練機は専用のカートを使って運ぶ。そして、その動力源になるのは「人」になる。俺や一夏の班は無論、男メインで運んでいた。ちなみにシャルルの班はシャルルがやる前に「デュノア君にそんなことさせられない！」と数人の体育会系の女子が訓練機を持っていた。一夏と扱いが天と地も違うな。

「てか、一夏は腕を部分展開して運ばなかつたのかよ。そうすれば楽なのに」

「……あ」

まさか本当に思いつかなかつたのかよ……

「た、たしかにそつだな……」

「はあ、少しほは頭を使えよ、一夏」

「あ、ああ。そうだな……それじゃ疾風、シャルル着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

一夏は無理やり話を変えて、シャルルに振るとシャルルは少し困った顔をしていた。

「え、ええつと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えてよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなく

ていいからね

「やうなのか？なら調整が終わるまで待つてやだ」

「いいからいいから！僕のためだけに待つて貰うのとか悪いしーーー人とも先に戻つてて」

「了解。一夏、シャルルがいつ戻つてゐるんだから、俺らは先に行くぞ」

俺は見かねて一夏の首根つこを持つて更衣室に引きずつていった。

「げほつ、げほつ……疾風、お前俺を殺す気か！？」

「ハハハ、大丈夫だよ。一夏の取り柄は昔から体が頑丈なところなんだからよ」

「いや、それとこれとは違つてしまつが……」

「ほれ、文句言つてゐるならわつと着替えよう。昼休み無くなるぞ

「あつー・やうだった。ヤベヒ、急がないとーーー」

「なに急いでるんだ？」

「ああ、さつき簞から毎飯一緒に食べないかつて誘われたんだ。遅れたら、簞に怒られる」

一夏は慌てて着替えている。しかし、あの篠がそんな約束をすると
はない

ライバルが増えて大変そうだもんな。

「それで疾風。お前も一緒に来るか？屋上で食べるんだナゾ」

「俺は良いよ。シャルルと一緒に食堂で食べた後に学園を案内しようと思つていたからな」

正直そんなところに行つたら篠に悪い、それと篠が不機嫌になる。

「そうか、分かった。それじゃ俺は先に行くから。それじゃ」

そう言って、一夏はさっさと更衣室を出て行つた。俺も更衣室に居てもやることがないので更衣室を出た。

10話 午後の模擬戦

その後、俺はシャルルと食堂で飯を食つて、残つた時間で学園内の案内をしていたが三人目の男子争奪戦が発生して、案内をしていたはずだが女子の大軍勢に包囲されていた。が、さすが貴公子、丁寧に丁寧を一乗したようなシャルルの対応でお取り願つた。

女子一同はあまりにもシャルルの貴公子然とした姿にそれ以上にアピールするのが逆に恥ずかしくなつたのか、みんな嬉しいような困ったような顔をして引き上げていつた。

そして、決めになつた台詞は

『僕のようなもののために咲き誇る花の一時を奪う事はできません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔つてしまいそうですから』

だそうだ。

いや、もつとさうがだな。これを平然と言えるのはシャルルしかいないな。この言葉を聞いて、手を握られていた三年生の先輩は失神していたし。まあ、そんなこんなで女子が引き上げてもらつた。

そして、その途中にセシリ亞と鈴に会つて、一夏を探していたが適当な事を言つと二人はダッシュでそこに向かつた。そこでシャルルは一人が一夏にゾッコンだというのが分かつたようだ……俺、後で二人から何か言われそうだな。

そうして、昼休みが終わって、午後の授業中。午後は午前と同じようになっていたがたまにセシリ亞と鈴の視線が当たっているのがよく分かった。

「さて、最後に皐月、お前の操縦のテクニックを見せり」

そして、全員が集合していると千冬さんがそう言つた。まあ、そのくじこなら……

「待つてください……それならば、わたくしとの模擬戦にしてください」

おっと、セシリ亞さん何を言つているんだよ。

「私も模擬戦が良いです」

鈴もかよ……そこまで毎のことで俺を殴りたいのかよ。まあ、殴られないけどな。

「織斑先生、俺は構いませんよ」

「……ハア、分かつた。だが皐月、お前は使う武器はソードだけだぞ。良いな」

「了解。流星セットアップ^{ミーティア}」

俺の言葉ですぐにミーティアを展開すると、一人もエスを展開して飛翔したのを見て、俺も追つよつに飛翔した。

「なんか、ハンデがあるけど、叩きのめすわよ。疾風！！」

「昼休みはよく騙してくれましたわね！！」

「いやーなんのことですか？俺は知りません」

「ツツ～！人をおひょくするのもいい加減にしてください～！」

セシリ亞は怒った顔で《スター・ライトマーキエイ》で狙撃してきた。鈴も《龍砲》を撃ってきた。

「よつと…」

俺は一人の先制攻撃を躱して、腰にマウントしているGNソードを抜いて、ライフルモードにして構えた。

「す、すげえ……」

俺は上空で繰り広げている戦闘を見て、思わずそう言つていた。相手はセシリアと鈴の代表候補生タッグ。それなのに疾風はさつきから全ての攻撃を躊躇しながら、自分の攻撃は確実に当てている。

「当たり前だ。あの程度の動きは皇月には造作も無い事だ。それと織斑、お前は皇月の動きをよく見て、勉強しろ。あいつもお前と同じ近距離戦を得意にするからな」

「う、うん……」

「教師には「はい」だ。馬鹿者め」

「は、はい」

俺はすぐに返事をして疾風の動きを見る。疾風の動きは最低限の動きでセシリヤや鈴の攻撃をを躊躇している。

「…織斑、皇月の動きを見て何か分かったか」

「えつ？え、えっと… 最小限の動きで攻撃を躊躇している？」

「そうだ。近距離戦をする者は常に最小限の動きで攻撃を躊躇し、タイミングについて攻撃をしなければならない。よく肝に免じとけ」

「は、はー」

俺は返事をして上空での戦闘を見る。てか、疾風の奴、あの2人に対して笑っているや。

改めて、俺のファースト幼馴染は凄こと思つよ。

「疾風、なんて強さなのよ…………」

「うわお強こじは…………」

「びつした、鈴、セシリ亞。もつ限界か?」

「へー…そんなことはあつませんわよ」

「やつよ。絶対に一撃打ち込んであげるんだからー。」

「やうかい…なら、やつてみる」

セシリ亞はピット兵器であるブルー・ティアーズを放った。また躲けたが鈴は龍砲を撃つてきて、回避コースを封じた。

「いれでー。」

「どうですー。」

「（）の一人、仲が悪いのか、良いのか分からないな。さて俺もそろそろ反撃を始めるか）GNフィールド」

その瞬間、俺の多方向から迫ってきたビームをGNフィールドで防いだ。二人は何が起こったかは分からないようだが教えるつもりもない。

「それじゃ、ぼちぼち行きますか

ライフルモードのGNソードをソードモードに変えてセシリアとの距離を詰めた。だが、俺とセシリアの間に双天牙月を持った鈴が割つて入ってきた。

「あたしだっていのよー。」

「そうだったな

鈴はそのまま突撃してきて双天牙月を振り下ろす。

「とこるがギッショーンー。」

その瞬間、俺は瞬間^{イグニッシュン}・ブースト^{・ブースト}で双天牙月を躰して、鈴の横に移動しながら横に一閃を入れた。

「えつー!? キヤアアアーーー！」

俺の動きに反応できなかつた鈴はもろに喰らつて、そのまま撃墜した。だが、セシリアは構わず俺を狙撃してきた。

「おひと」

俺はGNソードをライフルモードにしてビームを相殺した。

「ならばーーー！」

セシリアはビームを放つて、さつきと同じく多方向からビームを撃つてきた。俺はGNソードをライフルモードに形を変え、躰しながらビームを破壊しながらセシリアに接近した。

「くつ… それならー」

セシリ亞は腰部から広がるスカート状のアーマーの突起が外れて、動いた。

「弾道型ミサイルか…」

「そうですね、ブルー・ティアーズは六基ありますわよ…」

そう言って、セシリ亞は装填されたビット2基を飛ばしてきた。

ギンツ

だが俺はすれ違ひ様にライフルモードからソードモードに戻したGNソードで2基のビットを破壊して、そのまま突撃して連続で斬つて一気にセシリ亞のシールドエネルギーを〇にした。

こづして、午後の授業は終わった。

「それで、なんの用だ。疾風？」

午後の授業が終わった後、筈と一人で話すために学園の屋上に来ていた。

「いや～恋に悩む篠にちょっと手助けをしようと思つてな。今度の学年別個人トーナメントで優勝したら俺か一夏と付き合えるて言つ噂あるだろ？それが本当だったら篠は何がなんでも優勝を取りにいくと思つてな」

俺がおもじりやうに言つと篠は頬を赤くした。

「うむ……だが、なんでお前がその噂を知つているんだ？その噂は女子だけしか流れていないはずだろ？」

「まあ、普通に飯を食いながら聞き耳を立てていたら話が聞こえたんだよ」

「そうか……」

「それでこの噂。俺はそんな約束した覚えはないし、どうせ一夏の唐変木が誰かとそんな約束をしていたのを誰かが聞いて、そのまま尾びれが付いた、てところだよな」

「そ、そうだな……」

「まあ、約束した人はざつと考えて俺や一夏の幼馴染だと思うがな」

「なつ！？な、なんでお前が知つているんだー？」

「あ、やっぱり篠だつたんだ」

「…私をカマかけたのか……」

「皆さん… さつきまで頬を赤くしていたのに一瞬で黒いオーラと怖い
感覚にならないでください。」

「すまん、すまん。それで本題に戻るが。実は今田束さんから篠の
専用機のためのデータを取るためにHISが届くんだよ」

「あ、あの手紙の内容は本当だったのか……」

あの手紙…俺が転入してすぐに束さんから篠に送られた手紙。そこ
には束さんが篠のために篠専用のHISを作っている内容が書いてあ
つたんだ。

「それで今度の学年別個人トーナメントでそのHISを使って詳細な
データを取りたいんだとさ」

「そうか… それでそのHISはどうあるんだ?」

「ああ、それは

『一年一組、皐月 疾風。同じく篠ノ之 篠。至急第一グラウンド
の格納庫まで来い』

俺の言葉を遮るように千冬さんの放送が入った。

「おひ、ひつやベストタイミングだな。それじゃ行くぞ、篠」

「ああ……分かつた」

俺と篠が屋上から第一グラウンドの格納庫に来るときには千冬さんと打鉄がいた。

「篠ノ之、皇月から話は聞いているな」

「は、はい。今度の学年別個人トーナメントでデータ収集用のHSを使用して、データを取れと」

「そうだ。そしてこれが

」

『織斑先生、電話が入っているので至急、職員室に戻ってください』

千冬さんが説明をしようとすると放送が入った。

「織斑先生、あとは俺が説明するんで行つていいですよ」

「……スマン、あとは頼んだぞ。疾風」

千冬さんはそう言って、職員室に向かった。

「さて、それじゃ説明するぜ。」Jの打鉄は篠の専用機のデータをより詳しく取るために篠の動きにトレースしていく普通の打鉄より細かいリンクのズレは無くて専用機並に使えるわけだ。まあ、百聞は一見に如かずだな。取り敢えず装着してみる」

「あ、ああ」

篠は若干困惑気味で打鉄を装着する。と、すぐに普通の打鉄とは違うのが分かったみたいだ。

「これは……」

「どうだ？ いつも授業で使う打鉄とは違つだろ？ 」

「あ、ああ。かなり使いやすい……これなら……」

「まあ、篠の実力でならかなり戦力アップだろ？」

「……疾風、一つ聞いて良いか？」

「ん？ なんだ。ああ、なんで俺がこいつの説明が出来るかは教えな
いけどな」

「たしかにそれも気になるが……ビットリここまで私を手助けしてくれるので？」

「ああ、それか……それは昔約束したろ。『篠の初恋を応援する』
てな」

これは小学生の時、俺が篠とした約束。あの時は四六時中三人一緒にいたから、篠の仕草や反応を見ているとすぐに一夏に惚れていると思って話してみると見事にビンゴ。そこからはちょくちょく相談を聞いていた。

「なつ！そ、それは昔の約束ではなかつたのか！？」

「昔でも約束は約束。だから俺は篠の初恋を応援したいんだよ。幼馴染としてな。まあ、一夏がどこまではたら気づくかは知らんが」

あの鈍感のことにだからキスまでしないと気づかない……けど、篠にそんなことが出来るはず無いか……

「う、うむ。疾風、ありがとうな……」

「どういたしまして。それじゃ、俺は戻るぞ」

「は、疾風！？」

「ん？」

「私は……私は今度のトーナメント絶対優勝するぞ……」

「ああ、だが俺もやるからには勝つつもりでやるから当たつたら全
力で来いよ。篠」

「ああ、無論だ。疾風、お前も全力を出せ」

「ああ、じゃあな。篠」

篠の頬を少し赤くしているが嬉しそうな顔を見て、俺も少し笑って
食堂に向かった。

(てか、ミーティング流星にはリミッターが付いているから全力は出せないじゃ
ん。まあ、技術面で少し本気を出せば良いか)

10話 午後の模擬戦（後書き）

毎度のことですが、俊さんにはいつもありがとうございます。
感想・ご意見お待ちしています。

11話 流星と黒ウサギ相対する

「じゃあ、あらためてよろしくな。シャルル」

「うん。よろしく、疾風」

第一グラウンドから戻った俺は一夏、シャルルと一緒に夕食を食べて、その後部屋に戻っていた。

シャルルはやはり俺の部屋のルームメイトになつて、今は食後の休憩という訳で俺の淹れた緑茶を飲んでいた。

「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしこよ」

「気に入ってくれたならなによりだ。また飲みたくなつたら言つてくれ。淹れるからよ」

「うん、ありがとう、疾風」

柔らかい笑みを浮かべるシャルルに、男と分かつていっても一瞬ドキッとしてしまつた。「いつ中性的な顔立ちだから笑うとそれこそ女みたいだな……」

「ルームメイトだろ。これくらい普通だ」

「ふふつ、ありがと。それじゃまたおわり貰つて良いかな？」

「ああ、良いぜ」

俺はシャルルから空の湯飲みを受け取つて、簡易キッチンで再度淹れてシャルに渡した。

「ほい、じりぞ。それでシャワーの準備はじりするへ俺はじりでも良いが」

「あ、僕は後でいいよ。疾風が先に使つて」

「やうか？別に遠慮しなくても良いぞ。」

「つうん平氣だよ。僕つてあんまり汗かかない方だから、すべてシャワーを浴びなくともそんなに気にしないし」

「そうか、それじゃ先に使わせてもらひうぞ」

「うん。そういうえば一夏が毎日一人の練習を放課後にしているつて聞いたんだけど疾風も参加してるので？」

「ああ、一応俺以外に篠、鈴、セシリ亞もいるが…まあ、あいつらの教え方だと一夏に理解できるはずが無いからシャルルも手伝ってくれ」

「うん、僕は良いよ。僕も専用機持ちだから役に立てると思つじ

「ああ。じゃあ、よろしく」

「うん。任せて」

俺はベッドに入つてそのまま寝た。

あれから五日後の土曜日。

一夏にシャルルも練習に加わつていいかと確認したところ即答で許可が出たので、俺と一緒に参加している。

IS学園の土曜日は午前中は授業があるが午後はほぼ自由時間でアリーナが開放されているため大体の生徒が実習として使つている。今回はセシリ亞、鈴、篝は後ろで見てもうりつて、俺とシャルルで一夏の特訓をしていた。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さん「勝てないのは単純に射撃武器の特性を理解していないからだよ」

「そ、そうなのか?一応分かっているつもりだけど……」

「まあ、たしかに何回かは説明したけど、やはり知識だけじゃ駄目だからな。さっきのシャルルとの戦いでも瞬間加速を読まれて、間

合いが掴めなかつたる

「う、うかに……」

「一夏のEVAは近接格闘オンリーなんだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じや勝てないよ。特に一夏の瞬間加速は直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちやうからね」

「ところより、お前はまだ瞬間加速を完璧に使いこなせてない。熟練したEVA乗りは直線だけじゃなく自由に軌道を変えられるからな」

「や、そつなのか？」

「ああ、現に千冬さんが使った瞬間加速はファイントとかを上手く入れていたからな」

「けど、無理にせつて空気抵抗とか圧力の関係で機体に負担がかかると、最悪骨折したりするからね」

「だから、まず一夏は射撃武器のことを理解しろ。シャルル、なにか貸してやつてくれ」

「うん。はい、これ

シャルルは五五口径アサルトライフル《ヴェント》を一夏に渡した。

「え？他のやつの武装って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば登録してある人全員が使えるんだよ。うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃つてみて」

「お、おひ。構えはこれでいいのか？」

「もう少し脇を締める。それと左手はそつちに備える そうだ、それで良い。本来ならセンサー・リンクで射撃をするが格闘戦100%の白式のことだ、どうせセンサー・リンクはないだろう」

「ああ。そつきから探しているが見つからないな」

「やつぱりな、それじゃとらあえず田視で撃つてみろ」

「お、おひ。じゃあ、行くぜ」

一夏はシャルルから借りた銃を的に向けて引き金に力を入れる
バーンッ！！

「つおひーーー！」

初めて間近で聞いた火薬の炸裂音に一夏は驚いた。

「どうだ？ 初めての射撃は？」

「あ、ああ。なんか、アレだな。とらあえず『速い』っていう感想

だな

「当たり前だ。銃弾はその面積が小さい分速い。だから、軌道予測さえあつていれば簡単に命中する。外れても牽制になるしな」

「な、なるほど…」

「あつ、一夏、そのまま一マガジン撃つていいよ」

「おひ、サンキュー」

そして、一夏が大体的の中心から少し外れたところに当たながらも一マガジンを撃ち切るとアリーナ内がざわめいた。俺も視線を移した。

「…………」

そこにはシャルルと同じ時に転校してきたドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒだった。

「おい」

「……なんだよ」

一夏は気が進まないようだがとりあえず返事をした。

「貴様も専用機持ちだそつだな。ならば話が早い、私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

そうだろうな。ドイツ軍、千冬さんで思いつくのは一つだけ。

第一回 IJS 世界大会『モンド・グロッソ』千冬さんは決勝まで行き、大会 2 連覇まであと少しだったが突然辞退した。理由は決勝当日、応援に来ていた一夏が謎の組織に誘拐された。そして、一夏を救つたのが大会を辞退した千冬さんだった。

そして一夏の居場所を突き止めたドイツ軍に借りを返すために千冬さんは一年ぐらいドイツ軍で教官としてドイツに居た。そこでラウラと出会つたんだろう。

俺もその時、兄さんと一緒に千冬さんの応援に行っていて、事情を千冬さんから聞いた。

「貴様がいなければ教官が大会 2 連覇の偉業を成し遂げただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を 貴様の存在を認めない」

「また今度な」

（あつ、バカか、こいつー今そんなこと言つたら、火に油を注ぐだけだろーー）

俺はすぐに一夏とラウラの間に入れるように流星を起動できるようになっていた。

「ふん。ならば 戦わざるを得ない状況にしてやるー」

言ひや呑やボーデウイッヒは左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

ガギンツ！

だが、俺がすぐに流星^{ミーティア}を開いて一夏ラウラの間に入り、GNソードで弾丸を切り裂いた。弾丸は一つに別れ、一夏とシャルルには当たらなかつた。

「はあ、こんな密集空間で戦闘を開始するなよ」

「貴様…邪魔をするな」

「悪いがそれは聞けない。それにお前があの事件で一夏にキレるのは逆恨みだ。あの事件で優勝じゃなく一夏を選んだのは千冬さんの意思だ」

「そんなの関係ない。そいつさえ居なければ教官の経験に傷が付か

なかつたんだ。だから私は織斑 一夏、貴様を許さない

「……分かつたよ。そんなに一夏をぶちのめしたいならまず俺を倒せ。言つとくが……俺は強いぞ」

「フン、貴様には興味が無いがそんなにボロボロにしてほしいのならばそりしてやうつ」

「上等……」

俺は持つていたGNソードを構え、ラウラもプラズマ手刀を展開して構えた。

『アリの生徒ー何をやつてこるー学年とクラス、出席番号を言えー』

一触即発の空氣の中、突然アリーナのスピーカーから声が響いた。
どうやら謎を聞きつけ担当の先生が駆け付けたみたいだ。

「…ふん、今日は引いて」

興が削がれたのか、ラウラはあつさりと戦闘態勢を解除して、アリーナゲートへ去つていった。俺はシャルルと一夏の近くにいた。

「一夏、シャルル、大丈夫か？」

「うん、ありがとう。僕は平氣」

「あ、ああ。ありがとう疾風、助かつたよ」

「ならいい。さて、もう4時になるな。そろそろ閉館時間だ。もうあがろうぜ」

「えつと……じゃあ、先に着替えて戻つてて」

「分かった。先に行つてるぜ。ほれ、行くぞ一夏」

「わ、分かったから首は掴むな！」

また一夏がウダウダ言つ前に一夏の首根っこを掴んで、更衣室に引つ張つていった。

11話 流星と黒ウサギ相対する（後書き）

俊さん、いつもありがとうございます。最後の一言にかなり救われます。

感想・ご意見お願いします。

12話 シャルルの秘密

更衣室に戻った俺と一夏は喋りながら身支度をすませていた。

「はあ、しかし風呂に入りたいな」

「あ～そういえば、お前風呂好きだったもんな。昔、道場での稽古終わったらよく篝の家の風呂貸してもらっていたっけ」

「そういうばそうちだつたな。懐かしいな」

「そうだな……あの頃は良かつたな……」

「ん? なにか言つたか?」

「何でもねえよ」

「あのー織斑君、皐月君、デュノア君はいますかー」

俺と一夏が昔の事を話していると更衣室の扉の向こうから声が聞こえた。この声は多分山田先生だろう。

「はい? えーと織斑と皐月なら居ます」

「入つても大丈夫ですかー? まだ着替え中だつたりしますー?」

「大丈夫ですよ。着替えは済んでますから」

「そうですかーそれじゃ失礼しますねー」

圧縮空気音の開閉音と共にドアが開いて山田先生が入ってきた。

「デュノア君は一緒にないんですか？織斑君達と実習中だつて聞きましたけど」

「まだアリーナに居ます。もうピットまでは来てると思いますけど、なにか用なら呼んでもります」

「ああ、いえ、伝えておいてもらえば十分です。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別にするといろいろと問題が起きそうなので、男子は週一回の使用日を設けることになりました」

「本当ですかー！」

一夏が大声で反応する。

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

わざと山田先生の手を取つて言葉を続けている……あにつは無意識

でやつてこるが山田先生すゞく困つてこる顔だな。

「い、いえ、これも仕事ですから……」

「いやいや、山田先生のおかげです。ありがとうございます」

「そ、そういうですか？ そういう言われると照れちゃいますね。あはは……」

「疾風、一夏何してこるの……？」

ん？ シャルルが戻ってきたのか。

「先に戻つててつて言つたよね。それに一夏は先生の手を握つて何をしているの？」

「あ、いや。なんでもない」

一夏はすぐに手を離す。山田先生もシャルルに言われて急に恥ずかしくなたのか、後ろを向いた。

「ああ、すまない。先生からの連絡を聞いていたんだ」

「喜べシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

テンションが上がりっぱなしの一夏が言ひ。

「やつ

シャルルはそのテンションの高い一夏を横目で見ながらYUを解除してタオルで頭を拭き始めた。てか、なんかさつきより機嫌が悪いな……

「ああ、そういえば織斑君と鼎君にはもう一つ用件があるんで職員室まで来ていただいていいですか？」

「分かりました、行くぞ一夏　　ああ、シャルル多分遅くになると思つから先にシャワー使つて良いぞ」

「うん、分かった

「じゃあ、行きましたよ」

「…………はあつ…………」

ドアを閉め、寮の部屋に自分一人だけになつたところでシャルルは大きくてき出すよつにため息を漏らした。それまで我慢していたせ

いだらうか、無意識に出たそれは本人が思つたよりも深く、本人が驚くくらいだった。

(何をイライラしているんだか)

閉じたドアに背を預けながらさつきの更衣室でも自分を思い出す。その態度が今になつて恥ずかしい。きっと疾風も面食らつていたに違いないと思つと、ますます落ち込みに拍車がかかる。

(……シャワーでもして気分を変えよう)

シャルルはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへ向かった。

「さて、終わった、終わった

俺の用件は職員室で簞に預けた打鉄についての数枚の書類に名前を書くだけだった。

一夏は白式の正式な登録に関するので結構な枚数があつたから俺は先に戻っていた。

「ただいま、シャルル？」

部屋に入るとすぐにシャワールームから響く水音に気づく。

（そういうや、シャルルがボディーソープ切れてたって言つてたな…）

俺はシャルルが言つていたことを思いだし、クローゼットからボディーソープを取出し渡そうと思つて、シャワールームの間にある洗面所へと入る。

ガチャ ガチャ

「シャルル。替える

」

「は、は、はや……て……？」

「は……？」

シャワールームから出てきたのは、金髪の女子だった。
どうしてわかつたのか。胸があるからだ。

「あああっー？」

ガチャ！

大きなドアの音で俺は我に返った。

「……ボディーソープ、ここに置いておくから」

「う、うん……」

俺はシャワールームのドア前にボディーソープを置いて出て、いつの間にか自分のベッドに腰掛けていた。

ガチャ

少しして、控えめに脱衣所のドアが開かれた。

「あ、上がったよ……」

「あ、ああ……お茶でも飲むか？」

「う、うん。もうおうかな……」

俺はお茶を淹れて、シャルルに渡す。

シャルルはいつもどおりのスポーツジャージだったが、胸を隠していた特製のコルセットを外しているため女子と認識できる。そして俺達は向き合いつつ互いのベッドに座り、お茶に口をつけていた。

「あ、あの疾風」

「話したくないなら別に話をなくて良いぞ」

「……ううん、大丈夫」

「やうか…じゃあ、どうして男装してまでここに来たんだ？」

「……実家からひしひしひして言われたんだ」

「実家…『テコノア社の社長か』

「うそ、そう…僕のお父さん。その人からの命令なんだ」

「だとしてもどうしてだ。実の娘に命令なんて？」

「僕はね、疾風。愛人の子供なんだ」

俺は思わず絶句してしまった。

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんがなくなつたときには、父の部下がやってきたんだ。それで色々と検査する過程でIIS適正が高いことがわかつて、非公式ではあつたけれど『テコノア社のテストパイロットをやることになつてね』

シャルルはおそらくこんなこと話したくない話だらう。でも、話てくれるシャルルを俺は見つめて黙つて聞く。

「父にあつたのは一回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸によばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかつたのにね」

あはは、と乾いた愛想笑いを続けるシャルル。俺は徐々に怒りが沸々と湧き上がつてくるのが分かり、無意識に拳を強く握り締めていた。

「……そして、そこから『テュノア社の経営危機、か

「うん。それで

「もういい。事情は把握した……その経営危機を解決するための広告塔として、そして俺と一夏、俺たちのISデータを得るために近づきやすくなつて男爵としてここに入ってきた。そうだろ」

俺はこれ以上シャルルに話させないために遮つた。

「うん、その通り……」

「……シャルルは良いのか。そんな肩の操り人形になつて……」

「良いとは思つてないよ。でも、もう疾風にばれちゃつたしきつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「…………」

「ああ、なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていて『ゴメン』

シャルルは深々と頭を下げた。

「……シャルル、お前はこれからビラフしたいんだ?」

「どうつて……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知つたら黙つていないのでうし、僕は強制送還されて、よくて牢屋とかじやないかな」

「やうじやない! 僕はお前の意思を聞きたいんだ!」

「……意思なんて僕には無いよ」

そつと顔を上げたシャルルの微笑みは、痛々しいものでそれと同時に俺はこいつを守りたいと思つた。

「え／＼は、疾風！？」

俺はその想いのまま座っているシャルルを抱きしめていた。

「…………」

「え？」

「特記事項第21、本学園における生徒その在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。つまり、この学園にいれば、すくなくとも3年の間はデュノア社やフランスもお前には手を出せない。だから、その間に何か良い手を考えればいいだろ？」

「でも、3年間で何も考えれなかつたら…僕はどうすればいいかな？」

「その時は俺がお前を守る。俺がお前の居場所になつてやるよ。それでデュノアやフランスが何言つても俺の力で絶対に屈服させる」

シャルルを抱きしめていた腕を放しながら即答する。

「でも、そんなことをしたら疾風が……」

「俺は大丈夫だ。それにもしもの時は『テュノア社をつちの会社の傘下にして肩を権力的に潰してやる」

「え、会社って？」

「ああ、BRAVE社ブレイヴって知っているよな」

「うん。数年で量産機ISのシェア世界第1位になつたあの大企業だよね？」

「ああ、それで俺はそこ副社長をしているんだ」

「えっと……それって……」

「やつぱり、急の話で話が飲み込めないよな。

「ああ、いっちはうが分かり易いか……」

俺は自分の私物から仕事でいつも使う名刺を一枚取り出す。

「Bonjour, une jeune dame. Je suis un vent fort de - azalee des vice-présidents de compagnie COURAGEUSE. Ensuite, connaisance. 訳 こんにちは、お嬢さん。私はBRAVE社の副社長

の皐月疾風です。以後、お見知りおきを）

シャルルに名刺を渡しながら仕事モードになつてフランス語で話す。

「……え…ええええ！」

「じつ、静かに」

シャルルが名刺を受け取つて、数秒すると大声を出ししそうになつたが俺はすぐにシャルルの口を塞いで口元に人差し指を立てるヒカルはすぐに縦に首を何度も振つたので手を離した。

「ひ、ひどいよ、疾風……」

「すまん、すまん。だが、今のその状態で誰かに来られたら困るだろ？」

「う、うん。ねえ、疾風……」

「なんだ？」

「ありがとう」

そつ言つてシャルルはやつと微笑んでくれた。その表情には屈託もなく、とても優しい十五歳の女の子そのものだった。

「ま、まあ、俺は単にせりたいことをやつただけだからな……」

自分でも顔が火照るのが分かって、照れくさくなつて視線を逸らした。

「それでもありがと（へうう～）……」

シャルルのお腹が可愛く鳴つて頬を真っ赤にした。

「ふふ…まあ、たしかにそろそろ飯の時間だな。飯貰つてくれる

「う、うん…」

俺は少し笑いながら部屋を出た。

12話 シャルルの秘密（後書き）

俊さんいつもいつも本当にありがとうございます。

余談ですが久しぶりにコードギアスを見ていて、ランスロットを見たら、ISの第4代型みたいだなあ～と思つていました。

感想・ご意見お願いします。

俺が食堂に向かつて歩いていると田の前に一夏が見えた。しかも、右腕に籌、左腕にはセシリアが腕を組んで歩いている。

こんな全国の男子が見たら、泣きながら殺しにかかるんじゃないか？

「よつ、両手に花だな。一夏」

「み、みお～疾風……」

おこおこ、歩きついこつて思つてこる顔してこるな

「あら、疾風さん。」んばんわ

セシリアはす、嬉しそうな顔をしてこるな。それで筹は……

「…………よお、疾風」

ハハハ、やつぱり嬉しそうな恥ずかしこうな顔になつてこるな。

「今から飯か？」

「ああ、さつき書類書きが終わって部屋に戻ろうとしたら、セシリアに飯誘われて、その後に簾に会つたらこうなったんだよ……」

なるほど……むじぎめセシリ亞が勝ち誇った顔をして、それを見た簾がジョラシーを感じて、腕を組んだ、と言う感じか。

「しかし、よかつたな一夏。お前に思いを寄せる人がいっぱい居つな」

「ん、どうこいじだ？」

「……一夏、質問だが今、思つてゐる事はなんだ？」

「え? うーん、歩きづらこかな」

その瞬間、ぎりつーと一夏は両方から腕をつねられた。まさか、本当に顔に出でこる」とだったとは……

「一Jの状況で他に言ひつ事無いのか……」

「血ひの幸福に自覚しないものは犬にも劣りますよ」

うん、セシリアの言ひとおりだな。

「一夏、お前はあれだ。一度頭を強打して思考回路を直したほうが良こと思つ」

「やめどいたいんだが...」

だって、そうだった。俺だって、こんなことがあればすぐに気づくぞ。

「まあ、もつ良い。これ以上俺がいるとお邪魔になりそうだからな、先に行くぞ」

「？？ああ」

だから、その状態でじいじまで立つてこむのになんでお前は分からん
といふ顔をするんだよ。

本当にこいつの鈍感はある種最強だな。

「はあ… もう良いよ。お一人さん、楽しんで」

「はい！」

「ウル」

俺は一夏たちよつ歩を早くして、食堂に向かつた。

俺が食堂で簡単に飯を食べた後、シャルルの分の料理を貰つて、部屋に戻つた。

「ただいま」

「あ、お帰り疾風」

「もうひてきたのは焼き魚定食だけどいいよな?」

「うふ、ありがとう。いただくな」

にっこり笑つて俺からトレイを受け取つて、テーブルに置いたところで表情が固まつた。

「どうかしたか?」

「え、えーと……」

「…ああ、もしかして箸、か?」

「う、うん。練習はしているんだけどね」

「すまん、そういうの考えてなかつた。フォーカーとかもういつてくる」

「えつ？ い、いいよ。完全に使えないわけじゃないから」

「遠慮するな」

「で、でも……」

「はあ、シャルル。お前はもう少し他人に甘えろ。遠慮ばかりしていると人生損するだろ」

「う、うん」

「それに俺はどんなことがあってもシャルルの味方だ。だから俺を頼れ」

「う、うん……じゃ、じゃあ、あの……」

「なんだ？」

「え、えつと、ね。その……は、疾風が食べさせて」

シャルルの予想斜め上を行つた言葉を聞いて、俺は一瞬惚けてしまつた。そこにシャルルがアゴを引いた上で遣いで言葉を重ねてきた。

「あ、甘えてもこいつて言ったから……だめ?」

「あ、ああ、分かった」

とにかく、今の俺にこの選択肢はない。これはやっとシャルルが言に出した『お願い』なんだ。

(しかし、レジで遭には反則だろ…)

シャルルはまるで、捨てられた子犬が段ボール箱の中で雨の降りしき中の助けを求めてるみたいな眼差しをしていた。

俺はシャルルから箸を受け取り、鰯の身をつまんだ。

「じゃ、じゃあ……あーん」

「あ、あーん」

「う、美味いか?」

「う、うん。おここによ

「そ、そつか……次は何にする?」

「えっと、次はご飯がいいな……」

「あ、ああ

そしてまた箸で女子一口分ほどの量をつまむと、受け皿の手を添えてシャルルの口にそつと運ぶ。

「あ、あーん」

「ん……」

ぱくっと料理を食べるシャルルの仕草に対して、妙にドキドキし落ち着かない。

「つ、次は和え物がいいな

「あ、ああ

結局全てを食べさせる事になり、途中からはお互い恥ずかしくて言葉数が少なくなつていき、食事が終わると話もそこそこに2人ともベッドに入った。

「……眠れん」

ベッドに入つて時間が経ち、真夜中になつた。が、さつきのこともあつて気持ちが高ぶついて、眠れなかつた。

「はあ、だめだ…」

俺はベッドから出で、シャルルを起しえないよつに静かにベランダに出で、空を見る。

空は雲一つ無い青天で星空が綺麗に見えた。

「今日が本当に色々な事があつたな……」

俺は今日一日を思い出していると背後で動く気配を感じた。

「疾風…」

「シャルル…悪い、起こしちまつたな」

「う、ううん。僕も眠れなかつたから」

「や、そつか」

シャルルも俺の隣に来て、星空を見た。

「……綺麗だね」

「そうだな。元々6月の星空は梅雨のせいで曇りや雨で見れないことが多いけど、その代わり4つの惑星が綺麗に見れるんだ」

「そうなんだ。疾風つて星に詳しいんだね」

「まあな。それでBRAVE社製のIS^{フレイフ}は全部星に関する情報を付けているからな」

現にミーティアは流星、プロキオンは「いぬ座のアルファ星、そして次にロールアウトする機体も星にする予定だしな。

「あつ、そういえばそうだね」

「そうこうことだ。さて、そろそろ部屋に戻るか

「うん」

俺とシャルルは部屋に戻ったが体が寒くなつていて、そのままベッドに入つてもやつより眠れなくなつていた。

「シャルル、お茶淹れるけど、お前も飲むか?」

「うふ。それじゃ貰おつかな

「了解

俺は簡易キッチンで電気ケトルでお湯を沸かして、急須へ注ぐ。そこから少しして茶葉がちょうど奥こくらに広がったあたりにシャルルの湯飲みに注いでシャルルに渡した。

「ほい、どうだい」

「あつがとつ……あれ？ 前とは色が違つね」

「ああ、これはほうじ茶。茶葉を焙煎したものなんだ。こいつは特の香ばしさがあつて、口当たりがあつたりしているんだ」

「へえ、そうなんだ。 うん、美味しい」

「寝る前に飲むならこいつが良いこと思つてな。シャルルは緑茶とほうじ茶のどっちが好みだ？」

「うーん、どっちも美味しいナビ、僕はこのほうじ茶だね」

「わうか。それじゃ、ほうじ茶メインにするな」

「うふ。ありがとうね」

その後は他愛も無い話をして、ベッドに入るとグッスリ眠れた。

1-3話 星空の下で（後書き）

俊さん、いつもありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

14話 疾風×シラウカ

シャルルの秘密を聞いて、一田経一、丹曜田 朝。

シャルル（男装）と途中で合流した一夏と一緒に教室に向かっていると廊下にまで聞こえてくる声が聞こえた。どうやら、声の元はうちのクラスだった。

「本当にだつてばー！」の尊で学園中持ちきりなのよ？ 丹末の学年別トーナメントの優勝者には織斑君か皐月君と交際」

「俺らがどうかしたのか？」

「あやああつーー？」

普通に話しかけた一夏に返ってきたのは取り乱した悲鳴だった。まあ、あの尊のことでも話していたのだろうな。

「で、何の話だつたんだ？ 僕と疾風の名前が出ていたみたいだけど」

「へ、うん？ どうだけ？」

「そ、まあ、どうだつたかしら？」

鈴とセシリアは話を逸らさずする。だが、「まかすならもう少し

「つまくやれよ。

「じゃ、じゃあ、あたし自分のクラスに戻るからー。」

「へ、そうですね！わたくしも自分の席につきませんと」

二人はそのままよそよそしい様子でその場を離れていく。

その流れに乗つてなのか、何人か集まっていた他の女子達も同じよう^うに自分のクラス、席へと戻つていった。

「……なんなんだ？」

「まあ」

「バシンッ！スッ！」

「ちつ、上手く避けたか…一人ともH.R.だ。さつさと席につけ

俺はすぐに背後の千冬さんの気配を感じて、回避。一夏は気が付かず、千冬さんの出席簿をくらつた。

てか、教師が『ちつ』はマズイですよ、千冬さん。

「わざと席に着け」

「「はー」」

そして、授業も終わり、今は放課後。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと」

「第3アリーナだ」

「「わあっー?」」

「お前ら、驚きすぎだろ」

廊下で俺と一夏とシャルルが並んで歩いていたが、そこに篠の声がいきなり飛び込んできて一夏たちは声を揃って声を上げた。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、ねい。あまん」

「「」みんなセー。こきなつのはじでびっくりしちゃつて」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

折り畳正しへじと頭を下げるシャルルに、さすがの簾も氣勢を削がれたのだ。

「簾もあいつの調整か？」

「ああ、今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦もできるだろ？」

「あこつ。」

一夏は不思議そうにそう聞こえた。

「まあ、簾の秘密兵器だな」

「やうだな」

「へえ、そんなのがあるんだ」

俺たちは話しながらアリーナに向かってみると、近づくにつれなに

やら慌ただしかった。せひやうやく陣地である第3アリーナで起きていた。

「なんだ？」

「何かあつたのかな？」机で先に様子を見ていく？」

「そうだな」

俺たちはとりあえずアリーナ内の様子を見るために観客席に向かった。

「誰かが模擬戦してるみたいだね。それにしても様子が……」

ドゴンッ！

「「「「」」」

突然の爆発に驚いて視線を向けると、その煙を切り裂くように一つの影が飛び出した。

「鈴一セシリア！」

「相手は…ラウラ・ボーテヴィッチか」

そこにはたしかにセシリアと鈴がラウラと対するよつにいた。が、セシリアと鈴のISはかなりのダメージを受けている。機体のところどころがが損傷し、ISアーマーの一部は完全に失われている。一方、ラウラのほうは無傷というわけではないが一人と比較したらかなり軽微なものだった。

「何をしているんだ？　お、おい！」

しかしバリアーによつて一夏の声は一人に届かなかつた。

「へりえつーー！」

鈴は《龍砲》を放つ。だが、ラウラは回避をしようとしてない。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーGENの停止結界の前ではな

しかし、ラウラに衝撃砲の攻撃はいくら待つても届くことは無かつた。

「くつーまかをこつまで相性が悪いだなんて……」

ラウラは右手を突き出しバリアーのよつなものを展開して衝撃砲を無力化し、すぐさま攻撃に転じる。

(あれはA.I.Cか…なるほど、たしかに衝撃砲じゃ相性が悪すぎる)

そして、すぐさま肩に搭載された刃が左右一対で射出され、鈴の工房に迫り、鈴の右足を捕えた。

「やうやく何度もさせるものですかっ！」

鈴の援護のため射撃を行つセシリア。同時にビットを射出し、ラウラと向かわせる。

「ふん……。理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第3世代型兵器とは笑わせる」

セシリヤの射撃とビットによる視界外攻撃。その両方をかわしながら、今度は左右同時に突き出し、交差させた腕の先ではビットがAIICによって、動きが止められた。

「動きが止まりましたわね」

「貴様もな」

セシリ亞の射撃は、ラウラの大型カノンで相殺される。

すぐさま連続射撃の状態に移行しようとするセシリ亞を、ラウラは先ほど捕まえた鈴をぶつけて阻害した。

「あやああっ！」

ぶつかり、空中で一瞬姿勢を崩した二人へとラウラが『瞬間加速』イグニッショングーストで2人との間合いを詰めた。

「ぐつー！」

鈴は再度、衝撃砲を展開し、その砲弾エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは

その言葉通り、衝撃砲はその砲弾を放つ寸前にラウラの実弾砲撃によつて爆散した。

「もうひた」

「一。」

肩のアーマーを吹き飛ばされて大きく体勢を崩した鈴にラウラのラズマ手刀を懷へと突き刺す。

「させませんわ！」

間一髪のところで鈴とラウラの間に割り入ったセシリアは《スターライトエクスリード》を盾に使って、必殺の一撃を逸らす。同時にウエスト・アーマーに装着された弾頭型ビットをラウラへ向けて射出させた。

ドガアアッ！

おこない、至近距離でミサイル攻撃つてどんな自殺行為だよ…

爆発は鈴とセシリアを巻き込み、2人は床へとたたきつけられる。

「無茶するわね、アンタ…」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージを…」

セシリアの言葉が途中で止まる。

「……

爆煙が晴れ、そこには何事も無かつたように佇んでいたのはラウラ
だった。

(しかし、こうなつたらヤバイぞ。あの一人……)

俺は万が一の時のために流星^{ミーティア}をいつでも展開できるようになつた。

「終わりか?ならば 私の番だ

言つと同時に『^{イグニッションブースト}瞬間加速』で地上へと移動、鈴を蹴り飛ばし、セシリ亞には近距離からの砲撃を当てる。

そこから模擬戦じゃなく、一方的な暴虐が始まった。

その腕に、脚に、体に、ラウラの拳がたたき込まれる。シールドエネルギー^{レットゾーン}はあつという間に減り、機体維持警告域を超え、操縦者生^{ヨン}命危険域へと到達する。

そして、普段と変わらないラウラの無表情が確かに愉悦に口元を歪めたのが見えた。

「(あの表情…マズイ!) — 夏! — 零落白夜[』]でシールドを斬り

裂け！

「ああーおおおおおおつー。」

一夏は俺が言う前に既に白式を展開、同時に《雪片式型》を構築して全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動して、アリーナのシールドを切り裂きシールドの間を突破した。

「シャルル！」

「うんー。」

俺とシャルルもすぐに自分のHSを展開して、一夏が作ったシールドの間からアリーナに入った。

一夏はすでにラウラに斬り込んだがやはりAICOに捕まって、体が止まっていた。

「な、なんだー？くそっ、体がつ……ー。」

そして、零落白夜のエネルギー刃が次第に小さく消えていく。

「やはり敵ではないな。この私とショヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない 消えろ」

「やらせるか！」

俺は『瞬間加速』で接近しながら、鈴とセシリアを捕まえているワイヤーブレードを開いたGNソードビットで切り裂き、持っていたGNソードでラウラに斬撃を食らわせようとしたが、ラウラはすぐさま『瞬時加速』でその場から離れた。

「一夏とシャルルは2人を！」

「分かった！」

「うん！」

一夏とシャルルはラウラが離した鈴とセシリアの元へと飛び込み、抱きかかえた。

「逃がさん」

ラウラは大型カノンの照準を一夏たちに向けて撃つ。

「だから、やらせねえよー！」

俺はすぐにGコソードをライフルモードにして、一夏たちに迫る弾丸をゲームで貫いて、爆散させた。

そして、俺は一夏たちを背にしてラウラの前に立った。

「何故だ…」

「何?」

「千冬さんからの教導の中にボロボロの相手を痛めつけられてのがあつたのかー…。」

「そんなのあるはずがないだろ?」

「な、う、なんであこつらをあやまでやつた…」

「フン、あこつらが自身の力を過信していたからだ。上には上がり」とを分からせるためにしたまでのこと

「…………ああ、なるほど……良かつたぜ。千冬さんがこんな馬鹿ひっこことを教えて無くてな……」

俺は少し笑って、持つて居るGコソードをラウラに向ける。

「……ひさひさ、お前は『力』と『強さ』の意味が分からない凡愚らしいな…」

「なにー！」

「良こぜ……来じよド二流、格の違ひつゝいつを見せてやる
「良こだらう……ならば、最初にお前をわしきの奴らと回じこしてや
るー。」

そつぱつて、俺はGUNソードを構え、ラウラもプラズマ手刀を構え
る。

そして、同時に斬りかかるうとした瞬間、俺たちの間に誰かが割り
入ってきた。

ガギンッ！

金属同士が激しくぶつかり合つ音が響き、ラウラは誰かに加速を中
断させられた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬さんー？」

その人の姿は普段と同じスーツ姿で、IS用近接ブレードを持ち、
俺とラウラの間に割り入った。

てか、生身でISの武器を振り回すなんて…さすがというかなんと

「…」

「模擬戦をやるのは構わん。…が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならっては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

ラウラは素直に頷いて、E.Sの装着状態を解除した。

「皐月、織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな?」

「はい」

「あ、ああ」

「教師には『はい』と答える。何回言わせるつもりだ」

「は、はい」

「僕もそれで構いません」

その言葉を聞いて、千冬さんは改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止とする。解散ー。」

まるで銃声の様に千冬さんが手を叩く音がアリーナに響き渡った。

14話 疾風スリカラ（後書き）

文才力がない自分にとつては後さんには感謝しています。

感想・ご意見お願いします。

15話 シャルルの想い

あの後、ボロボロになつた鈴とセシリアは保健室に運ばれ、俺とシャルルは一人のために自販機で飲み物を買つていた。

「よし、紅茶とウーロン茶ならあいつらでも飲めるよな」

「うん。自分の国の飲み物なら大丈夫だと思うよ」

「だよな」

そうして、保健室に戻つて、入つた瞬間、

「バカつてなによバカつて！バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

鈴とセシリアの怒り混じりの声が聞こえてきた。

「…はあ、怪我人ならもう少し静かにしろよ」

「はは…でも、好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「だな」

これが一夏の耳に入れば、少しは自覚するかね。

「ん？」

……どうやら、シャルルの言葉は一夏の耳には入らなかつたようだ。そして、鈴とセシリアはしつかり耳に入つたらしく、顔を赤くしていた。

「ななな何を言つてゐるのか、全つ然つわからんないわねー！」
〔これだからヨーロッパ歐州人つて困るわね！〕

「べべつ、別にわたくしはつ！そ、そういう邪推をされるといきさか氣分を害しますわねつ！」

セシリ亞と鈴は全力で否定してゐるな……一夏はこれを見ても自覚しないなんてある種凄いな。

「はあ、お前らもつ少し自分に正直になつたほうが良いぞ」

まあ、これは鈴とセシリアもだけど、筈に一番言えるな。

「私はいつも正直よ！」

「そうですねー」

「はあ、そうですか。とつあえずウーロン茶と紅茶。これ飲んで落ち着け」

「ふんつ！」

「不本意ですかいいただきましょ、うひー。」

一人は俺から飲み物をひつたくるようにして取り、一気に飲んだ。

「ま、先生も落ち着いたら帰つていひつて言つてるし、しばりく休んだら」

卷之三

「な、なんだ？何の音だ？」

地鳴りのような音はどうやら廊下から響いていた。しかも、徐々に近づいてきていた。

ドカーン！！

その瞬間、保健室のドアが吹き飛んだ。おいおい、鉄の塊が吹き飛ぶところなんて初めて見たぞ。

そしてその吹き飛んだ鉄の塊が俺の隣にいたシャルルに

「シャルル！」

「え？ キヤツ！」

あまりの光景に啞然としていたシャルルの手を引いてこすりに引き寄せた。

そしてドアのなくなつた保健室の入り口からは文字通り雪崩れ込んできたのは数十名の一年生（リボンの色で分かつた）女子だった。

「あ、あの疾風？ そろそろ離してもらつていい？」

「ん？ あ、ああ悪い」

先ほどシャルルを引き寄せた時にそのまま抱きしめるような形になつていたため、シャルルは恥ずかしいようで顔を赤くしていた。

だが、離した時に残念そうな顔になつたような気がするが……うん、氣のせい…だよな？

そんなこんなをしていると結構広い保健室はあつという間に人で埋

め尽くされ、俺たち男子を包围してそれぞれが手を伸ばしてきた…
「人の間から手、手、手、手…これなんてホラーだ？」

「お、おい…これなんなんだよ！」

「ど、どいたの、みんな…ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「「これー」「」」

バッと女子軍団から差し出されてきた紙を一夏が受け取る。

「な、なんだそれ？」

「え~と『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする』

「もへ、そこまでいいからーとにかくー」

「私と組もう、皐月君ー！」

「私と組んで、織斑君ー！」

「私と組んでよ、テュノア君ー！」

そして、再び起るホラー状態……現実でこんな見る日^{リアル}が来るなんて思わなかつたな。

けど、本当は男2人に女1人なんだよな。

「え、えつと……」

ふと、シャルルの方を見てみると困り果てた顔でじつちを見ていた。それも仕方がないか。トーナメントに向けての練習の間はそのペアになつたやつと一緒に居ることが多くなる。つまりふとしたことでシャルルの正体がばれる可能性がある。それはなんとしても回避しないと。

「悪い。俺はシャルルと組むから無理だ。それと一夏も筹と組むから無理な」

そう言つてシャルルの方に田を向けると、田を一瞬見開いたあとに安堵したような表情になつた。

「お、おい！疾風！」

その瞬間、急に人だかりの後ろから名前が呼ばれる。そして、無理やり一番前に出てきたのはやはり筹だった。

「お前！勝手なことを

」

「いいだろ？ セツカくチャンス作ってやったのに棒にふる気がよ？」

俺は篠にしか聞こえないぐらいの声で言つと篠は顔を赤くして何も言わなくなつた。

「それに一夏も即席ペアより幼馴染の篠のほづがやりやすいだろ？」

「そりだな……分かつた。篠、俺と組んでくれないか？」

「……ああ、分かつた」

よし、これで少しばかり進展してくれよ。

「さて、これで話は終わりだ。ここには怪我人もいるんだ。ほら、

解散、解散」

俺は千冬さんみたく手を叩くと一人、また一人と保健室から出て行き、残つたのは俺、シャルル、一夏、篠、そしてベッドの上にいる鈴とセシリ亞だった。

「さて、これで平和的に」

「ジジが平和的なのよー。」

刹那、鈴が枕を投げたが俺はすぐ「それを受け止めた。

「一体、なんですかなるのよー。」

「もうですわー。こへりなんでもそれは引き下がれませんわ」

やつ血ひ、鈴とセシリアは声を荒げる。

「はあ、お前、アーナメントヒントリーから出来ないと血ひる」

「なんですよー。」

「まあ、一つ曰く、お前のやうの怪我は

びつ見ても重傷だら、その怪我は。

「いー、これくらいこ大丈夫ですかー。」

「なりー、一つ曰く……お前らのHIS、ダメージレベルが良くてこ、悪くてそれ以上を超えてこる。あれじゃ、ヒントリーの許可が降りるは

「すがない」

「「...」」

これは開発者の見解だ。あの破損具合を見て、破損割合が6割は超えてる。そんな状態で学園側がエントリーを許可するはずがない。それを分からぬ代表候補生じやないだらう。

一人は苦虫を噛み潰したような表情をしていた。まあ、それほど一夏とくつづきたかつたんだろうな。

「それじゃ俺とシャルルは戻るぞ。しっかり安静にしろよ」

「じゃ、じゃあ、お大事に」

俺とシャルルはそう言つて、ドアのない保健室から出た。

「あ、あのね、疾風」

「ん?」

夕食後、部屋に連れ立つて戻るなり、シャルルが口を開いた。

「あの、遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」

「ん？俺が何かしたか？」

「ほり保健室で。ドア飛んできた時に助けてくれたし、トーナメントのペアを言いて出してくれたの、すごく嬉しかった」

「ああ、アレか。気にするな。事情を知っているのは今のこと俺だけだしな、サポートするのは当然だろ？それにドアのことに関しては俺もマズイと思って、シャルルの手を引いていたからな」

「でも、ありがとうね。僕、誰かのために自分から名乗り出られるなんて、すごく素敵なことだと思う。僕はすごく嬉しかったよ」

「もうか……といひで、俺しかいなこときに無理に男子口調にしなくてもいいぞ」

「う、うん。僕 私もそつぜうただけじ、ここに来る前に『正体がバレない』ように『元ひう』って、徹底的に男子の仕草や言葉遣いを覚えさせられたから、すぐには直らないかも」

なるほど、すぐにボロが出ないようにしてことか。デュノアも一応、馬鹿ではないか……

「で、でも、その……やっぱり女の子っぽない、かな？」

「ん？自分のことを『僕』って言つていいのか？」

「や、やう。女の子っぽくないんだつたら、疾風と二人きりの時だけでも普通に話せるよしがんばるナビ……」

「無理にしなくてもいいだ。それに俺はどんな喋り方でもシャルルは可愛いと思つ」

あ、つい本音が…まあ、別にシャルルだつたら氣を悪くしないか。

「か、可愛い……？僕が？ほ、本当に…ウソついてない？」

「ああ、信じる。それにシャルルはもう少し自分に自信を持て」

「…………うん、じゃあ、別にいいかな」

「ああ。やういや、お互に制服のまんまだな。俺は外に出でるから着替えるよ」

「あ、いいよ別に。僕は気にならし、疾風に悪によ」

「いや、俺が気にするんだよ……それにひつと電話もしたいんだ」

「う、うん。分かった。それじゃ、早く着替えるよ」

「別にやつべりで良いだ。俺もかかると思つかうな」

「う、うん」

『俺はそうして部屋を出て、携帯を取り出して、少し操作して耳に当てる。少しコール音が続いてから、ガチャツと聞こえた。

『やあやあ、どうしたんだ、疾風君。まさか君から電話がくるとは思わなかつたよ』

「……どうも、鳥海わん」

この人は情報屋の鳥海 恭也。ひこうみきょうう 正直、俺はこの人は嫌いだ。だが、今はそつは言つてられない。

「今回も情報を売つてください」

『了解。それでなんの情報が欲しいの? フランス政府? デュノア社?』

『……どうしてその一つだと想つんですか?』

『勘だよ、勘。俺の勘はよく当たるのは知つてているだろ? それでどちらのが欲しいの?』

『……とりあえず、デュノア社の裏でやつている」との情報をください』

『フムフム……なるほど、さしづめ籠に閉じ込められたお姫様を助け
い』

クイーン

る、といったところか?』

「どうじゅうとですか?』

『ハハハ、解つてゐるくせに。IS学園にいるデュノア社の社長の愛人の子供をデュノア社から助けるんだろう?』

「!?……それも“勘”ですか」

内心驚いたがあくまでポーカーフェイスで話を続ける。

『ハハハ、さあ、それはどうかな?』

……やつぱりこの人は好きになれないな。なんか、全てを見透かされるような感じがする。

「……とにかくお願いします。報酬はいつもどおりの方法で」

『了解。それじゃ、またのじ利用お待ちしてまーす(ブツシ)』

「……はあ、とにかくこれで保険は出来たな……さて、そろそろシヤルルの着替えも終わつたろ?』
「づ

そう、これは保険。俺の読みどおりデュノア社が学年別トーナメントが終わった後に動いた時のためのだ。

俺は携帯を閉じてポケットに入れて部屋に入る。

俺がドアを閉めると同時にビビッとした音が聞こえて、反射的にそちらに顔を向けるが、すぐにドアのまづきに向いた。

「いたた……あつ、疾風……」

ビビッサッ、シャルルも俺に気がついたらしく。

「あ、ああ……」

「……もしかして……見た？」

「み、見てない……」

「本当の本当!?」

「ほ、本当だ」

「パンツの色は?」

「ピンク……あー?」

うっかり、口が滑ってしまった。

「疾風のえつち

「わ、悪い…」

「ま、まあ、いいけど…許してあげる」

その後、シャルルの着替えが完了すると今度は逆にシャルルがに後ろを向いてもらって、俺はわざと着替えを終えて、そのままベッドに入ると睡魔がすぐに押し寄せてきて、そのまま意識を闇に落した。

一方シャルルの方はなかなか眠れないでいた。

「疾風つづめ、ちや、ちやんといつてくればば、僕は別に……」

と、そこまで言つてからハッと我に返った。

(むつ寝よつ。うん。それがいい!)

シャルルは頭を振つてさつきの悪夢を追い出すと消していくなかつ

た照明を消すために一度ベッドから出て照明を消す。暗くなつた室内ではその明暗差にすぐには目が慣れない。

シャルルは疾風のところに向かい、疾風が寝てることを確認する。

(なにやつてるんだわ!……僕)

そう思いながらも、シャルルは寝ている疾風の顔を覗き込む。その距離は5センチとない。シャルルの胸の鼓動がだんだんと早くなる

シャルルは数日前のことと思い出していた

『ひじこひじこ』

『俺がお前を守る。俺がお前の居場所になつてやるよ

初めて、そんなことを言われた。

母を亡くしてからずっと、居場所がなかつた自分。血の繋がりだけの父親には氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、ただただ無為に日々を過いでしていた。

いつしか自分が必要とされることさえ求めなくなつて、温度のない灰色の生活が繰り返されていることにもやがて慣れてしまつていた。

そして、父からの命令で日本に行くことが決まったときも、別段何

も感じなかつた。

それなのに

(どひして疾風は「んなに僕の心を揺り動かすんだろ?」ね)

出合つてしまつた。

いつもわざつ氣なく、優しく笑つてくれる田の前の少年。」

「……疾風は優しいよ」

それからじばらくシャルルは疾風を見つめて、ひどく優しい表情を浮かべる。

そしてまるで母親が我が子にするかのように、やつとそのキスを額に落とした。

「おやすみ、疾風……」

冷めやらぬ体の火照りを抱きながら、シャルルは長い長い夜を過ごしたのだった。

15話 シャルルの想い（後書き）

いつも俊さんにはお世話をなっています。ありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

16話 禁じられたシステム（前書き）

今回は一夏回になります

16話 禁じられたシステム

六月も最終週に入り、学園は学年別トーナメント一色にと変わった。

「しかし、すごいな」「いや……」

一夏は着替えをしながらモニターを見て呟いていた。そこには各国政府関係者、研究員、企業エージェント、などが観戦しにきていた。たしか兄さんも来ているつて…あつ、いた。

「三年にはスカウト、一年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来てるからね。一年には今のところ関係ないけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、『苦労な』ことだ」

「まつたくだ」

「それより、一夏はボーデヴィッシュさんとの対戦だけが気になつてゐみたいだね」

「まあな」

「俺は別に誰と当たつても構わないがな。けど、トーナメント表の発表遅いな…」

今回の変則ペア対戦になつて従来まで使つていたシステムが正しく機能しなかつたらしく本来なら前日に出来るはずの対戦表が発表も今朝から手作り抽選くじで作つてやつていた。

「けど、一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいぜ」

「え？ どうして？」

「どうせ、一夏のことがだ。待ち時間に色々と考えにすむからとか思つているんだがつ」

「ああ、そうだぜ。出た」と勝負、思い切りの良さで行きたいだろう

ちなみに俺とシャルルはBブロック一回戦一組目。よつするに一夏たちと戦えるのは決勝になる。

「そうかもね。僕だつたら最初から手の内を晒すことになるからちよつヒマイナスに考えるかもね……あ、対戦相手が決まつたね」

モニターが対戦表に切り替えた。そこに表示される文字に俺、一夏、シャルルは食い入るように見た。

「…………え？」

「おーおー…」

そこには表示されていたのは一夏と篝対ラウラと名前も知らない生徒だった。なんか、その名前の知らない生徒が可哀想だな。

俺とシャルルは更衣室のモニターで一夏と篝対ラウラの試合が始まるのを待っていた。

「さて、そろそろ始まるな」

「そうだね。けど、ボーテヴィイッヒさんは一年の中で最強クラスだと思うけど、一夏大丈夫かな…」

「まあ、今の一夏じゃ勝てないだろ?」

「えつー!それじゃー?」

「けど、今回はパートナーがいる。それもパートナーは篝だ。あれなら勝率もかなり高くなる…」

そつ言いながら、モニターを見ていると試合開始までのカウトダウスタートンは始まり、開始した。

「「叩きのめす」」

一人の言葉が重なると一夏は『イグニッシュン・ブースト瞬間加速』を使って、一気に距離を詰めた。

「おおおつー」

「ふん……」

「くわ……」

だが、ラウラは余裕そうに右手を突き出し、AICOの構えをした。

一夏はそのまま突っ込んでラウラのAICOの網に捕まれ、身動き一つ取れなくなつた。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりやどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろ?」

ラウラはそう言って、肩の大型レールカノンが一夏に向ける。だが、一夏の顔は涼しいものだった。

「やいせるか！」

その瞬間、箒が一夏の横から現れ、ラウラに突撃した。

「ちつ……」

ラウラはAICOを解除して箒の斬撃を躊躇した。

さらにたたみかけてくる箒の攻撃はラウラが急後退をして間合いで取つた。

「逃がすか！」

だが、箒は即座に日本刀型のブレードを構え、ラウラに突撃する。

「ぐつ、この機体…本当に量産機ISなのか…？」

ラウラは予想していた打鉄と箒の操縦している打鉄の性能の差にすごくに気づいて驚いていた。

「すゞい…あの打鉄の動き、まるで専用機みたい」

俺の隣にいたシャルルも打鉄の性能に驚いていた。

「まあ、あの打鉄は篠のデータを詳しく取るために細かいリンクのズレを無くして専用機並に使えるようにしているからな」

「えつ！？それって疾風がやつたの！？」

「いや、あれには俺は手を出していくないし、あれは東さんが妹のためにやつたんだよ」

「篠ノ之博士が……」

シャルルは驚きながら、モニターに視線を戻す。俺もモニターに視線を戻すとどうやら一夏はラウラのパートナーを倒し、篠の隣に立つていた。

「サンキュー篠。あいつの足止めしてくれて」

「かまわん。それにこれも作戦だからな

「そうだな。それじゃ、行くぜ篠！」

「ああ！」

「くつ！舐めるな！」

ラウラは一人に向けて大型レールカノンを放つ。一夏は左、篠は右に回避するがラウラはすぐにワイヤーブレードを一斉に射出して、一夏へと突き進んでいく。一夏はワイヤーブレードをアーマーにかすりながらもぐぐり抜けて、自身の射程に入った。

「無駄だ。貴様の攻撃は読めている」

「普通に斬りかかれば、な。 それなら！」

一夏はそれまで足元に向けていた切っ先を起こし、体の前に向ける。突きの体勢だ。

だが、ラウラに突っ込んだ一夏の体はラウラのAHCによって体全体を固定された。

「腕にこだわる必要は無い。よつはお前を止められれば」「

「……ああ、なんだ。忘れているのか？それとも知らないのか？俺たちは 二人組なんだぜ？」「

「！？」

慌ててラウラは視線を動かすが、時すでに遅し。距離を詰めていた
箒はラウラの大型レールカノンを横に一閃する。

「ぐつー！」

どうやら、一夏と箒はAICの致命的な欠点。使用時には多量の集中力が必要であり、複数相手には弱いところを狙つたみたいだな。

「行くぞ！ 箒！」

「ああ、一夏！ 決めるぞー！」

一夏と箒は自分の得物を構え直して、互いに振りかぶる。ラウラの表情は文字通り必死の形相になつた。

「……ー！」

「「はあああー！」」

一夏と箒の声が重る。そして、2人の剣先はXを描く様にラウラの体を斬り裂いた。

その一撃によつてラウラには紫電が走り、IS強制解除の兆候を見せ始めた。

「決まつたな……」

俺が呟いた瞬間、異変が起きた。

「あああああっ！――！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。同時にシユヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、一夏と簫の体が吹き飛ばされた。

そして、モニターに映っていたのはラウラのエリシュ・ヴァルツェア・レーゲンの装甲だつたものがぐにゃりと溶けドロドロとしたものに変わり、ラウラを包み込んでいくものだつた。

通常、ISは『スタートアップ・フッティング初期操縦者適応』と『フォーム・シフト形態移行』でしか形状の变化は起こらない。パッケージを装備することで多少の変化はあるが、本来は基礎の変化は無い。

そして黒い、深く濁つた、暗い闇がラウラを飲み込んだ。あの感じ、一度見たことがある。あれは……

「まさか……VTSシステムか」

「えー？ それって、確か正式名称、ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムだつたはずだけど、あれってアラスカ条約でどこの国家、団体、企業においても全てが禁止されてるはずだよ？」

「ああ。おおかたドイツ軍がラウラのHSに入れられたんだり…」

…

そして、モニターに視線を戻すと変形は終了し、黒い全身装甲のようになっていた。ボディラインはラウラのそれをそのまま表面化したものであり、最低限レベルの装甲が腕と足に装備されている。頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ且の箇所には赤いアイライン・センサーが怪しく光っている。

そして、その手に握られているのは千冬さんがブリュンヒルデとなつた際に使用し、現在は一夏に受け継がれた《雪片式型》の原型の雪片 だった。

「…やっぱり、か。モンド・グロッソ部門受賞者でラウラが最も敬愛している人…」

「えー？ それって…」

「そう、今一夏と篠の前にいるのは現役時代の…ブリュンヒルデだった時の千冬さんだ。それにあんなのが出たら、一夏が…」

『おい、皐月』

その瞬間、見ていたモニターが変わり、千冬さんの顔が映った。

「なんですか」

『お前の眼から見て……あれをどう思つ』

「ラウラがシユヴァルツェア・レーゲンに搭載してあつたゾーティシステムを発動。持つているブレードから見て千冬さん、あなたのデータをトレイスしていますね」

『私も同意見だ……どこの馬鹿者か……』

「とにかく、早く観客席の隔壁を閉めて生徒と来賓の避難を」

『ああ、分かつてい』

『非常事態発令！－トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す』

スピーカーからのアナウンスの声が響き、観客席の隔壁が閉鎖、フィールドと隔離される。来賓や生徒たちは既に避難は始まっているだろう。

「……織斑先生、俺もアリーナに出て良いですか？」

『なに?』

「俺の見立てどおり、あなたのトータルをトレースしていくなり、教師部隊では止めきれないと思います」

『お前なら止めるとこいつのか』

「…まあ、技術面では負けていますけど、機体性能だつたらコニッシュターを解除すれば止められるといつ自信はあります。それに一夏が冷静さを失って、暴走しているかもしない。それも止めて来ますよ」

「……わかった。許可をしよっ」

「ありがとうございます」

俺がそいつと千冬さんの顔がモニターから消えた。

「は、疾風。僕も行つて良いく？」

「…前に出なになら良い」

「分かった」

「それじゃ、急ぐわ」

「うん。」

俺とシャルルは急いで更衣室からアリーナに向かつた。

俺とシャルルが自分のE.Sを展開してアリーナに出るとすでに教師部隊は黒いE.Sを包囲していた。そして、一夏は今にも食つて掛かっていきそうな勢いだが筹が押さえていた。

「一夏！ 筹！」

「疾風！？ お前どうして？」

「あれを止めにきた。千冬さんのデータをトレースしているのなら、教師部隊でも厳しいからな」

「待つてくれ、疾風！… あれは俺にやらせてくれ」

「……本気なのか」

「ああ」

「だが、今の白式にはエネルギーが無いではないか！」

なるほど、おおかた暴走した状態で斬り込んで行つたが逆に返り討

ちになつたみたいだな。

「まあ、無いなら持つてくれれば良い話だよな。な、シャルル

「うと

「どう二つことだ?」

「僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せるんだ」

「やうか! なら

「

「だが! 一つ条件がある

「じょ、条件?」

「ああ……絶対に負けるな

「……ああ、分かっている。ソロまで啖呵切って飛び出すんだ。負けたら、男じゃねえよ

「やうか。なら、負けたらどうする。シャルル?」

「そうだね……それじゃ、負けたら明日から一夏は女子制服で通つてね

「ハハハ、シャルルそれ良いな。んじゃ、やうこいつことだ一夏。負けたら、本気で女子制服で通つてもいい

「うう……うい、いいぜ? なにせ負けないからな!」

軽いジョークを交えた会話で一夏の頭は適度にクールになったみたいだな。

「じゃあ、始めるよ……リヴィアイヴのコア・バイパスを開放。エネルギーを流出を許可。」

展開していたリヴィアイヴから伸びたケーブルを待機状態である籠手の形になっている白式に繋がれ、そこからエネルギーが流れていった。

「……完了。リヴィアイヴの全部のエネルギーを全部渡したから、これで白式を展開出来るよ」

「ありがとうな、シャルル　　来い、白式!」

一夏の声と共に光の粒子が展開して、再度白式が展開される。

「い、一夏つ!」

それまで傍観していた筈が弾かれたように口を開いた。その口はまっすぐ一夏を見ていて、真剣そのものだった。

ガントレット

「死ぬな……絶対に死ぬな！」

「何を心配してんだよ、バカ」

「ばつ、バカとはなんだ！私はお前が

「信じろ」

「え？」

「俺を信じろよ、筈。心配も祈りも不要だ。ただ、信じて待ってくれ。必ず勝つて帰つてくる」

一夏は筈と勝利の約束をして田の前の敵を見る。そして『零落白夜』を発動。その形状は今までと違い、まさしく日本刀の形をしたエネルギー刃になった。

「いくぜ、偽者野郎」

一夏は刀を腰に構え、居合いの構えになつて黒いISに向かう。

「……」

黒いI-Sは鋭い袈裟切りを抜き放つがその刃を一夏は弾く。

そして、すぐさま上段に構え、縦に相手を断ち斬る。

「 め、め、め、ガ……」

その一撃によつて黒い機体に紫電が走り、それが真つ一つに割れて中から出たラウラと一夏の目があつた。

「まあ、ぶつ飛ばすのは勘弁しといへやるよ」

「 気を失い、倒れるラウラを抱きかかえながら一夏はそつそつぶやいてた。」

16話 禁じられたシステム（後書き）

毎度のよひに俊さんありがとうござります

感想・ご意見お願いします。

17話 休息

『トーネメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データの指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各個人端末で確認の上』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。俺は天丼を食べながらそれを見ていた。

「ふむ。シャルルの予想通りになつたな」

「そうだね。あつ、疾風七味取つてくれない?」

「おう、了解」

ちなみに俺たちはさつきまで教師陣に徹底的に事情聴取を受け、やつと開放された時には時刻は食堂終了ギリギリ。慌てて戻り、食堂に来ると騒ぎの話を聞きたい女子がかなりいた。

そして、その半分、いやそれ以上の女子はかなり落胆していた。

「優勝チャンス消え…」

「交際無効…」

「…………うあああああんつー！」

そして、バタバタバタッと女子数十名は泣きながら走り去っていた。
けど、食堂で走るなよ。埃が井に入るだろ？

「びつしたんだらうつね」

「ああ？」

「あ、俺知ってるわ」

「え、本当に」

「疾風、教えてくれ」

ま、もう話しても良いだろうな。それにもう無効の話だし。

「ああ、女子だけの噂で学年別トーナメントで優勝すれば一夏か俺
と付き合えるってことだつたらしいんだ。まあ、こうなつたら、
それも無効だらうけどな」

「えーそ、そんな噂があったのー？」

「あ、ああ本当だ。てか、びつしたシャルル急に大声出して

「えーあ、うん…なんでもないよ」

「せうか……ん？」

「……」

ふと、視線を感じて、そちらを見てみると女子が去った後に呆然と立っていたのは筈だつた。

一夏も筈に氣づいて筈の近くに移動した。

「せうひいえば筈。先月の約束だが

「な、なんだ」

「付き合つてもいいぞ」

「……なに?」

「は?今、なんて言つた?あ、あの一夏がついて筈の氣持ちに気づいただと!?

「だから、付き合つてもいいって……おわつー?」

筈も驚き、固まっていたがすぐにバネしきけの人形みたく、動いて、身長差のある一夏を締め上げた。

「ほ、ほ、本当、か？本当、本当、本当だなー？」

「お、おひ

「な、なぜだ？理由を聞いひではないか」

篠は一夏を離し、腕組をしてコホンコホンと咳払いする。頬は赤くなっている。よほど、嬉しいのだろうな。

「そりや幼馴染の頼みだからな。付を合ひつけ

「や、そうかー！」

いやー、やつと篠の初恋が実ったな。良かつた、良かつた。

「買ひ物くらい

……は？ 買い物？

「…………だひうど……」

簾の表情は「わざわざ」。ついで、簾は本腰で怒りこぶ。「か、怒れ。

「あ、ねいへ。」

「そんなことだらうと思つたわー。」

「すがつ……！」

簾の全力であるだらう正拳突きが一夏の腹に突き刺さる。

「ふんー。」

「ぐー」おひ……

そして、一夏の鳩尾に蹴りを入れた簾は走り去つていった。

「ぐーぐーぐー……！」

「一夏つて、ねぞとやつてゐんじやないかつて思ひつきがあるよな

「シャルル、これが一夏クオリティーダゾ」

「なんだよ……それ

「わあね」

「自分で考えろ、」Jの鈍感」

それからさつちりー5分後には一夏が回復した。

「ついでちょうど聞きたいんだが」

席に着いた一夏が話しかけてきた。

「なんだ？」

「ISで会話つて出来るのか？えーと、プライベート・チャンネルとは違う、なんか一人だけの空間、みたいなところでの会話なんだが」

「一人だけの空間…クロッシング・アクセス…相互意識干渉のことだらうな。操縦者同士の波長が合うと稀に起るってやつだ」

「おお、たぶんそれだ。しかし、波長…波長ねえ。なんかよく分からんって感じだな」

「ISにはよく分からぬ現象や機能がかなりの数あるよ。作った篠ノ之博士は全機能を公表していない上に現在も失踪中だし、前に何かのインタビューで自己進化するように設定した部分があるから、本人も全部を把握するのは無理だつて言つてた気がするよ」

たしかにそのとおりだ。実のところ俺もまだGUNPOWDERの全部は把握しきつてないしな。

「一夏、一人だけの空間で会話って、ラウリとか？」

「ああ、セツだが……」

「やうか…さて、そもそも食堂も閉じるな…戻るゼシャルル」

「うん」

「あ、皐月君に織斑君にテュノア君。ここにいましたか」

俺たちは食器を片付けに行こうと立ち上ると山田先生が近くに来た。

「山田先生、セツしたんですか？」

「なんですね…ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁ですー！」

「おおーそなんですかー？てっきり来月からになるとばかり

「それがですね。今日は大浴場のボイラー点検があつたので、もともと生徒は使えない日なんです。でも点検自体は終わつたので、男子の三人に使ってもらおうつて計らいなんですよー」

「あつがとくじでこます、山田先生!」

一夏はテンションが高くなり、山田先生の手を握り締める。なんか前もこんなことがあつたような……

「おい、一夏わひと手を離してあげる。先生、困つてるわ

「へ? あ、すいません!」

一夏はすぐに手を離す。山田先生も少し顔を赤くした。

「と、ともかくですね。三人は早速お風呂にどりつむ。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待つていてくださいね」

「はい。じゃあ早速、風呂に行きます」

やつれて、一夏は一足先に部屋に戻った。

「……シャルル、どうする?」

「う、うん。困つた……ね

「しょうがない……最初で最後の手段を使つか

「え？何か考へがあるの？」

「まあ、な」

とりあえず、俺とシャルルは一夏の部屋に向かつと準備を終えた一
夏がいた。

「疾風、シャルル、早く行け！」

「ああ、そうだな。それと……懲り（せり）」

最後の言葉は聞こえなかつただろうが、一夏の首に手刀を入れて、
氣絶させた。

そして、一夏の部屋に入れて、部屋を出た。

「……さ、着替えを取りにこいづせ

「疾風つてたまにてアムイハネ」

「仕方ないだる。それにシャルルもここ最近ドタバタして疲れが溜
まつているだろ？」「こでしつかり浸かって、疲れを取ないと」

「うん。じ、じゃあ、部屋に行つて着替え取つてこようつか

「ああ、早くこひつけ」

部屋に戻つて着替えを取つて大浴場に行くと山田先生が居た。

「あれ？ 織斑君はどうしたんですか」

「ああ……一夏なら急に具合コンディションが悪くなつたよつたので今は部屋で休んでます」

「そりですか。分かりました。それじゃあ、どうぞ。一番風呂風呂です
よー。」

幾分テテンション高めの山田先生に見送られ、脱衣場のドアが閉まる。

「さー… それじゃあ、シャルル。風呂入つて来い」

「疾風はどりあるの？」

「部屋に戻つた後にシャワーでも浴びるよ」

「で、でもそれじゃあ疾風に悪いよ」

「それじゃあ、一夏を何のために黙らせたか分からないぞ」

「…………じゃあ、その…」

「なんだ？」

「い、一緒に入らない？見なければ良いし…ダメ？」

「な、なに言ってんだ！」

「い、いいよね？こっち見なきゃ僕は気にしないし」

シャルルはそう言って、上目遣いで見てきた。駄目だ…この田になると断るに断れなくなるな。

「わ、分かった、分かったから。それじゃ、俺が先に行くから後から入って来い」

「う、うん」

俺はシャルルの死角に行き、服を脱いで浴場の中に入る

そして大浴場に入るとそこはかなり広いし色々な種類の風呂があり、充実した設備をしていた。ここに一夏がいたら、テンションのパラメーターが振り切っているだろうな……

(なんか、本気で一夏に悪い事をしたな……)

俺はそう思いながら、簡単にシャワーを浴び、湯船に浸かった。そして

カラカラカラ……

脱衣所のドアが開く音が聞こえた。

ぴたぴたぴた

濡れたタイルの上を歩く音が聞こえる。すなわち

「お、お邪魔します……」

シャルルが入ってきた。俺はつい、声のした方向を向いてしまう。

そこには薄手のスポーツタオルを体に当てて立っているシャルルが居た。当てているとは言つても薄いため向こう側の肌の色が見えていて、さらに逆光のせいでボディーラインがはっきりと見えててしまう。

「あ、あんまり見ないで。疾風のえっち……」

「あ、ああ…すまん…」

すぐにシャルルに背を向ける。すると、ちやふんという浴槽の中に入る音がする。その音で唯でさえ高鳴っていた鼓動がさらに早く、高くなつた。

てか、なんでこんなに近くに来たんだ！？いくらなんでもこんな近くに来ると今から後ろを向いて言うわけにもいかないし……

今の心境は正直に言つと嬉しい。が……困る。すぐ困る。主に理性のままで……

「じゃ、じゃあ……俺はもう出る

「ま、待つてー！」

急に大声で呼び止められて、俺は出るに出れなくなってしまった。

「そ、その話があるんだ。大事なことだから、疾風には聞いて欲しいんだ……」

「……わ、分かった

シャルルが大事な話があるのなら、聞かないわけにもいかないな。

「その……前に言つていたこと、なんだけど

「前つてのは、ここに残る話か？」

「う、うん。そ、そつ。それ。僕ね、ここにじょとと思つ。僕はまだここだつて思える居場所を見つけられないし、それに……」

シャルルの続きを待つが、沈黙は続いた。

ぴちゃーん。

「さやあつー?」

「どうしたー?」

「水滴が落ちてきて……びっくりしただけ」

「そうか……」

「…………」

「…………」

そしてまた沈黙が続く。時折天井から落ちる雫が妙に大きく反響する。

ちやふ……

湯船の中を動く水音が聞こえて、反射的に顔を向けてしまいそうになる。

「いや、こつち見ちゃダメーあっち向いてー!」

「わ、悪い」

「ひとつ……と、俺の背中にシャルルの手が触れてきた。

「しゃ、シャルル」

言葉を言い切る前に、シャルルの手は俺を抱きしめた。背中にはシャルルが密着している感覚があり、限界まで心臓が跳ね上がった。

「疾風が、ここにいろいろてそう言つてくれたから。そんな疾風が居るから僕はここに居たいと思えたんだ」

「そつか……なら良かつたよ。自分の意思でここに居たいって決めたんだからな」

「うん。それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ?」

「僕のあり方。それは疾風が教えてくれたんだよ?」

「さうか……なあ、シャルル」

「違う」

「え?」

「……シャルロット」

「シャルロット？それが本当の……」

「うん。僕の名前。僕のお母さんがつけてくれた本当の名前だよ。それでね、これからは一人きりの時で良いから、そう呼んでくれないかな？」

「ああ、分かった……シャルロット」

「ん」

嬉しそうにシャルロットは返事をした。その声を聞いただけでいつも屈託の無い笑顔がすぐに想像でき、少し口元が緩んだのが分かった。

そして、この時間は俺の中でも長く感じ、とても幸福な時間に思えた。

17話 休息（後書き）

いつも俊さんありがとうございます。

更識姉妹ですが作者はハーレムは見るのは好きですけど、書くのは無理なのでシャルがメインヒロインで行きます。

感想・ご意見お願いします。

「……そして、」

大浴場から出て、俺は部屋には戻らず、屋上で星を見ながら風呂の中での事をずっと考えていた。

（シャルロットがあそこまで迫つてくるって事は……俺に好意を持つているのか？ そうしたら、俺は ）

俺が色々と考えているとポケットに入れていた携帯が鳴った。携帯を取り出して開けるとそこには兄さんの名前が出ていた。

「兄さん？ どうしたんだ？」

とうあえず通話ボタンを押して、携帯を耳に当てる。

『今日はお疲れだったな。疾風』

「ああ、兄さん。どうしたの？」

『いや、なに。良じ報せと仕事の報せがあつてな。どちらから聞

「……良い報せから頼むよ」

『了解した。お前が開発を進めていたGNソードフルセイバーがあともう少しでロールアウトしそうだ』

「本当かー？」

『持つて行こうと思つんだが、構わないか？』

「頼むよ……それで仕事の報せは？』

『ああ。さっそく、デュノア社から技術支援の要請がきた』

『…………やつぱり、か』

『読んでいたのか？』

「まあね」

『なるほど。だから、鳥海からデュノア社についての資料が来たと
いうわけか……』

「兄さんはその資料を見たの？」

『ああ。内容はデータで送ったから確認してくれ』

「わかった」

これで条件はクリアしたな。あとまテュノア社はチヨックメイトをかけるだけだな。

『疾風……お前、何かあったのか?』

「ビ、ビハッ?」

『惚けるな。今まで他の企業なんて無関心だったお前が急にテュノア社を調べるなんてどう考へてもおかしいだひつ』

……やつぱり、兄さんこな隠し通せないか。

それから俺はテュノア社やシャルロットのじい、そして計画している事を兄さんに話した。

「…………とこうわけなんだ」

『なるほど……腰あるにお前はそのシャルロットやんが好きになつたんだな』

「な、な、なに言つてんだよ。兄さんー!」

『な、な、嫌いなのかな?』

「んなこと断じて有り得ない!』

『なら、どうちなんだ?』

「うう……そ、それは……」

『……ハア、お前は人の気持ちには敏感なのに自分の気持ちには鈍感だな』

はい……そう言わるとたしかにそうです。

『なら、もしもそのシャルロットちゃんがお前以外、そうだな……一夏とデートしていたら、どうする?』

「^{ミーティング}流星のフルパワーを使ってでも一夏を炭にする

『……まあ、やりすぎだが、それがお前の本心だ』

「あ……」

その瞬間、自分でつづかえていたのが消えてスッキリしたのが分かった。

『やっと自覚したか。まあ、頑張れよ疾風。それじゃ、技術支援の話し合いをする日時が決まつたら、また連絡する』

「あ、ああ……兄さん、ありがとつな

『ああ。おやすみ』

俺は携帯を閉じて、ポケットに入れて、座っていたベンチに横になつて星空を見た。

「俺がシャルロットのことが好き、か……いつからなんだろうな？」

とつあえずここ数日のことを思い出す。

最初はシャルルとして出遭つて、気が合ひて、一緒にいることが多かつた。そして、シャルロットを知り、俺はシャルロットのことをとても大切に思い、守つていきたいと思つた……あれ？ もしかしてあの時からか？ でも、そう考へれば全てのつじつまが合ひ。

そうか……俺はシャルロットのことが好きなんだな。

「ハハハ……人の感情つて簡単に動くものなんだな……」

俺がそう呟いてるとガチャッと屋上の扉が開いた音がした。俺は体を起こして見るとそこにはいたのは男装用のコルセットをつけていないジャージ姿のシャルロットだった。

「シャ、シャルロッタ・お前その姿…？」

「うん。でも、安心して。誰にも見られなかつたから……星を見ていたの？」

「あ、ああ……星を見ていると色々と考えがまとまるんだ」

「せうなんだ。隣、座つてもいい？」

「あ、ああ」

俺が返事をするとシャルロッタは俺の隣に座つた。

けど、ヤバイ……今まで意識していなかつたが、今はかなり無意識にも意識をして心臓がバクバクといつている。

「…………星つて綺麗だね。疾風が言つていたことが分かるよ」

「そ、そうだろ」

「…………ねえ、疾風」

「な、なんだ？」

「せうき弦こいていた事つて……ホント？」

その瞬間、俺の中で何かが止まつた気がした。

さつき呟いていたことへ……それって……

「…………もしかして、聞いていたのか？」

「…………」めんなさい。立ち聞きするつもつはなかつたんだけど……疾風が電話していたから……」

「謝るな……それじゃ、シャルロットは俺の気持ちを知つてこるといつ詰か……」

「…………うん」

「どうか……よし。俺も男だ。腹を括つてやる。」

「シャルロット」

「はい」

「…………俺と付き合つてくれ、シャルロット。俺は……俺はお前のことが好きだ。だから……これからも今みたいにずっと俺の隣に居てほしい」

俺は覚悟を決めてシャルロットに告白をした。心臓の鼓動がさつきより速くなっているのが分かる。

「うん…ほ、僕も…疾風が…好きだよ」

少し間を空けて、シャルロットは田から涙が溢れながら、返事をしてくれた。

「な、なんで泣いているんだよ」

「だつて…だつて…疾風がそう言つてくれてるなんて…思つてなかつたんだもん…」

「俺は一夏みたに鈍感じやないぞ」

「グスツ、そうだね」

シャルロットは頬を赤くしながら、笑ってくれた。その表情を見て、今まで速かつた心臓の鼓動は落ち着いてきた。

そして、俺はシャルロットの手を取った。

「IJの手は…絶対に離さないからな

「うん。僕も疾風を絶対に離さないよ」

そして、俺たちは互いの手を掴みながら、唇を重ねた。

この時を永久に忘れないために。

屋上で朝食から翌朝。朝のHRにはシャルロットの姿がなかつた。

『先に行つて』と言つので食堂で別れたが結局シャルロットは教室に来なかつた。他にはラウラもいながそれは昨日のことのせいだろうな。

「み、みなさん、おはようございます……」

そして、ふらふらの様子で教室に入つてくる山田先生。なんか、朝から疲れているな。

「今日は、ですね……皆さんに転校生を紹介します。転校生といいますか、既に紹介は済んでいるといいますか、ええと……」

転校生という言葉に反応してクラス中がざわめき立つ。とかく時期もだけどこのクラスに転校生を集中させているのか？

「じゃあ、入つてください」

失礼します」

てつ！？」の声つて

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

「そう言ってスカート姿のシャルロットがお辞儀をする。うん、可愛い! 俺から言えるのはそれしかない。異論は認めない!」

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はあ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

ああ、だから朝からふらふらなのか……けど、別に俺は変えても良いですよ、山田先生。

「え? デュノア君って女……?」

「おかしいと思つた！美少年じゃなくて美少女だつたわけね」

「つて、星月君、同室だから知らないってことは

「ちょっと待って！昨日つて確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

クラス中が一瞬で喧騒に包まれ、それはあつとこゝに間に溢れ返つて行つた。

バシーン――

その瞬間、教室のドアが蹴破られたよつた勢いで開く。

「一夏あつ――..」

そこには居るのは怒りが頂点に達している鈴。

多分、風呂と一緒に入ったとしても思つてゐるんだらうな。てか、鈴つて地獄耳なんだな。

「死ね――..」

ISIAーマー展開、それと同時に衝撃砲がフルパワーで開放。けど、鈴は一夏を亡き者にしようと考えているのか?思いつきり、死ねつて言つてるし。

ズドドドドオーン――

「ふーつ、ふーつ、ふーつ

怒りのあまり肩で息をしている鈴。

「…………」

だが、一夏に直撃する瞬間、一夏と鈴の間に大型レールカノンの無い『シユヴァルツェア・レーゲン』を纏つたラウラが割って入つて衝撃砲をA.I.Cで防いでいた。

「助かつたぜ、サンキュー。……ていうかお前のI.Sもう直ったのか？すげえな」

「コアはかるいじて無事だつたからな。予備パートで組み直した」

「へー。やうなん　　むぐつー？」

その瞬間、ラウラは急に一夏の胸倉をつかんで引き寄せ、キスをした。

「！？！？！？」

一夏は何が起こったか分からなくて、頭が混乱しているようだ。まあ、いきなりキスされたらそうなるな。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「よ、嫁？婿じやなくてか？」

一夏は頭が真っ白になりすぎたのか冷静に突っ込みをする。てか、誰だ？ラウラにオタク文化教えたのは。

「あ、あつ、あ……アンタねえつひとつ……」

そして、再び怒りが頂点に達した鈴は衝撃砲が展開、開かれる。

「待て！俺は悪くない…どちらかといつと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！全部！絶対！アンタが悪い！！！」

うわ、スゲエ理不尽。

一夏はすぐに生命の危機を感じて、教室の後ろドアから脱出しようする。が……

ビショーンッ！

一夏の鼻先をレーザーがかすめる。一夏はおやおやおやとひりひり顔を向けていた。

「あー、一夏さん? どこかにおでかけですか? わたくし、実はどうしてもお話をなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほほ……」

撃つたのはセシリア。その手には《スター・ライトMK?》。それから遅れてユウ本体が展開される。

一夏は出口からの脱出を諦めて窓から脱出しようとしながら、しかし……

ダンッ!

一夏の田の前に篝が真剣である日本刀を突き立てられた。

「……一夏、貴様どうに一つもりか説明してもらおつか

「待て待て待て! 説明を求めたいのは俺の方で おわあっ! ?」

篝はもはや聞く耳持たん! とばかりに一夏に本気で斬りかかる。お前ら、一夏が好きなのか殺したくて仕方がないのか本気で分からなくなってきたぞ。

そして、一夏はそれらをかわしつつ宛ての無い逃亡をスタートした。

「は、疾風！助けてくれ！」

「え？ 面白いから、無理

ドガアアアアアンツ！！！

その日のホームルームは轟音と爆音、そして絶え間ない衝撃でクラスが文字通り揺れていた。

俊さん、いつもいつもありがとうございます。

感想・ご意見をお願いします。

19話 怒りと驚き

あれから数日経ち、土曜日の午後。

疾風は学園ではなくB R A V E社、十階社長室にいた。服はいつも制服ではなく、黒いビジネススーツを着て、窓から見える町並みを見ていた。

（必ず…必ず、シャルロットを解放してやる。そして、シャルロットを駒扱いしたデュノア社を　）

「副社長、デュノア社の社長がお亡くなりました」

「分かつた。通してくれ」

「分かりました」

モニターに出た秘書が消えると社長室のドアが開き、入ってきたのはグレーのスーツを着て、30歳前半の男だった。

「すみません。社長は」「多忙で要件は私が聞きます」

「分かりました。最初に我がデュノア社の技術支援のお話しを聞いていただきありがとうございました」

「勘違いはしないでください。私達はあなたのお話を聞いて、支援をするかを判断します」

「は、はい……」

そこにはいる疾風はいつもの気さくな雰囲気ではなく、文字通り近寄りがたい雰囲気だつた。そして、その雰囲気にデュノア社の社長は押されていた。

「それではそちらにお掛けください」

「は、はい」

疾風に促されて、デュノア社の社長はすぐにイスに座わり、疾風も向かい合つよつてイスに座つた。

「それではなぜ我ら ^{ブレイヴ}BRAVE 社に技術支援の要請を？ 我ら以外にも宛はあると思いますけど」

「はい。ご存知の通りだと思いますが現在私達、デュノア社は経営危機に陥っています。原因は第二世代を形にしようとしていますが時間が不足していまして、形にすらなつていません。そのせいで欧洲連合のイギニッショング・プランからも除名されました。そしてフランス政府からは次のトライアルで選ばれなかつた場合は援助を全面カットされ、IS開発許可も剥奪されてしまいす。ですから、現

在シェア一位のB R A V E社に支援要請をしました

「なるほど…たしかに話を聞く限り、理には適っていますね」

「ならば、私達の要請を

「ですが

社長は嬉しそうに疾風を見たが疾風は目を瞑つたまま話を遮つた。

「な、なにか問題でも？」

「……シャルロット・デュノアを」存知ですよね

「…? な、なぜその名前を…?」

疾風がシャルロットの名前を出すと嬉しそうな表情だった社長の顔は徐々に変わつていった。

「私はシャルロットと恋人関係で付き合つています。そして、あなたとシャルロットの関係も聞きました」

「そ、ですか……ならば、ガールフレンドの家の危機を救つていただけませんか？」

その瞬間、疾風は目を開けた。疾風の雰囲気には新たに殺気が混じつっていた。

「……ふざけるな…ガールフレンドの家の危機?今までシャルロットの事を駒みたいに使っていたのにまだ駒としてあいつを使う気か!」

疾風は徐々に言葉に怒りが含まれていた。社長は疾風の殺気に当たられ、その表情には恐怖が見えた。

「それにあなたはさつき言つていないことがある。あなたがB.R.A.V.E.社に技術支援をしたのは…俺がいるからだ!」

「な、なんのことですか?」

「あなたはE.S学園での学年別トーナメントの視察の時、俺とシャルロットがペアを組んでいたのを見て、簡単に技術支援が出来ると踏んで要請をした。そうでしょう?」

「ぐう、や、それは……」

「そして……こつちはあなたは人の上に立つ人間ではないのも分かつてている」

「それはどうこうことでしょうか?」

「あなたのことを色々調べさせてもらつた。あなたは会社で作った

武器をマフィアに横領。機密に運営資金の不正利用。そしてその資金は自身のポケットマネーにしている。これが人の上に立つ人間のやることですか

「なつー? なんでそれをー?」

デュノア社の社長は驚いて、イスから立ち上がった。

「情報屋から買つたんだ。 ああ、ビーフする?」このことをフランス政府に言えれば、デュノア社はもじりん、あんたは牢獄行きになる

「ぐつ……私を脅す気なのか

「いや、これは交渉だ」

「交渉?」

「そちらのテストパイロット、シャルロット・デュノアとその専用機『ラファール・リヴィアイヴ・カスタムエ』を我が社のテストパイロットにする。そして、もう一度シャルロットに近づかないことだ。そう誓えば、俺はフランス政府には何も言わない」

「……は、あはははは……なんだ、そんなことか。あんな物で良いんですか。それなら好きに構わないわ」

デュノア社の社長は急に狂つたように笑い出した。それを見ていた疾風は拳が強く握り締めていた。

「あんたは……」

「ん? なんだでしょうか?」

「あんたはそれでも父親か!」

バキッ!

疾風はもはや怒りのまま強く握り締めていた拳で『テュノア社の社長を殴った。テュノア社の社長はそのまま後ろによろめき、倒れた。

「シャルロットは…あんたの娘は唯一の肉親であるあんたのために意思を捨てて、故郷を出た。それなのに……あんたはシャルロットを最後の最後まで駒として使う気か! ?」

疾風はもはや怒りのまま倒れている『テュノア社の社長の胸倉を掴んでいた。

「娘? あいつのせいで色々厄介なことがあったのだ。その見返りで私のために働くのは当たり前だろ?」

「貴様あああ!」

「待つて! 疾風!」

その瞬間、社長室に声が響いた。疾風の拳は「デュノア社の社長の鼻先で止まって、疾風は声をしたほつを見るとシャルロットと黒斗がいた。

「シャルロット……兄さん……」

「副社長、やりすぎだ。手を離せ」

疾風は黒斗に言われて、渋々胸倉から手を離した。

「ミスター・デュノア。要件は別室で聞かせていただきました。たしかに今の「デュノア社は経営危機になつてているのは理解しました。しかし、先ほどの情報が告発されたら、支援をしている我らにも被害が来ます。ですから、今回の技術支援は無いということです。それと先ほどの副社長の約束を破つた場合、情報は例外なく告発させてもらいます」

「ぐつ……分かりました。それでは私はこれで」

デュノア社の社長は殴られた頬を押さえながら立ち上がり、そのままドアに向かった。

「あ、あのー」

社長室から出ようとしたデュノア社の社長をシャルロットは呼び止めた。

「い、今までありがとうございました。これからもお元気で」

シャルロットはそう言って、お辞儀をする。だが、デュノア社の社長はそのまま出て行った。

話し合いが終わった後、俺とシャルロットは気分を落ち着かせるために会社のプラネタリウムで投影された星を見ていた。

「疾風。ありがとうね」

「ん? なにだが?」

「あの時、あの人を殴つてくれて」

「まあ、好きな人をあそこまで言われたら、いくら俺でもきれるからな」

「そ、そつか…でも、本当にありがとうね」

シャルロットは頬を少し赤くしながら、星を見ていた。

「あ～そういえば、シャルロットの名前知ってるの俺だけじゃなくなったな」

「そうだね。それはちょっと残念だつたかな」

「そりゃ、なら、新しい呼び方を考えるか」

「う、うん…お願い」

俺はシャルロットの返答を聞いて、また投影されている星を見て、考えているとすぐに頭の中で考えがまとまった。

「“シャル”なんてどうだ？」

「シャル　　うん…すこしく良いこと思つ」

「そりゃ、気に入ってくれたなら嬉しいよ。それじゃ、これからもよろしくなシャル。その…恋人としてな」

「う、うん…」

シャルは頬を赤くなっていた。多分、俺も赤くなつて

いるな。

「それでなシャル。明日暇か?」

「うん。予定は何も入っていないよ」

「なら、明日レゾナンスに行かないか? 臨海学校のために買わないといけない物あるし」

「えつ、それって…『テートつてこと?』」

「まあ、形式的に言えばそうだな。で、大丈夫か?」

「うん…うん、うん。全然大丈夫だよー」

「やうか。なら、良かった。さて、シャルはそろそろ学園に戻つた
ほうが良いな」

俺は流星^{ミーティア}の待機状態である金と白の腕時計を見ると針はまだ二時を回っていた。

「えつ！？疾風は？」

「会社で事後処理を終えてから戻るよ。大丈夫、千冬ちゃんには言つておいたから」

「そつか。分かつた」

「悪いな、一緒に帰れなくて。車はすぐに手配するから

「うん。ありがとう」

俺とシャルはプラネタリウムを出て、シャルを見送った。

そして、事後処理を手早く終わらせて俺の本当の目的の場所に向かつた。

「ふう、ここに戻つてくるのは久しぶりだな」

ここは俺の研究室。^{ミーティア}流星が生まれたところだ。そして、今はシャルの専用機『ラファール・リヴィアイヴ・カスタムエ』が鎮座していた。

「さて、出来ればここにGNコアを入れたいが…難しいだろうな

GNコアは普通のコアと違つて、機体とGNコアにはシンクロ率がある。シンクロ率が低いと起動してもオーバーロードを起こして損壊する危険がある。だからGNコア搭載機は一からGNコアに合わせながら、作らなきゃいけない。だから、流星を作るのには時間がかかった。

「まあ、何事もやってみなきゃ分からぬ。確認をしてみるか」

俺はひとりあえぎシンクロ率を計るためにキーボードを叩いた。そして、モニターに出た結果に俺は驚いた。なんせ、セイヒは

「シンクロ率、97%……マジかよ

モニターに表示された流星と同じくらいのシンクロ率が出ていた。

19話 怒りと驚き（後書き）

俊さん、毎度毎度ありがとうございます。

感想・ご意見をお願いします。

20話 初デート

デュノア社との話し合いの次の日。俺とシャルはHIS学園を出て、レゾナンスに来ていた。

「けど、晴れてよかつたな」

「そうだね」

今日の天気は雲一つ無い快晴。しかも、天気予報では今日一日、快晴らしい。

ちなみにシャルは夏に合っている半袖のホワイト・ブラウス。その下はライトグレーのタンクトップを着ていて、ふんわりとしたティアードスカートはその短さもあって、彼女の健康的な脚線美を十二分に引き立てている。うん、可愛い。俺から言えるのはそれしかない。なんか、前もこんなこと思つたような……

「そういえば、シャル」

「なに?」

「今、会社のほうで預かっているリヴィアイヴのことなんだけどよ……ちょっと奇跡が起こったみたいでな、前に言つた俺の作ったコアを搭載できることになったんだ」

「えつー？ 疾風の作ったコアって流星に搭載されているコアだよね

「ああ、普通はコアに合わせて機体を作なんきやいけないから、時間がかかるけど、今回はコアを変えてハイパー・センサーの強化や新装備を拡張領域^{バースロット}に搭載するだけだからすぐに渡せると想つぜ」

「そうなんだ。でも、そんなに無理に早くしなくても良こよ

「けど、俺の専属開発スタッフは全員仕事好きといつか… E.S開発が好きだからな……」

現にリヴィアイヴとG.Nコアのシンクロ率のことを言つたらテンショングンがグン上がりして、昨日の夜も俺が帰った後もやってみたいだからな。全員、終わったら倒れなきやいいんだけど……

「そうなんだ。なんか、凄い人達なんだね

「そうだな。さて、それじゃ行くか

「うん。えつと、疾風……」

「なんだ？」

「手、繋いでも良い？」

「ねー。見て。ほら

俺が手を差し出すとシャルはその手を握ってくれた。けど、シャルつてやつぱり華奢だし、シャルの体温でドキドキするな。

「どうしたの？疾風」

「え、ああ……シャルの手って柔らかいなと思つてな」

「え、あ、うん……」

シャルは少し俯いて顔を赤くしていた。俺も赤くなっているだろうな。

「さて、行こう」

「うそ」

そして、俺たちは手を繋いで歩き始めた。

「うん。 そうだね」

「うん。 そうだね」

俺たちは駅前のショッピングモール、その一階にある水着売り場にいた。

「ところでシャルも水着を買つか？」

「う、うん……あの、疾風はさ、その……僕の水着姿、見たい？」

「あ、ああ。見たい、な」

シャルの質問で俺の顔は一気に熱くなるのが分かつて、思わず顔を背けていた。

「や、それじゃ、男性と女性は売り場が違うから選び終わったら、ここに戻つてくるか」

「うん」

そうしてシャルと別れた俺は男物の水着売り場に来て見ていた。なんだか奇抜な色が妙に多かった気がするが、目に入ったシンプルな黒を基調にして横に白のラインが入った水着を手に取つた。

(まあ、こんなのが妥当だろ? な。時間もあるけど、そこは待つていれば良いし)

そう思いながら、簡単に会計を済ませて、さつきシャルと別れた場所に戻ると意外なことにそこにはすでにシャルがいた。

「あれ？ シャル、もう買い物終わつたのか？」

「ううん… その、疾風に選んで欲しかつたんだ」

「そりゃか。了解したよ」

一人で女性用の水着売り場に行く。だが、そこはさつき俺がいた男性水着コーナーとは違つて、種類が豊富で正直、男である俺にとってはかなり居づらかつた。

（うーん、これは色々とキツイがシャルの頼みだ。我慢すればこのくら）

「そこのあなた」

「あ？」

と、いきなり名前も知らない相手から話しかけられる。なんか、見るからに面倒くさそうな人だな。

「あなた、そこの水着、片付けておいて」

「……」

ああ、そう言つことか……ISが普及した十年で女尊男卑の風潮はすぐに浸透した。そして、どの国でも女性優遇制度が設けられ、男は歩いていても見ず知らずの相手に面倒」とを押し付けられるようになつた。だがな、俺は

「バカバカしい。自分で見たのなら自分で片付けるよ。そんくらいも分からぬようならあんたは相当な凡愚だな」

そういうのは大嫌いだ。知り合いとかならともかく、見ず知らずの人にいきなり命令されて従うのなど単に顔色つかがつて奴隸みたいに動いているようなものだ。

「ふうん、そうこう」と言つて。自分の立場を分かつていらないみた
いね」

そう言って、その人は警備員を呼ぼうとしていた。この時代、『いきなり殴られた』とでも言えば、即有罪で刑務所行き決定。まつたくここまで来ると平等もクソもないな。まあ、平等なんて単に偽善者の言葉だがな。

「あの、」のくらいで motifs 良いでしょう。彼は僕 私の連れです
から

そこにタイミングを見計らつてシャルが口を挟んでくれた。

「あなたの男なの？ 猥くらじつかりしなさいよ」

はあ、男＝犬の構造かよ。まつたくおめでたい凡愚だな。

ちなみにここまで横柄な女は「」一部で多くの女性はちゃんと社会的立場を認めている。良い例で学園でよく話しかけてくる人たちだな。

「まつたく、これだから男は……」

そんなことを言いながらその人は立ち去つていった。

「はあ、なにが羨だ。馬鹿らしい」

「『』めんね、疾風。嫌な気分にして」

「いや、シャルのせいじゃないから。それより庇ってくれてありがとうな」

「そんなの当然だよ……恋人があんなに言われていたらね」

「そ、そ、うか……ありがとうな。それでシャルはなにか良いのがあつたか？」

「うん。一応これなんだけ……」

そう言って、シャルが見せてくれたのは夏をイメージしたイエローのビキニタイプだった。

「うーん、シャルはビキニタイプよりな……あー、こんなのが良いんじゃないかな?」

ふと俺は展示されていた水着を指差した。色はセリと同じイエローだったけど、セパレートとワンピースの中間のよつで、正面は胸の谷間を強調するようになつていて、後ろは上下に分かれているそれを背中でクロスさせて繋げるものだった。シャルはすぐにそれを取つて、見ていた。

「まあ、これは俺からの意見だからシャルがどうしたいかは決めてくれ」

「うん。でも、僕もわたくしのよつはこのせつが良いからこいつをするよ」

「さうか。それじゃ、会計に行くか」

そして、会計のために移動しようとしたらいそには見知った顔があった。

「あれ？ 千冬……織斑先生どうしてここに？」

「ん？ 疾風か。今は職務中ではないからな、先生扱いしなくていい

「じゃあ、改めて千冬さん。どうしてここに？」

「山田君と一緒に今週のための買い物に来たんだ」

「はい、そうなんですよ」

「あ、山田先生。」んこちば

商品の物陰から山田先生が出てきて、シャルはすぐこいつて軽く頭を下げて挨拶した。

「はい、こんこちば。お一人もお買い物ですか？」

「はい。俺たちも今週のための買い物です」

「それで、疾風……なぜお前がこっちの売り場に居る？」

「……えつと……それは……」

俺は思わず隣にいたシャルを見ると少し頬を赤くした。千冬さんはその様子を見て、納得したみたいだった。

「ふむ、そういうことか……別にそういう関係になるなとは言わない。が、節度は持つて接しようよ」

「はい。それと、千冬さん達もこのことは内密にお願いします。学園に知れ渡つたらどんなことになるか……」

そんなことを考えただけでも、ゾッとする…………

「はい、分かっていますよ。ね、織斑先生」

「ああ。元々、言ふ振らすよくな」とはしないから安心しろ

「ありがとうございます」

ガチャツ

俺が千冬さんに礼をすると山田先生の近くの試着室のドアが開いた。そこには水着姿のラカワと……一夏がいた。

「…………なにしているんだ?」

「まったくだ。馬鹿者」

20話 初テート（後書き）

感想・ご意見お願いします。

21話 星と永遠の愛

「はあ、お一人も水着を買いにですか。でも、試着室に一人で入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「仰るとおりです」

「申し訳ありません」

ペコリと頭を下げる一夏とラウラ。

「ところで千冬ね 織斑先生と山田先生はどうして会った？」

あ、一夏の奴、話を逸らして逃げたな。

「私達も水着を買いに来たんですよ。それと、今は職務中ではないので無理に先生って呼ばなくとも大丈夫ですよ」

まあ、そう言われて簡単に呼べないよな。学園じゃ言った瞬間、殺人出席簿で頭を叩かれるからな。しかも、服も服で多少カジュアルとはいえサマースーツを着ているから、余計に呼びづらいな。

さて……そろそろこのちをじっと見ている視線の主を呼ぶとします

か。

「それでいい加減出てきたらどうだ？ 鈴、セシリ亞」

そう俺が呼びかけると柱の陰からその一人が出てきた。

「や、そろそろ出で」よいかと思つてたのよ」

「え、ええ。タイミングを計つていたのですわ」

「やつぱりそうだったか。なにこそこそしているのかと思つて、ずっと気になつてたんだよな」

「ほお、一夏も勘付いていたのか。女子の気持ちには鈍感なくせに妙なところに敏感なんだよな。」

「女子には男子に知られたくない買い物があんのー。」

「そ、そうですわー！ まったく、一夏さんの『テリカシー』の無むにはいつもながらあきれてしましますわね」

二人から一夏に向けて非難の嵐。だから、もつ少し素直になれよ。
それじゃ、この鈍感には通じないぞ。

「わざと買い物を済ませて退散するところ」

「そのため息混じりに言つたのは千冬さんの手には水着があった……ああ、そういうことか。

「それじゃ、シャル。俺たちも会計をして他の買い物に行
こうぜ」

「え?……あ、うん。分かった」

シャルはすぐに理解してくれて、返事をしてくれた。そして山田先生にアイコンタクトをすると山田先生はすぐこひらめいたような顔で頷いてくれた。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあつたので行つてきます。えーと、場所がわからぬので凰さんとオルコシトさん、つっこいてください。それにボーデヴィッヒさんも」

「さて、俺たちも行くぞ。シャル

「うん」

俺とシャルは千冬さん達と別れて、わざと水着の会計を済まして、水着コーナーを出た。

「さて、水着も買ったことだし、シャルは何か買い物したい物はあるか?」

「うへん…僕は特にないかな

「なら、ちょっと俺の買い物物に付き合ってくれないか?」

「うん、良いよ」

そして、俺とシャルが向かったのはレジナנסの中にあるアクセサリーショップだった。

「うるさい?」

「レジナансのアクセサリーショップ。俺がよく来る場所だ」

「そりなんだ。なんか、高そうなどころだね」

「そうでもないぞ」

「いらっしゃいませ」

俺とシャルが話していると一人の店員が前に立っていた。

「以前、連絡を入れた臯月ですけど、押さえてもらっていた物を取りにきました」

「臯月様ですね。はい、すでに。只今、お持ちいたしますので少々、お待ちください」

店員はそう言つて、少し頭を下げて、すぐに頬んで物を取つて来てくれた。

「いらっしゃりになります」

いつも通り、店員から渡されたのは綺麗に包装された箱だった。

「ありがとうございます。またのお越しを」

店を出た。そして、時計を見ると時間は1~2時を回つていて、俺達は近くにあったオープンテラスのカフェに入った。

「あひ、はい、シャル。俺からの初めてのプレゼントだ

俺はそう言つて、せつを受け取つた箱をシャルを渡した。

「え?」「これって……僕のためのだったの?」

「ああ、シャルに似合つと思つてな。受け取つてくれるか?」

「うん! ありがとうね。疾風」

そう言つて、シャルは満面の笑みになつた。うん、可愛いし、心落ち着くな。やっぱり、シャルは笑顔じゃないと。

「疾風……開けてもいい?」

「ああ。どうぞ」

シャルは嬉しそうに包装の紙を綺麗に取つて、箱を開けた。

「…………綺麗」

シャルの手にあるのは銀のチョーン状のブレスレットで所々に星の形をした白い宝石が付いているブレスレット。ブレスレットスターだ。

「どうだ? 気に入つてもらつたか?」

「うんー…とつても氣に入ったよー…もう着けて良い?」

「ああ。構わないぜ」

シャルは早速そのブレスレットスターを着けてくれた。シャルの細い白腕にブレスレットスターは映えてとても似合っていた。

「どう、かな?」

「ああ、似合つているぞ」

「へへ…疾風、ありがとうね」

シャルは俺に嬉しそうな顔を向けた。その顔を見ているだけで氣恥ずかしくなったがそれ以上に嬉しくなるな。

「ねえ、疾風。この星の形をしていろのつて何かの宝石?」

「ああ、ムーンストーンだ」

「ムーンストーン? 何か意味があるの?」

「鋭いな……ムーンストーンの意味…永遠に続く愛、だ」

「え…永遠に続く愛……本当?」

「ああ

俺が返事をするとシャルはまた頬を赤くしていたけど、腕に着けた

ブレスレットスターを少し触りながら少し微笑んでいた。

21話 星と永遠の愛（後書き）

俊さん、いつもいつもありがとうございます。

次回からは臨海学校。オリジナルの敵を出します。あと、GNフルセイバー やシャルの新たな専用機も

感想・ご意見お願いします。

22話 臨海学校 海での時間

「海っ！見えたあつー！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。

臨海学校初日、昨日の快晴が続いてくれて天気は快晴。海面は穏やかで、心地良さをもつた潮風にゆっくり揺らいでいた。

俺は歌を聴いていたヘッドホンを首に掛けて、バスの窓から海を眺めていた。

「おーーせっぱり海を見るとテンション上がるよなあ

「やうだな

通路を挟んだ隣に座っていた一夏の言葉に軽く相槌を打っていた。
俺も海を見るのは本当に久しぶりで内心テンションが上がっている。

「ああ、やうじえぱシャル…って黙だな

「えへへへ」

シャルは昨日プレゼントしたブレスレットスターを終始触りながら「口口口」といて話なんて出来ない状態だった。

（まあ、そんなに嬉しく思つてくれているならあげて良かったなって思ひな……さて、ちよつと眠くなってきたな……少し寝るか）

そして、俺は目を閉じて、そのまま意識を闇に落した。

「……疾風……て。疾風、起きて」

「ん……なんだ。そろそろ着くのか？」

「うん……それと……」

俺の意識が徐々にハツキリしてくると俺はシャルの肩に寄りかかっていた寝ていたみたいで周りの女子のうらやましそうな田線がいくつか感じた。

まあ、気にしないが自重はしないとな。関係がばれるといつなるかの検討なんて簡単につくからな。

そして、少し経つて俺たちを乗せたバスは旅館に到着してバスを降

りて、整列した。

「それでは、二三郎が今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やすないように注意しな」

「…………」「ねがいしまーす」

千冬さんの言葉が終わると同時に全員が挨拶をする。この旅館は毎年使われているよつで、着物姿の女将さんがお辞儀を返してきた。

「はい、二三郎。今年の一年生も元氣があつてよかったですね

外見から想像できる年齢は三十代くら。しつかりとした大人の雰囲気を纏っているな。

「あら、二三郎が噂の？」

俺とその近くにいる一夏を見て女将さんが千冬さんに尋ねた。

「ええ、まあ。今年は男子が居るせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、一人ともいい男の子じやありません

か。一人ともしつかづしてそつた感じを受けてますよ」

「始めてまして、臈月疾風です。」これから三田間よりじへお願いします
す

俺は軽く一礼して挨拶をした。

「うー寧にじりつむ。清洲景子です」

「はあ……しつかりしてるのはさういちだけです。ほひ、お前も挨拶
しつ、馬鹿者」

と、千冬さんが上から一夏の頭を押さえつけた。

「お、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

「うらら、うららうららよろしくお願ひしますね」

俺の時もした」「寧なお辞儀をする清洲さん。

「不出来の弟で」迷惑をおかけします

「あひあひ。織斑先生つたら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「こつも手を焼かれていますので」

まあ……一夏は否定出来ないだろうな。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになりますから、そちらをご利用ください。場所がわからなければ従業員に聞いてください」

女子一同は、はーいと返事をするとすぐさま旅館の中へと向かつ。

「ね、ね、ねー。わたくし、おつむ~

ん?俺のことをこんな呼び方をするのはただ一人。

「のほほんさん、どうした?」

振り向くとそこには遅い移動速度でこっちに来るのほほんさん。
本名は布仏 本音らしいが一夏はのほほんさんと呼んでいたから俺
もやう呼ぶことにした。

「わたくしとおりむーの部屋つてどこ? 一覧に書いてなかつた
よ。遊びに行くから教えて~」

「いや、俺は知らないが……一夏は？」

「やういえば俺もだ。廊下にでも寝るんじゃねえの？」

「わー、それはいいね～。私もそりよつかなー。あー、床つめたーいつて～」

「いや、それはマズイだらう」

俺は呆れながらのほほんさんにシッコむ。たしかに今は夏だがさすがにそれはマズイだらう。

「織斑、皐月。お前たちの部屋はいつがだ。ついてここ」

俺と千冬さんの呼ばれた。さすがに千冬さんを待たせるわけにはいかないので、俺と一夏はのほほんさん「またあとで」と言つて、別れた。

「えーっと、織斑先生。俺たちの部屋ってどこのなるんですか？」

「黙つてついてここ」

と、一夏は言語封殺されていた。ちなみに旅館の中はかなり広く、歴史のある装飾と最新設備が合体してとても綺麗だ。

「え？」

「え？」「うひて……」

そして、止まつた目に入ったのはドアには張られていた紙に『教員室』と書かれていた。

「最初は個室といつ話だつたのだがな、それだと就寝時間を無視した女子が押しかけるだらつといつことになつてな」

はあ、とため息をついて千冬さんが続ける。

「結果、織斑は私と同室になつたわけだ。これなら、女子もおこそれとは近づかないだらつ」

「そりゃまあ、そつだけど……」

たしかに誰もおいそれと鬼の巣に入りたいとは思わないからな。

「それで、織斑先生。俺はビリなんですか？」

わざわざ一夏のことしか言つていなかつたし、これで本当に床で寝

かされるのは嫌だな……

「皐月、お前の部屋はあそこだ」

そう言って、千冬さんが指したのは隣の部屋だった。

「さすがにこの部屋に三人は窮屈になる。だが、隣なら問題なかろうということだ……つるさかつたら容赦なく指導しに行くからな」

「分かりました」

「一応、大浴場も使えるが男のお前たちは時間制だ。本来ならば男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前たち一人のために、他が窮屈な思いをすることはおかしいだろ。よって、一部の時間だけ使用可能だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「はい」

「了解」

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたら、好きにしない」

「はい。じゃあ、楽しませてもらいますよ」

俺は千冬さんから鍵を受け取って、隣の部屋に入つて、持つていた荷物を置いて部屋の窓から空を見上げた。

「……雲も少ないから、今日は良い感じに夏の星が見られるな…夜はシャルを誘つて、星見でもするかな……ん?」

そう語りているとポケットに入れていた携帯が震えた。

「兄さんからか…シャルロットちゃんの新しい専用機の最終調整が今終わった。GNフルセイバーと共に明日持つて行く、か…まつたく、無茶したな、あいつら……」

俺は苦笑いしながら、とりあえず俺専属の開発スタッフ達に数日は休ませるようこじつけておべつて兄さんに返信した。

「…………さて、そろそろ海に行くか

俺は簡単にまとめた手荷物を持って、部屋を出た。

「しかし、海なんて久しぶりだな」

俺は久しぶりの海を見ているとふいに一夏とシャル。そして……白いバスタオルに身を包んだミイラ（？）が目に入った。

「よつ、シャル。ヒ、一夏」

「あ、疾風。遅かったね」

「ああ、ちょっと仕事のメールがあつてな……それで隣のミイラは誰だ？」

「ラウラだよ」

「……はあ？」

俺は驚いているとシャルが耳元に近づいてきた。

「実は、ラウラが一夏のために凄い水着を着たんだけど……恥ずかしがって」

なるほど。それで頭の上までバスタオルを巻いたのか。しかし、これがファーストコンタクトでいきなり一夏の頬を殴った奴には見えないな。

「ほり、出できなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

随分と弱弱しい声だな。いつものラウラとは大違いだな。

「けどよ、ラウラ。そうしていると一夏が別の誰かと遊びに行くぞ」

「た、たしかにそうだが……」

「そりだよ。早くしないと誰かに一夏を取られちゃうよ」

「……ええい、分かった！脱げば良いのだろう、脱げば！」

もはや、ヤケクソ氣味にラウラは身を包んでいたバスタオルを取る。そこには黒の水着、しかもレースがふんだんにあしらわれていて、その水着はレースをふんだんにあしらつて水着での面積が少なく、一瞬大人の下着セクシー・ランジェリーかと思つてしまつた。そして髪型もいつもと違つて、鈴みたに一対のアップテールにしていた。

「わ、笑いたければ笑うが良い……！」

「おかしなところなんてないよね、疾風、一夏？」

「お、おひ。ちょっと驚いたけど、似合つていると思うぞ」

「ああ。俺も一夏と同意見だ」

一夏と俺の言葉が予想外だったのかラウラは驚いて、たじろいだ後にカーッと赤くなつた。

「しゃ、社交辞令なぞこりん……」

「こや、世辞じやねえぞ。だら、一夏？」

「ああ、わうだせ。俺は可愛こと細づせ

一夏がわうづとカウセをわうて赤くなつてこつた。

「おうつむりへーん！」

「わうきの約束ー・ベーチバレーしようつよー・」

「わー、おうむーと対戦だ。ばくばくやーん

「ほり、一夏。」
「わうだぞ

「疾風はうづだ？一緒にやらなーいか？」

「俺は後から参加をさせてもらひつむ

「わうか。シャルロッテはうづだ？」

「僕もあとから参加させてもいいだよ」

「分かった」

そして、俺は一夏達と別れて、今いたところから少し離れたところにある岩場までシャルと一緒に歩いていた。

「しかし、こここの海は綺麗だな……」

「そうだね。ねえ、疾風……」

「なんだ?」

「遅くなっちゃったけど……あの人とのこと、ありがとうございます」

「ああ。でも、本当に良かったのか?」

「うん。それに僕の家はお母さんと住んでいた家だけだし、僕は……疾風の隣を離れたくないからね」

「そうか」

「それでね。疾風……これ、似合ってるかな?」

「ああ、似合ってるぜ。可愛いやせ」

「へへ……そつか」

シャルは少し照れながら、髪をいじっていた。その手首には昨日プレゼントしたブレスレットスターが光っていた。

「ん？ それ、つけてきたのか。防護コートとか大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ。これは疾風からもらつた大事な物だからね」

「そうか。そう言つてくれると嬉しいよ。それでな、シャル。今日の夜つて空いてるか？」

「ふえ！？ は、は、疾風！ それつて……」

「誤解するなよ。まだ、そういうのはしないから

「そ、そりだよね……」

それはさすがにアウトだろ。色々と。

「今日は星が綺麗に見られるからもし良かつたら、一人で星見でもしないかつてお誘いだつたが、どうだ？」

「僕は全然大丈夫だよ」

「そうか。なら、良かつた」

「ねえ、疾風。さつきの“まだ”つてその時がきたらつてことだよ

ね？」

「…………まあ、その時がきたらな」

「フフ、そつか」

「まあ、代わりといつちやなんだが……」

「え？ ムグツ……！」

瞬間、俺はシャルにキスをした。シャルは突然のことと田を大きく開けて、驚いていた。

そして、唇を離すとシャルの顔は一気に真っ赤になった。

「ま、今はこれで勘弁してくれ」

「つ、疾風、いきなりすがるよ」

「良いだろ。さて、久しぶりに思いつきり羽を伸ばすか。行くぞ、シャル」

「ま、待つよー」

そうして、俺達は久しぶりの海で思いつきり遊んだ。

22話 駆海学校 海での時間（後書き）

俊さん、毎度のよひにじり指摘ありがとうございます。

感想・ご意見をお願いします。

海での時間はあつといつ間に過ぎて、現在七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺達は夕食を食べていた。

「しかし、昼も夜も刺身。しかもカワハギと本わさとは……随分と金かかってるな」

「疾風、本わさつい……？」

俺が呟いていると右隣に座っているシャルは首を傾げていた。

「俺も詳しきは知らないけど、なんでも本物の山葵を摩り下ろした物を本わさつて言つらしい」

「えつ？じゃあ、洋食の刺身定食どうじているの？……」

「あれは練りわさ。色々な山葵を着色したり、合成しているらしい」

「そりなんだ。はむ」

「て、おい…今、シャルがわさびの山葵をそのまま食べただよ！」
「見えたが……」

「つ~~~~~！！」

案の定、シャルは鼻を押さえて悶絶していた。まつたく……

「大丈夫か？」

「う、ううひょううふ……」

シャルは鼻声で返事をしながら、にこりと笑みを浮かべようとした。が、その笑顔は涙目に崩れて、いまいち決まっていなかつた。

「まつたく。ほら、お茶」

「あ、ありがと……ふ、ふ……風味があつて……おいひい……よ?」

シャルは俺から湯飲みから受け取つて、すぐに飲んだ。

「たく、どこまでも優等生だな」

俺は少し笑いながら、シャルの頭を撫でていた。

その後は一夏とセシリ亞がなにやらつむぐくしてしていたが千冬さん

が来て、その場が静まるのを見ながら、夕食を食べていた。

「セビ、ヒ。」ヒなら良いく感じに見れるな

「やうだね」

夕食を食べ終わり、俺とシャルは旅館の外にいた。そして、夜空には一面の星が広がっていた。うん、これは絶好の星見日和だな。

「凄い……前に見た時より星がいっぱいある」

「ああ。夏は夏の第三角形や天の川が見れるから、この時期が俺は好きなんだ」

俺は座りながら、指で夏の第三角形であるデネブ、アルタイル、ベガを繋ぐようにしていた。

「うん。僕もこれを見れば疾風が好きな理由分かる気がするよ」

「やうか」

「そういえば疾風はどうして星が好きになつたの？」

「ああ。昔、父さんや兄さんと一緒によく天体観測をしていたからだな」

「そうなんだ。黒斗さんもだけど優しいお父さんなんだね」

「……まあ、父さんはもういないけどな」

「えー?……ゴメン」

「謝るなって……」

俺はそう言つてシャルの頭を撫でていた。なんか、シャルつて撫でやすいんだよな。

「あ、そりゃ之間に兄さんからメールがあつてな。シャルの新しい専用機だけど今日の之間に最終チェックが済んだから明日には届くって」

「明日ついてこいらなんでも早すぎない!？」

「ああ。けど、性能とかは心配無いと思う。そこは俺が保障する」

「そつか。疾風は開発スタッフの人達を信頼しているんだね」

「ああ。あいつらはIT開発に妥協をしない。それにあいつらはエス開発が好きだから仕事が早いんだ」

現にあいつらが居なかつたら流星ミーティアも完成しなかつたし、GNフルセイバーに至つては完全にあいつらに任せたからな。

「なるほど。ねえ、疾風。もつと星のことを教えてくれない？」

「ああ。構わないぜ。けど、今日はまだほんの一な」

「うん。ありがとうね」

そうして、俺は時間ギリギリまでシャルに星の説明をしていた。

合宿一日目。今日は一日この合宿の目的であるIISのデータ取りを行つ。特に専用機持ちは送られてくる大量の装備が待つてゐるから大変だ。ちなみにまだGNフルセイバーとシャルの新専用機は届いていない。

「ようやく全員集まつたか　　おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬さんに呼ばれて、身をすくませたのは意外や意外ラウラだった。

「やつだな、EUSのコアネットワークについて説明してみる」

「は、はい。EUSのコアは

「

題として出された問題に、ラウラはすらすらと答えた。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやるわ

そう言られて安堵するラウラ。まあ、ドイツ時代に嫌といつまでも千冬さんの恐ろしさを知ったのだろうな。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたEUSの装備試験をする
よ。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はーい、と一同が返事をする。改めて見るとこの人数はかなり迫力
がある。そしてその全員が一斉に作業に取り掛かった。

「ああ、篠ノ瀬。お前はちょっとこっちに来い

「はい」

思い出したように打鉄用装備の運搬をしていた篠を呼びとめた千冬さん。

「お前には今日から専用　　」

「ちーちゃん～～～～～～～ん……」

「ずどびど……！」と砂煙を上げながら人影がこっちに走ってくる。しかも、無茶苦茶、速い。多分、工事っぽい何かをつけているからだと思つが……間違ひなくその人影は……

「……束」

「ですよね。ここは今、立ち入り禁止だけど、稀代の天才、篠ノ之束さんがそれをガン無視して乱入してきた。

「やあやあー会いたかったよ、ちーちゃんー！あ、ハグハグしよう！愛を確かめ　　ぐへつ」

千冬さんは自分に飛び掛ってきた束姉の顔面を片手でつかみ、そのままアイアンクロ一。千冬さん、相変わらず容赦ないな。

「うぬせこぞ、束」

「ぐぬぬぬ…………相変わらず容赦の無いアイアンクロードねつ」

そのアイアンクロードよりも簡単に抜け出すあなたもどつかと思うが。そしてくるつと向きを変えて簫を向く。

「やあー！」

「…………ども」

「えへへ、久しづりだね。合つのは何年ぶりかなあ。大きくなつたね、簫ちゃん。特におっぱいが」

がんつ

「殴りますよ」

簫はなぜ持つているのかは知らないが、その手に持つっていた日本刀の鞘で束さんを殴つた。うん、痛そうだ。

「な、殴つてから言つたあ…………し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！簫ちゃんひどい！」

頭を押さえながら涙田になつて訴える束さん。けど、すぐに復活した束さんは今度は俺のまつを向く。

「やつほ。調子はどう? ハヤ太くん」

「いたつて普通ですよ。俺も流星ミーティアも」

「それは見て分かるよ 私が聞いているのは…流星のGNPアだよ」

「GNPア? 大丈夫だと思いますよ」

そんな風に俺達が束さんと話しているのを周りは完全にぽかんとしながら見ていた。

「え、えっと、この合宿では関係者以外」

「んん? 奇妙奇天烈なことを言つね。E.Sの関係者として一番はこの私を置いて他にいないよ?」

「えつ、あつ、はい。そうですね……」

「お! 束。自己紹介くらいしき。うちの生徒達が困つていてはい、山田先生、轟沈。山田先生諦めてください。この人は基本好きにさせておくしかない。」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はー。終わ

り」

束さんのテキトーすぎる挨拶。束さんは興味を持っている人（俺、兄さん、千冬さん、篠、一夏、おまけで両親らしき）以外はどうでもいいらしい。

そして突然のことからやく我に返り、目の前の人物を誰なのか把握した女子たちが騒ぎ出す。

「はあ…… もう少しもんでもできるのか、お前は。そり一年、手が止まつてこない。じこのこと無視して続ける」

「ここつまひどこなあ、いふつい束さんと呼んでも良じよ?」

「うむむむこ、黙れ」

と千冬さんと束さんのやりとりを見ていると急に後ろに『気配を感じてすぐに振り向くとそこには……』

「ひ、兄さん……」

そこには黒いサマースーツを着た我が兄がいた。てか、どうしてこじにー？

「よ、疾風、シャルロットちゃん

「黒斗さんーー？」

シャルも大声を上げて驚くと千冬さん、一夏、篠も兄さんに視線を移した。

「黒斗……」

「会つのは久しぶりだな、千冬。それに一夏と篠も久しぶり。大きくなつたな」

「お、お久しぶりです。黒斗さん」

「ど、どいつも」

一夏と篠は驚きながら返事をする。女子達のほひなしつきより騒がしくなつていた。なんでだ？

「あの人って……もしかして、星月黒斗様ーー？」

「あのBRAVE社の社長ーー？」
フレイヴ

「雑誌とかで見たけど、凄くカッコいいー！」

なるほど。やういえば、世界シュア第1位になつてからBRAVE
フレイヴ

社の社長である兄さんがさりげなく取材とか受けていたな。

「それで兄さんがどうしている?」

「ああ、GNフルセイバーとシャルロットちゃんの新しい専用機を持つてきたんだ」

「だとしても、なんで社長自ら来たんだよ。会社の仕事は?」

「安心しろ。今日は私は休みだ」

「や、そりなんだ……」

「黒斗……貴様、ijiは今立ち入り禁止だぞ」

千冬さんは近づこうとして、トーンを低めにして声を放つ。

「ああ、だが予め洋園のはうに連絡しておいたわ」

「おお、さすが兄さん。ijiといひとみ手際が良いな。

「やつか。なら、お前は束を監視していく。お前が保護者だわ」

「無茶言つな。束の保護者は昔から千冬の役だだ」

「フン、私は嫌だ」

「ひどいな、ちーちゃん」

そんな旧知の間柄である二人のやりとりに割り込んだのは山田先生だった。

「え、えっと、あの、こうこうの場合はどうしたら……」

「ああ、ここのまわしあつても言つたように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「さて、疾風、シャルロットちゃん。俺達も行こうか。GNフルセイバーとシャルロットちゃんの専用機は別のところに置いているからちょっとついてきてくれ。千冬、疾風とシャルロットちゃんをちよつと借りてこぐれ」

「ああ。分かった」

「それじゃ、行くか

「あ、ああ

「は、はい」

「うひして、俺とシャルは兄さんの後をついていった。

23話 臨海学校 星と「田田」(後書き)

俊さん、いつもいつもありがとうございますー！

次回、ついにシャルの新たな専用機と新たな敵が現れます。

感想・ご意見お願いします。

24話 新たな力と作戦会議

俺とシャルは兄さんの後をついて行くところには、BRAVE社のマーラークが描かれたコンテンナともつひとつ

「これがシャルロットちゃんの新しい専用機『シリウス・リヴィアイヴ』だ」

そこにはオレンジ色の装甲に新たに藍色の武装を身を包んでいる『シリウス・リヴィアイヴ』が鎮座していた。

「これが僕の新しい専用機……」

「ああ。それじゃ、早速フィットティングとパーソナルライズをやるが。俺もサポートするからよ」

「うん。疾風、お願ひ」

「了解」

シャルはすぐに『シリウス・リヴィアイヴ』を身を包んでフィットティングとパーソナルライズを開始した。俺もサポートするためにコンソールを開いて空間投影のディスプレイを叩いた。

「^{バスクロット}拡張領域に新たにDNコア専用の武装…右肩とウイング部分に自動支援装備が搭載…凄い、ハイパ・センサーの精度なんか前とは別格になつてゐる……」

「どうだ?『シリウス・リヴァイヴ』の感想は?」

「うん…もう一言で凄いとしか言えないよ……」

「そうか。最初は前の機体の反射速度やスピードに驚くと思つたが徐々に慣れていくぞ」

「うん。分かった」

そして、それから数分が経ち、『シリウス・リヴァイヴ』のフィッティングとパーソナルライズが終わった。

「よし、これで完了だな」

「うん。それじゃ、ちよつと試運転してみるよ」

「ああ。その間に俺も自分の奴をこじつているから」

「うん。じゃあ、行つてくるね」

そう言ってシャルは砂を舞い上げ、一気に飛翔した。

「さて、シャルのことだからすぐに慣れるだろ? さて、俺もやるか」

そう呟いて、^{ミーティア}流星を展開して、コンテナに入っていたGNフルセイバーを搭載するためにコンソールを開いて空間投影のディスプレイを叩いていた。

「……なんだ? スラスターや粒子圧縮の^{ミーティア}数値: 前に見たときより、明らかに上がってる…それにGNコアと^{ミーティア}流星のシンクロ率も……」

ディスプレイに出ていたシンクロ率は98.5%。前に計測した時は97%だったから若干だがシンクロ率が上がっていた。

(これは一体… GNコアが^{ミーティア}流星と馴染んだのか? けど、本体に搭載されているGNコアだけでここまで数値が出るのは有り得ないはず……だとしたら……)

「疾風。手が止まっているぞ」

「えー? に、兄さん。あ、ああ。ほんとだ」

兄さんの言葉で俺は二つの間にか手を止めて考へじとに集中していたのに気づいた。

「どうした？ 急に考え込んで」

「実は… 前に測定した時より流星ミーティアの数値が明らかに上がっているんだ」

「やうが。まあ、この世界に有つ得ないことなんて何一つないからな」

俺は兄さんが言つた俺たちにとって懐かしい口詞に少し驚いた。

「それ… 父さんの…」

「ああ、やうだな。それより見る。シャルロットちゃん、もう機体に慣れてきているわ」

兄さんに言われて、上空を見るとそこにはまだおぼつかないけど十分に乗っこなしていいシャルの姿があった。

「……さすがシャルだな。こんな短時間であそこまで乗っこなしていいとは」

「やうだな」

兄さんも少し笑つてシャルの飛んでいる光景を見ていた。

「さてと俺もさつさと調整してGNフルセイバーを搭載するか」

俺は少し体を伸ばして再度、ディスプレイを叩き始めた。スラスター や粒子圧縮のデータを新たに流星ミーティアに入れ直して、その後にGNフルセイバーをインストールを開始した。

（ちょっと予想外なことが起こったけど、まあ、これあとはGNフルセイバーにデータを入れ直して、フルセイバーの各種武装モーターを変更して　）

『皐月、デュノア聞こえるか』

その瞬間、オープンチャンネルで千冬さんの声が聞こえた。

「織斑先生、なにがあつたんですか？」

『ああ、お前たち二人はすぐに旅館に戻つて来い。そこで詳しい話をする。いいな』

「はい」

「分かりました」

シャルのほうにオープンチャンネルで聞こえていたみたいでシャルも返事をした。

「兄さん、俺たち一旦旅館に戻るから」

「ああ。分かった」

そうして、俺とシャルは自身のＩＳを待機状態にして旅館に戻った。

「では、現状を説明する」

俺たちが旅館に戻ると旅館の一一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風間の間に専用機持ち、そして籌が集まっていた。大方、俺達が離れた後に東さんがあの筹専用のＩＳをあげたのだろうな。

「一時間前、ハワイ沖での試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用ＩＳ『銀の福音』^{シルバリオゴスペル}が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告が入った」

銀の福音……たしか、情報だと広域殲滅型のＩＳだったな。しかも、

シルバリオゴスペル

性能も高い。本当に厄介なのが暴走したな。

「…………」

そして、周りを見ると代表候補生の四人は、顔つきを険しくして状況の把握に努めている。だが、当然のように一夏と篠は軽く混乱している感じだつた。

「その後、衛星の追跡の結果、福音はここから一キロ先の空域を通過することがわかつた。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することになった」

投影されるディスプレイにて、ここ周辺の地図と福音の通過予測ルートが表示された。

千冬さんは淡々と言葉を続ける。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行つ。よつて、本作戦の要是専用機持ちに担当してもいいつ

なるほど、しかしながら無茶な話だな。いくら代表候補生の四人いてもあの武装と性能に勝てるかは分からぬ。まあ、俺と今のシャルが加わるなら話は別になるがな。

「それでは作戦会議を始める。意見のあるものは挙手あるまつ」

「はい」

まず手を上げたのはセシリ亞。

「田標IISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは一ヵ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも一年の監視が付けられる」

「了解しました」

そしてセシリ亞の要求通り、『銀の福音』のスペックデータがモニターに開示される。

代表候補の四人と教師陣はそれを基に相談を始めた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。……私のIISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動を両立させた機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうのほうが有利……」

「Iの特殊武装が曲者って感じはするね。今のリヴァイヴならかわ

「やめと運ばれなが

「だが、Iの最高速度だと接触は一回だけにならうだな」「そう、轟丸の轟丸とおつだ。Iの機体は現在も超音速飛行を続けている」

「俺が偵察に行つても良いが…今の流星じゃIの速度には追いつかない。

「やつぱり一度きつのチャンス……とにかくせ、一撃必殺の攻撃力を持つた機体で当たるしかありませんね」

Iで山田先生も話に入ってきた。

そしてその言葉に俺も含めて全員が一夏を見る。

「え……？」

「一夏、あなたの零落白天で落とすのみ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は

「

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるHでなければいけない

な。超高感度ハイパーセンサーも必要だ！」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」

「　　「当然」　　」

俺を含めた五人の声が重なる。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いはしない」

織斑先生にそう言われた一夏の日にほぐすに覚悟の灯った日に変つた。

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどビギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついてます」

「僕のシリウス・リヴァイヴでも十分な速度は出ます。疾風は？」

「いや、流星^{ミーティング}は調整中で今の速度だと福音に勝てない」

「そつか」

「ふむ……。まあ、どちらかが

「

「待つた待つた。その作戦はちょっと待つたなんだよー！」

千冬さんの言葉を遮る、底抜けに明るい声。

発信源は天井。他の人と同じように見上げると、束さんの頭が天井から逆さに生えていた。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えつ！？はつ、はいつ。あの、篠ノ乃博士、とりあえず降りてきてください……」「

「とつ

くると空中で一回転、そして着地。まったく、本当に出鱈田だな
人だな……

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・
プリンティング！」

「……出て行け」

頭を押さえる千冬さん。山田先生はすぐに言われた通り束さんを室外に出そうとしたが簡単にかわされた。

「聞いて聞いて！」これは断・然・紅椿の出番なんだよ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんか無くても超高速機動ができるんだよ！」

そう束さんが言ひつと、千冬さんを囲むように小型ディスプレイが展開された。

「紅椿の展開装甲を開いて、ほいほいほいと。ホラ！ これでスピードはまづちり！」

そのあと、すぐにメインディスプレイにも紅椿のスペックデータが表示される。それにしても自然とハッキングしちゃったよ、この人。

「説明しましょ～そししましょ～。展開装甲というのはだね、この天才束さんが作った第四世代型T-Sの装備なんだよー」

その言葉にその場にいる俺以外の全員は驚いていた。

24話 新たな力と作戦会議（後書き）

俊さん、いつもありがとうございます。

感想・ご意見お待ちしています。

「はーい、ここで心優しい束さんの解説開始～。いつくんのためにね。へへん、嬉しいかい？まず、第一世代。これは『IISの完成』を目標としたものだね。次の『後付け武装による装備の多様化』これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』空間圧作用兵器にBT兵器、あとはAICとか色々だね。…で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という現在絶賛机上の空論中のもの。さて、いつくん理解できました？先生はハヤ太くんみたいな優秀な子が大好きです」

「は、はあ……え、いや、えーと……？」

束さんの説明によつて、一夏は完全に混乱したようだ。

「簡単に言つと、どんな時でもパッケージの換装しなくともあらゆる状況に対応出来るという事だ。理解したか」

「あ、ああ。なんとか……」

けど、説明して思つたが正直ここまでやりすぎた機体だとその帰属を巡つて各国の争いの火種にもなりかねない存在になるな……

「まあ、具体的には白式の《雪片式型》に使用されてます。ために私が突っ込んだ」

「 「 「 「え?」」

「つまり、分類されるなら白式も四世代型と同じわけだ」

「もうー！それでうまくいったからなんと、紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼動時のスペックデータはさりに倍プラスだ」

「ちよー、ちよーと、ちょっと待ってください。え？全身？ 全身が、雪片式型と同じ？それって…」

「うん、無茶苦茶強いね。ハヤ太くんの流星^{ミーティア}を除くと最強だね」

束さんの言葉に俺と千冬さん以外全員が完全にポカンとしていた。

「さらには紅椿の展開装甲はより進化したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である^{リアルタイム・マルチロール・アクション}即時万能対応機つてやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃつたよ。ぶいぶい」

もはや、誰も何も言わず、その場はシーンと沈黙していた。

「は」いや？あれ？何でみんなお通夜みたいな顔をしてるの？誰か死んだ？変なの」

「いや、束さん違つから」

俺が突っ込んでいると最初に口を開いたのは千冬さんだった

「束。言つたはずだぞやつすめるなと」

「ナリだっけ？えへへ、つい熱中しちゃったんだよ～」

束さんはやつと、この状況を理解したようだ

「でも、まだ紅椿は完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いつくん。いつくんが暗いと束さんはイタズラしたくなっちゃうよん」

「今の話は紅椿がスペックをフルに引き出せた時の話だ。けど、今回の大作戦遂行ぐらーになら十分おつりが来る」

「だねえ～でも、海で暴走つて聞くとアレ思いで出しちゃうね。十年前の『白騎士事件』」

白騎士事件

十年前。束さんがIIS発表から一ヶ月後に起きた事件。日本を射

程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一斉にハッキングされ、一二三四一発のミサイルが発射された事件だ。そして、そこに現れたのは束さんが最初に作ったIS『白騎士』だつた。

「ぶつた斬ったんだもんね。ミサイル約半分の一二一一発を。あれはかつこよかつたな」

『白騎士』は当時では試作段階になつていた武装をしてミサイルを撃墜していった。

そして、それを見た各国は『白騎士』を捕獲もしくは撃破しようと大量の最新鋭の戦闘機や戦艦などを送り込んだがすぐに軍事兵器の大半を撃破した。それも破壊ではなく無力化をしていった。

この事件以降、ISの関心が高まることとなつた。けど、このハッキングを行つたのは束さんで世界にISの価値を示すために行つたマッチポンプに過ぎなかつたんだよな。

「そつして私のらぶりいISはあつという間に広がつていつたんだよね。でも隙あらば誘拐、暗殺つていう状況はなかなかエキゾチックだつたよ。ウフフフ」

そして……兄さんが束さんをたまたま見つけてBRAVE社で身を隠してあげたんだよな。

「それにしても、白騎士って誰だつたんだろうね」

ブレイヴ

「知らん」

「私の予想でバストハハセンチの」

「ごすつ。鋭い音がした。千冬さんの出席簿アタック、もとい情報
端末アタック。

あれつて、外装は鉄だから普通の人だつたら死ぬんじゃないか？」

「ひ、ひどい、ちーちゃん。束さんの頭は左右に割れたよー？」

「せうか、よかつたな。これからは左右で交代に考え事ができるだ

「おおー！そつかあ！　ちーちゃん、頑いいー！」

「いや、一いつに割れたら考える前に死にますから」

「あ、そつかー残念」

ホント……」Jの人と話してると氣が抜けるな……

「そろそろ話を戻すぞ？束、紅椿の設定にどのくらいかかる？」

「お、織斑先生！？」

セシリアが声を上げた。現在専用機持ちの中でも高機動パッケージ

を持つて いるのは彼女だけだつたため、作戦に参加できると思つて
いたからな。それに仮に作戦とは言え、一夏と一人きりになるチャ
ンスでも思つたのか？

「オルゴット。そのパッケージは量子変換インストールしてあるのか？」

「あ、それは……」

「紅椿は七分あればOKだよー。」

「それでは決定だ。それにデュノアはまだ機体に慣れていな いだろ？」

「は、はい。まだ、最高加速までは出来ないと思います」

たしかにな。さつきの試運転だと引き出せたのは性能の半分ぐら
いだろうしな。

「本作戦の主目標『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルへの攻撃は織斑・篠ノ乃の両名に行
つてもうひつ」

パンツと千冬さんが手を叩いたのを合図に教師陣はそれぞれ設備
の設置などに取り掛かり始め、専用機持ちはそのサポートに入った。
この辺りの手際はさすがと言つて良いな。

と、俺も作業に入ろうとするとき千冬さんに呼び止められた。

「なんですか？織斑先生」

「お前は自分の機体の調整を行え。作戦中のイレギュラーにはお前に当たつてもひつ

「分かりました」

俺はすぐに千冬さんの指示どおりに流星^{ミーティア}の調整を始めた。

午前十一時半。

疾風は他の専用機持ちの面子同様にブリーフィングをしていた大広間にいた。ディスプレイにEVAマークを装備した一夏と篝が映っていた。そして、一夏は紅椿を装備した篝の背に乗る形になつた。

「織斑、篝ノ乃、聞こえるか？」

インカムを使っての千冬の問いに一人はうなずいて答えた。

「今回の作戦の要は、ワシニアプローチ・ワンドウ一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ」

『了解』

『織斑先生。私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか?』

「そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験が皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない」

『わかりました。できる範囲で支援します』

言葉遣いはいつも通りでも、どこか浮ついた声色の簞。

(簞の奴、専用機を貰つて、かなり浮ついているな……とにかくミスをしなければ良いが……)

疾風がそう思つてみると千冬は少し間を空けてから、話出した。

『織斑』

『は、はい』

『これはプライベート・チャネルだ。声は出さなくて良い。……ど

うも篠ノ乃は浮かれているな。あんな状態では何かし損じるやもじれん。いざというときはサポートしてやれ」

『わかりました。意識しておきます』

「頼むぞ」

そして、千冬はプライベート・チャネルから、オープン・チャネルに戻した。

「では はじめー！」

千冬の言葉と同時に、紅椿は急加速で飛び出した。今度は、驚愕の声が上がった。

「なんてスピードよー瞬時加速の非じやないわよー」
イグニッション・ブースト

「なんとこうスピード……」

「あれが、第四世代機の力ですのー!?」

ディスプレイに表示される一人を写した映像の中で一人はどんどん遠ざかり、ものの数秒でそのカメラでは点として写るほど遠のいた。

「……ねえ、疾風」

「なんだ、シャル?」

「今のリヴァイヴもあのくらいのスピードは出るの?」

「ああ。完全に使いこなせれば、普通に出るぜ。それに裏技を使えば、多分、HSの中で追いつける機体はない」と思つた

「裏技?」

「また今度しつかり教えてやる」

疾風は優しくシャルに言つて、すぐに視線を千冬に向かた。

「織斑先生、俺は流星^{リーティア}の最終調整をしてきます」

「何?まだ、調整が終わっていないのか?」

千冬は少し驚きながら、疾風を見る。

「はい。さつきの時間で格武装の調整を終わりましたが、スラスターとかの調整が済んでいないで

「分かった。それでは

「

千冬の言葉を遮ったのはこつもと違つ鋭い真耶の声だった。

「織斑先生！ここから約一十キロの海域にアンノウンの反応が！」

「なにー？」

「数は一。所属は不明！海域を封鎖をしていた先生は一瞬でやられたみたいですね？」

その報告に大広間の中にいる全員の間に更なる緊張が走った。工学園の教員が一瞬でやられた。それがどういうことなのかこの場にいる全員が知っていたからだ。

「……織斑先生、アンノウンの対処には俺が行きます」

「疾風！」

疾風の言葉にシャルは驚き、顔を荒げる。

「……お前の機体はまだ完全ではないのだつが許可できません」

「ですけど、イレギュラーの対処には俺がやると織斑先生自身が言ったではあつませんか。それにこの場にいる専用機持ちでその

アンノウンと戦えるの俺だけです

疾風の真剣な表情を見た千冬は少し目を閉じ、考えて目を開けた。

「分かった。その代わり、命令だ……必ず、帰つて来い」

「了解！」

疾風はそう言って、大広間から走つていった。シャルはその背を中心配そうに見ていた。

「……疾風……」

「テュノア、心配するな。あいつは必ず、命令を守る。必ずだ」

「……はい」

千冬にそう言って、シャルの肩に手を置いたがシャルの中にある心配は消えなかつた。

25話 出撃ヒランノウン（後書き）

感想・ご意見お願いします！

26話 流星、海に墜ちる

旅館を出た後、俺は流星^{ミーティア}を展開して、アンノウンの予測ルートに飛翔していた。

「さてと……教官を瞬殺した相手。本気でやらないとマズイかな」

『そりしでもらわないと困るよ。皐月疾風くん』

その瞬間、オープンチャンネルによつて声が聞こえてきた。声は若い男の声。そして、すぐにハイパーセンサーで見えたのは赤と黒の装甲をしたIIS。背部の赤い羽のようなウイングスラスターからは銀色の粒子が放出した。

「お前か……教官を倒したアンノウンは？」

「ああ、たしかにそつきの邪魔をした奴なら、すぐに倒したよ」

「やつぱりか。それにそのGN粒子は……」

「そう。僕はシゼル・オルフュウス。君と同じGNコアを使った研究者だよ」

同じ、か。たしかに粒子の色は違うけど、あれはまぎれもなくG
N粒子…まさか、俺と同じ考えを持っている奴がいるとはな。

「じゃ、前にエリ学園に無人機を寄越したのはお前か？」

「そうだよ。本当は織斑一夏のデータを取るためだけだったけど、代わりに君のデータを取れたよ。B R A V E 社の副社長、皐月疾風くん

「ふうん。で、お前の今の目的はなんだ？福音か？一夏か？どちらにせよ、あいつらが目的ならお前をここに」

「いや、僕の目的は違うよ……僕の目的は君との戦闘だよ」

「戦闘、だと？」

「こいつ、なに言っているんだ。俺と兄さんの考え方通りに亡國機業^{スク}のメンバーじゃないのか。

「お前は…亡國機業^{ファントム・タスク}のメンバーじゃないのかよ？」

「そうだよ。今は亡國機業^{ファントム・タスク}の一人さ。けど、僕の動きは誰も止められない。だからこそ、僕は君との戦闘を望むんだよ」

「だが、俺はお前の戦闘の意思はない」

「へえ、君は戦闘の意思は無いのか……なら…」

その瞬間、手にビーム砲を展開^{オープン}した。そして、狙いを定めたのは俺ではなく

「君に戦つ気になつてもううだけやー。」

標準は 俺の後ろにある旅館だった。

「なつー。」

その瞬間、耳をかんざくような巨大な音が響いて、巨大なエネルギーの閃光が旅館に向かった。

「くそー！間に合えー！」

すぐにGNシールドからソードベットを放ち、旅館に当たる前にソードベットで展開したGNフィールドで防ぎきった。

「テメハ……」

「少しば、やる気になつたかい？」

「ああ、なつたぞ。テメエの願いどおり、戦つ氣になつてやつたよー！」

「それは良かつた。なら、始めよ!」

シゼルはブーム砲を収納^{クローズ}して、即座に両刃の長剣を展開^{オープン}して、構えた。

なるほど、展開^{オープン}の速さなりシャル並だな。

「ああ」

俺も腰にマウントしてあるGUN-SOードを抜く。

「すいませそ、千冬さん。勝手にミッターを外します……流星リ^{ミーティア}ミッターリリース」

その言葉と共にGUNPOWDERから大量のGUNPOWDERが放出された。

「ああ、行くよ。瓶のGUNPOWDERを見せてじらんー！」

その瞬間、互いに近づき、互いの獲物がぶつかり合つた。

「……ねえ、その肩の大剣は使わないの？本気を出さなきゃ、困るんだけど」「

「さあなー」

さりに力を込めて、相手の剣を弾いて、距離を取りながらモニターを開く。モニターには未だに最終調整が済んでいないGNフルセイバーの詳細なデータが書かれていた。

(まだ、GNフルセイバーの調整はすんていなか。ミーティア流星、GNフルセイバーの調整を任せゆぞ)

そう思いながら、GNソードをライフルモードに変えてシゼルに向けて、撃つ。だが、やはりこの程度じゃ、簡単にかわされるか。

「！」の程度で僕を倒すつもりなのかい？わざのビット兵器も使いなよ

「ちつーなら、見せてやるよ

一斉にGNソードビットを放ち、シゼルに向けて飛ばした。だが、シゼルは余裕でかわしていった。

「ふうん。僕の似ているね

その言葉とともにウイングからビット兵器を放ち、他方向から一斉にビームを撃つた。

「ぐつー。」

すぐにかわせうとした瞬間、直線に進んできたビームの全てが俺のかわすルートに曲がった。

「これば……！」

驚きながらも、ギリギリでGUNシールドとGNフィールドで防ぎきつた。しかし、ビームが曲がる。たしか、あれは……

「その技術は……イギリスのBT兵器の技術か！？」

「へえ、初見でそこまで分かるとはね。さすがだね」

なるほど、大方イギリス政府にハッキングして盗んだのか。だとした、他の国の技術も入っていると考えたほうが良いな。

(まずはBT兵器の技術以外に何があるのか、ためしてみるか)

そう思いながら、再度GNソードビットを放つ。今度はさつきはと違つて、多方向から飛ばしたことにより、何基かはかわせず、直撃「ースだつた。が、シゼルは余裕そつに右手を突き出した瞬間、GNソードビットの動きが止まつた。

「その構え…ドイツのAICか…」

そう言いながら、ビームを撃つ。シゼルはAICを解除してビームをかわした。AICによって、動きを封じられていたGNソードビットはすぐGNシールドに戻つた。

「……ねえ、疾風くん。君の機体とコアのシンクロ率つて何パーセンント?」

「何?」

「だから、シンクロ率だよ。見たところ、まだ臨界点を超えていな
いみたいだね」

「それがどうした!」

GNソードのライフルモードで標準を定めて、撃つ。だが、シゼルは簡単にかわすとまるで興味が無くなつたよつた表情になつてい
た。

「……はあ、駄目だね。臨界点を超えたGNコアを搭載したISがぶつかつたら、どうなるか……それだけが興味があつたのに君が臨界点を超えていなかつたら意味無いんだよ」

「やうか。なら、どうするんだ。俺としてはこのまま帰つてもいいが助かるんだが……」

「……うん。このまま帰つても良いけど……なんか腹が立つてきたな……」

「なにー?」

「僕と同じGNコアを搭載したISを操つているのが、腹が立つんだよ」

「なら、どうするんだ?」

「…………」

その瞬間、ジゼルの周囲に銀色のGN粒子が展開してそれが晴れたときシゼルの姿が消えた。

俺は驚き、すぐにハイパーセンサーで360度見たがシゼルの

姿が見えない。

「これは……『アーヴィング』だとだーー?」

『僕の IIS 『鮮血の牙』の単一仕様能力《銀色の領域》。もう君に僕を見つける』とは出来ない『

警笛! 後方にて空気圧縮を確認

その警告が現れた瞬間、後ろから空気を圧縮した一撃が俺の背中に直撃した。

「ぐつ……！」

少し吹き飛ばされたがすぐに体勢を整えて、攻撃を撃たれた場所を見たがそこには誰もいない。

「これは……?」

『あ、君の鮮血を見せてよー。』

その瞬間、今度はなにも無かつた場所からビームが襲い掛かってきた。すぐにかわそうとしたが今度のビームは直角に曲がり、俺を

襲ってきた。

「がつ……！」

一瞬、意識が飛びそうになつたがなんとか堪えて、体勢を整えると今度は前方、後方、横から斬撃を喰らつた。『絶対防御』が発動していて、シールドエネルギーはみるみると無くなつていつた。

「はあ……はあ……」

斬撃が止むと俺も流星ミーティアもボロボロになつていた。頼りのGNフルセイバーの調整は終わつていない。これは……かなりやばいな……

『さあ、これで終わりだよ』

その言葉と共にまたシゼルの姿が現れる。手には先ほど旅館に攻撃をしたビーム砲を俺自身に向けていた。

警告、警告！敵IIS射撃体勢に移行。トリガー確認、エネルギー装填

「さっきのは威力を押さえていたけど、今度はどうなるかな？」

「くつ……！」

その瞬間、さつきよりでかい音が響いて、巨大な閃光が放たれた。俺はすぐにGNフィールドを広範囲に展開した。が、GNフィールドは簡単に抜かれて、閃光は俺の体を包んだ。エネルギー・シールドで相殺し切れない分の熱波が全身の肌が焼きついていく。そして、自分の体が海に落ちていくのが分かつた。

26話 流星、海上に墜ちる（後編）

感想・ご意見お願いします

27話 互いの決意

「……」
「……」
旅館の一室。壁の時計はすでに四時前に指していた。
シャルロットを含む代表候補生は現状待機を命じられ、自分の部屋にいた。

「……シャルロット。大丈夫か」

「……」

シャルロットのルームメイトであるラウラは心配そうにそう聞く
がシャルロットはじつとうなだれていいるまま、返事をしなかつた。
福音への作戦は一夏が負傷により失敗。そして、疾風はアンノウンが接触した瞬間、アンノウンと流星の反応が消えた。そして、次に現れた反応はその空域から離れるアンノウンのみ。流星、疾風の反応は現れなかつた。

「シャルロット。なにか飲み物を買いに行くが何か、飲むか?」

「……」

シャルロットは何も言わず、首を一度横に軽く振つただけ。ラウラはその答えを見て、悲しそうな表情のまま部屋を出て行つた。

「……疾風……」

部屋に一人になつたシャルロットは疾風の名前を呴きながら、腕に付けているチエーンブレスレットを触つた。その瞳からは今まで溜まつていた涙が溢れていた。

「あの時……僕も疾風に付いていけば……」

「そんなことをしたら、あいつはお前を守りながら、戦うことになつただろ?」

「ツ……!?

突然の声にシャルロットは顔を上げ、声をしたほつを見る。そこには腕を組んだ千冬が立つていた。

「おつ……むら……先生」

「しかし、ボーデヴィッシュが言つていた通りになつてゐるな

「なにか……ありましたか……」

「いや。現状待機は変わらずだ……疾風の搜索も現在、教師部隊で行っているが……いまだに発見されていない」

「そう……ですか」

「福音が見つかり次第、再度出撃になるだろつ。体を休めておけ」

「…………はい」

小さく返事をすると千冬は部屋を出ようとした時、ふと、足が止まつた。

「ああ……そういえば、お前以外の専用機持ちがなにやら、動いていたぞ」

「みんなが、ですか……？」

「大方、福音を独自で探して再出撃をする気だらうな。馬鹿者どもめ」

「えっと……それをどうして、僕に……」

「さあな……だが、もしもの場合に疾風がいたら、どうしていただろう」

「…………はい一分かりました」

シャルロットは千冬の意図に気づき、表情を変えて、すぐに立ち上がり、すぐに部屋を出て行った。そして、すぐに思い当たる場所、一夏の部屋に向かうとそこには篠、鈴、セシリ亞、ラウラが驚いた顔で急に入ってきたシャルロットを見ていた。

「シャルロット！？お前、どうしてここに……？」

「みんな……僕もみんなと一緒に戦いたい！」

「……あんた、大丈夫なの？」

「僕は大丈夫。だから、僕も戦う

その場の全員は覚悟の灯つたシャルロットの瞳を見て、全員は何も言わず、縦に首を振った。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墮とすわよ」

「うんー。」

鈴の言葉で専用機持ち全員で福音の作戦会議が始まった。

(疾風…疾風が帰つてくるまで僕がみんなを守るよ)

「ん……」
田を開けると俺は一面の草原の場所に立っていた。優しいかぜが頬を当たり、気持ち良い。

「俺は一体……たしか、あいつにやられて……」

「ナリヤ

ふと、後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには長いブロンドの髪に純白のワンピースを着た少女がいた。

「君は……？」

「……私は貴方に作られて、貴方の剣です」

俺が作つて、俺の剣？それつて、もしかして……

「君は……流星なのか」

「はい。そうです。主、申し訳ござりません」

と、少女 流星は急に深々と頭を下げる。

「な、なにがだよ。もしかして、俺が墮ちたことを言つて居るなら、それは俺の責任だ。流星のせいじゃない」

「いいえ。私に着けてくれた新たな力の調整を大切な場面で完了できました……」

「新たな力？ああ、GNフルセイバーか……」

「はい……私が器と深くシングロ同調したせいでマスターのお手を煩わせてしまいました」

「まあ……そこまで自分に悪く思つた。俺は今までお前のおかげで戦えたのだからな」

「ですけど……」

「俺、過去のこととをグチグチ言つの嫌いなんだが」

「は、はい。すいません……」

なんか、さつきから謝られてばつかだな……

「さて、と。俺もそろそろ行かないとな」

「え? ど、どこですか?」

「みんなの所にだよ。あいつらのことだ。俺の考え方通りに事が進んでいるなら、あいつらは福音と戦っている。助けに行かないとな」

「…………どうして……」

「ん?」

「どうして、こんなボロボロになつてゐるのにまた戦おうと思つたですか! ?」

流星はもはや怒鳴るよつて言つていた。

「どうしてって……答えは簡単だ。俺は仲間や大切な人を守りたいだけだ

古くからの大切な親友の一夏と篠。E.S学園に入つて出来た友達のセシリ亞と鈴、ラウラ。そして、一生を共に生きると誓つたシャル。俺はみんなを守りたい。誰一人に傷ついてほしくない。だからこそ、俺は戦うんだ。

「 そうですか……なら、行かなきゃいけないですね」

流星^{ミーティア}は軽く頷いてから優しく微笑み、右手を差し出す。

「 ああ」

俺はその手を取るとそこから優しい光が生まれ、俺と流星^{ミーティア}の体を包まれた。

() 賴むぞ、流星^{ミーティア}

() はい、主

27話 互いの決意（後書き）

感想・ご意見お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0640s/>

IS<インフィニット・ストラatos> 流星の騎士

2011年8月23日16時15分発行